



新編
國史

五
一

西垣文庫
文庫10
6556
1



文庫10
6556
1

東都名所圖

三

松濤軒長秋翰
長若川雪旦園畫

西澤亭

東都名所圖

都名所圖會始出。遠在余成童
時一閱之。即謂此可以供卧游
矣。則江戸亦不可無是輯也。後
數歲聞諸西山大久保翁有齋
藤幸雄者。有探勝之癖。方撰江
戶名所圖會。採擇稍遍。描寫頗

盡然獨病江戶稱名所者僅僅
不足俚指也余謂凡名所之稱
本出於咏歌者流蓋其設法謹
嚴畫一繼今有山秀水麗足以
吟咏而其不為古歌所取者不
得稱之名所是其所以雖世有

汗隆要不失為雅馴也然名者
賓也實者主也主豈可以賓加
損焉哉矧秋里氏之撰非惟所
謂名所而已神祠佛寺說係恠
誕藪陌綺街事涉猥瑣者亦網
羅而不遺乎矧復江戶之為地

武野之曠。秩額之峻。澤深之永。
玉川之澄。絡繹邦域。霞閣思出。
之宜春。真土菴崎之宜。焯衿帶。
郊垌。其勝殆不讓上國乎。是亦
何病之有。翁領而是之。既而幸
雄沒。翁亦尋逝。終不知其成否。

然而秋里氏所著拾遺與味河
泉攝及一二諸州名所圖會者。
陸續上梓。盛行於世。余於是乎。
悵然恨幸雄之輯愆。期失時而
又聞其男幸孝善。追其志。再搜
三索。蒐聚滋廣。猶未公於世。幸

孝亦以父化戊寅沒又遺托之
男幸成牽成泣受之龜勉不怠
校讐極力竟竣其功間者幸成
突然抵門通刺出其全帙示之
且需序言是蓋由余注日介人
促其成也余乃一閱三歎追念

與西山翁言三紀於茲喜悲交
集又憾幸雄牽孝與西山翁皆
不觀其完成矣然其所以歷年
若此其久者敬慎遺托不敢輕
舉則死者而有知必曰予子若
孫相續能成吾志矣抑畝會之

撰固供卧游亦以充童觀非所以專示大方若夫覽者尤其不雅馴則可謂不知類矣余更為作者分疏其由云天保三年閏月冠山松平定常撰



與西山真吉之河三亥書

和嘉平刻序之四

海內地名著於古人和歌者宗祇澄月之徒攬而輯之稱之名山川之險易風俗之淵遠名物之同異可坐而識也吾江戶名所顯於古人和歌而晦於當今者不少矣多麼川調布著於延喜式霞閣載於武藏風土記堀並井彙於紀貫

之僧西行之歌。皆名所之顯於古。而今失其蹤者也。及考古之士。過而訪之。林壑再啓其闕焉。泉石再炫其奇焉。然無勝情者。則不能也。齊藤幸雄有勝情矣。有勝具矣。江戸勝區名。從彙於榛叢。三墟之官。而不可識者。搜經谷。披窮林。或訪之。古老或徵之。新碑。又自史傳地誌。諸家名所。和歌紀行之書。以及稗說野乘。苟有足以資考鏡者。必博採。總括。闡發於澠。論不可問之蹟。為其名所。則著之繪事。收山河。於尺幅。駐萬象於筆端。亦可。

以當卧遊矣。於是百年湮晦之
蹟。區英雄百歲之故。愛石士列如
之。芳躅。榮然。而復炫其奇。乃所
謂物之能自見。待人以章者。驗
是。未及成書。遂疾。而逝。識者
惜之。嗣子章。孝克。繼先緒。補
未備。余先人與章。孝。締交已久
矣。嘗約為之序。而予。孝。享年不永。
亦繼而捐館。嗟夫。章。存。胡為。所。稟
於性者。厚。而所享於年者。獨為。殊。
不。獲。痛。惋。也。及。今。守。成。能。承。遺。誠。
以一人而任二世之編纂。卷帙為繁。
採掇亦博。而補稍悉。審契。勤必
當。始。克。成。斯。浩。漸。之。編。可。謂。章。脩。

有。人。述。者。無。憾。矣。乃。走。不。微。序。於。
 余。可。云。余。先。人。易。簣。蓋。八。稔。矣。而。余。
 以。薄。技。浪。代。先。人。之。任。太。方。之。謂。
 固。所。不。免。也。天。保。癸。巳。春。三。月。

江戶 龜田長梓 謹識

牧野信之 

此書乃係... (Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side or a very light inscription)

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a military or administrative record. The script is dense and fills most of the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a military or administrative record. The script is dense and fills most of the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a collection or inventory. The script is dense and fills most of the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a collection or inventory. The script is dense and fills most of the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a dark ink on aged paper. It begins with a large initial letter, possibly 'A', and continues with several lines of text. The script is dense and characteristic of the early modern period.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a dark ink on aged paper. It begins with a large initial letter, possibly 'A', and continues with several lines of text. The script is dense and characteristic of the early modern period.

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise. The text is written in a cursive style and is contained within a rectangular border. The script is dense and fills most of the page.

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise. The text is written in a cursive style and is contained within a rectangular border. The script is dense and fills most of the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowed paper. It consists of approximately 12 lines of text, starting with a large initial letter. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowed paper. It consists of approximately 6 lines of text, starting with a large initial letter. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, written on the left page of the open book. The text is written in a fluid, connected style with some ink bleed-through from the reverse side.

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, written on the right page of the open book. The text is written in a fluid, connected style with some ink bleed-through from the reverse side.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper and is contained within a rectangular border. The script is highly stylized and difficult to decipher, but appears to be a form of early modern European cursive.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper and is contained within a rectangular border. The script is highly stylized and difficult to decipher, but appears to be a form of early modern European cursive.

多岐にわたるの故に、
 義にせむとて、
 阿の部とよび、
 のらにほむとて、
 申るも、
 心や、
 松海新長秋志の次

凡例

凡此編の次序ハ 大城と以て首と 餘ハ南方小回環す
 近北斗七星の位小配當て都て七卷と以て全終す
 凡江戸の地ハ廣大盛壯して名流士の芳流ハ蔚然と
 して使冊と照曜し琳宮梵刹ハ林の如く森なりて悉く
 卷々小違ふ一故みその中みも由致河を撰て録せ或は
 亡ひて澄と志うるなり其土人の口碑亦存するもの
 或ハ石根の浮説中々言妖妄小説そのハ多しと者
 然りと雖人は小勝交して傳稱の久しなり其ハ今
 評隲を加ふる小録に其ハ姑く其後と載せ大伽藍
 素壁事實と亡失して詳くふる事能く且小祠支院
 新建勸誘のり其ハ悉く其れと闕きて汝古博物の士
 他日後輯の成る小及ひて附載せんと欲するもの

凡方位と示す小一節は、循うて某の東西南北に在りて標は
又危布と河ふその地をむらむとす。傳の危布と云覽るの
おまを推て標準とせし。

凡引用の書全文と載せしめてその綱要のそと撮る至意と
摘するの、紙頁増多しと覽るの、所厭倦のそを生せん。又
思ふ所あり、次小神社佛刹の傳り、所の佛像宝塔書畫
諸什蓋の類、神奇附會、小流りて其質、澁す。うらうら、社司
寺僧の言ひ傳り、所不任せし。記を又武藏風土記の殘編ハ
偽書ありと雖、古來より世に傳へる書あり、姑く是と
用也。その取捨、おむりて、覽る人の意、おまするのそ。

凡神社佛閣の幅員、方位と圖する、おまする。尚、今、其形勢と
撰寫、以、且、地名の、間、お、時、遊、觀、の、形、勢、と、繪、く、其、真、態、度、
風俗、後、飾、容、儀、お、以、其、余、尚、今、の、形、容、と、其、舊、地、お、基、て、画、す。

りの、各、時、と、分、り、是、地、の、風、光、と、潤、毛、し、て、地、邦、の、人、と、し、て
東都、盛、大、の、繁、榮、お、る、と、知、り、志、お、且、童、蒙、は、觀、覽、お、倦、む、り
か、お、り、志、お、り、ん、り、為、り、お、り。

凡、此、地、名、所、の、中、武、藏、野、隅、田、川、二、布、と、以、て、第、一、の、勝、槩、と、以、故、
隅、田、川、と、武、藏、小、分、ち、て、六、七、の、二、卷、お、記、せ、り、西、岸、お、其、菴、は、白、峰
雲、間、小、峰、一、東、岸、お、筑、波、の、翠、鬢、晚、霞、お、懸、し、て、山、水、の、風、致、備、り
縱、觀、の、美、は、地、お、停、ま、る、り、依、り、武、藏、の、全、勢、と、眸、中、お、收、ん、と、欲、せ、
は、武、藏、と、對、照、し、て、其、全、局、と、知、り、へ、り。

凡、真、間、の、舊、跡、お、下、総、の、地、お、り、て、武、藏、お、り、す、と、い、く、も、纏、り、お、
利、根、川、と、隔、つ、る、の、お、し、を、實、は、武、藏、集、以、降、は、芳、蹟、お、り、且、
文、人、墨、客、吟、筵、と、負、ひ、て、遊、筇、と、曳、く、り、は、必、し、風、光、と、賞、し、
第、一、の、壯、觀、と、以、ま、り、於、て、豫、金、志、の、例、お、倣、ひ、と、倣、せ、し、
は、此、地、内、お、收、む、覽、る、り、は、志、お、と、諒、せ、し、

附言

本書ハ祖父ノ寛政中ニ編シテ父縣麻呂ノ刑補文化ノ末ニシテ
ナリト文政ノ今ニシテ上梓ノ功ニ終リぬ凡年序ニ經リテ二十有餘年
江都蕃昌ニ隨テ神社寺院境址沿革ナリノ頗多ク一白ノ小祠モ
湊更ニ壯麗スル大社トシテ總ノ仲菴モ巍然スル莊嚴セザレズ
之ノ少クハ或ハ祝融ノ災ニ罹リテ樓門回廊ト燒失シ礎石ノミ
存スルノ類無廢枚舉ナリト然リトシテ時々是ト改メテ修スル
友ノ今時ノ跡ニ差フリノ多ク見テ今ノ少クシテ

齊藤月岑藏

江戸名所圖會卷之一

天樞之部目錄

武藏國號基	日本武尊秩父岩倉山小武器と收りノ圖
江戸始元	大江戶東南の市街より内海と望の景
元且諸侯登城基	松東小治
八代曾河岸	梅林坂 平河 大満宮
沙羅橋	道三橋
天王河原所	常盤橋
浮世小路	十軒店 同 離市
福田村舊址	白藤橋 石河
本銀町土居	今川橋 水井
護持院舊地	荒洲 飯田町
田安基	築土明神舊地
	飯田町 中坂 九坂坂
	神田明神舊地
	本石町時の鐘
	子代田村舊跡
	道三橋
	日本橋 同 魚市
	通町 大橋町三井 呉橋店 本町藥種店
	堀留 同 陸河原
	子代田村舊跡
	神田橋 同 橋
	小川町基立 新田
	新茶の水

水道橋 駒込

昌平橋 三橋

藍澤川 業師

柳橋 業師

歌舞伎芝居 櫻町中村

新大橋 三派

瓊塚 天満

伊雜大神宮 三の橋

新川大神宮 新川酒問屋

五比須前橋神社 湊橋

駿河臺

神田川

辯慶橋

清水如所宅地

古東町旧地

江戸橋

天正所旅所

俳仙其角翁宅地

靈巖島

永代橋

淡炮洲

筋違橋

丹後殿前

柳東封疆

沙草橋

杉森福為社

加茂三淵福為社

日田市

瀧の渡

茅場町藥師堂

祖來先生居宅地

隨見堂

藥師堂福為社

半井上養翁居宅地

了然禪尼菴宅地

江風山月樓

采女系 采女井

新橋

三縁山増上寺

日比谷稻荷河

真福寺

金地院

西窪八幡宮

赤羽川

御穂神社

佃島同白魚佃

暖敷若姬

本挽町宮舞伎芝居

汐留橋

尾張町呉後居

織田有樂齋第宅地

西本願寺

澄島

烏森稻荷社

愛宕山推現社

天法寺

飯倉

赤羽橋

麻島神社

任吉明神社

寒橋

織田有樂齋第宅地

尾張町呉後居

飯倉神明宮

菽小治

愛宕山正月三日

城山

慈野推現宮

心光院

毘沙門堂

西本願寺

澄島

織田有樂齋第宅地

尾張町呉後居

飯倉神明宮

菽小治

愛宕山正月三日

城山

慈野推現宮

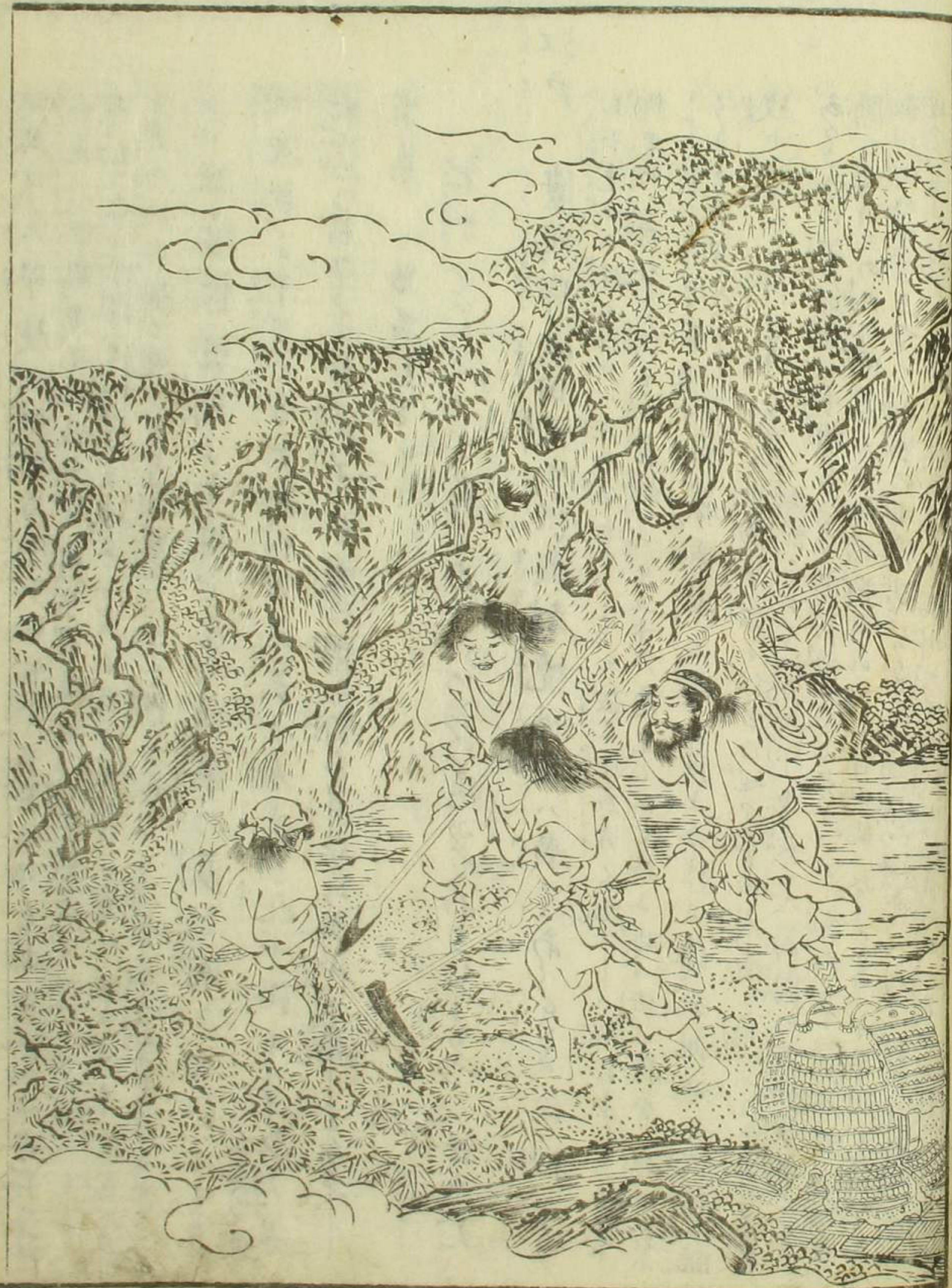
心光院

毘沙門堂

三田 春日明神社
 功運寺
 飛塚
 伊四子薬師堂
 高輪う系
 稲荷洞
 高杉稲荷社
 綱坂
 月波楼
 濟海寺
 祖来先生墓
 牛小石
 泉岳寺
 常光寺
 東禅寺
 産湯水
 三田八幡宮
 竹葉寺舊址同古車
 魚藍観音堂
 高輪大木戸
 如來寺
 寶藏寺
 谷山
 小山神明宮
 聖坂
 潮見坂
 太子堂庚申堂
 新神社

武藏

東海道小屬七和名類聚抄曰牟佐之國府多磨郡不在と云く
 武藏國上古八東山道の内ふる光仁天皇の宝龜二年辛亥冬十月己卯
 大政官奏て東海道小屬せしむる一續日本紀不るなり
 橋樹 荏原 豊島 足立 新座 入間 高麗 比企 横見 埼玉 大里 男衾
 幡羅 榛澤 那珂 兒玉 賀美 秩父 葛飾 等以上二十二郡あり
 那珂等の三郡を加へ葛飾を除て共四郡とす詳るなり貞享三年丙寅三月利根川の
 西を割て武藏國小屬せしむる昔八本所葛飾の巡浅草の川を國界として川より東の地ハ
 一圓小下総國ありと右云々今ハ葛飾郡の半を割て利根川の以西を武藏國此
 葛飾郡と以て東を下総の國の葛飾郡と以て和名抄武藏國管二十一とあり葛飾郡
 今是を加へく二十二郡と和名抄葛飾を和名抄と訓も同書多磨も多波と訓も有り
 古事記牟那志小作る舊吏記胸刺小作る萬葉集小年 同くむとと稱せしむ
 其義ハ風土記抄小武藏の國秩父の嵩ハその勢ハ勇者の怒り立つる
 也日本武尊此山小東夷征伐の祈願をこめあひその後東夷盡く平治
 せしむるその武器を秩父岩倉山小納めあひよりこの國をむとと稱せしむ
 たり乎後 稱徳天皇の神護景雲二年武藏の國より白雉を獻しける公
 卿の奏せし言ハ載武崇文の祥ありとよりて此國を武藏の字を以て嘉名とせしむる
 續日本紀稱徳紀云神護景雲二年六月癸巳云武藏國橋樹郡人飛鳥部吉志五百國於



倭健戎容猛
征西又伐東
腰間十束劍
草薙偃威風
春齋子

日本武尊東夷征伐
の時武具以秩父
岩倉山不收斂
是武藏國号の
濫觴なり

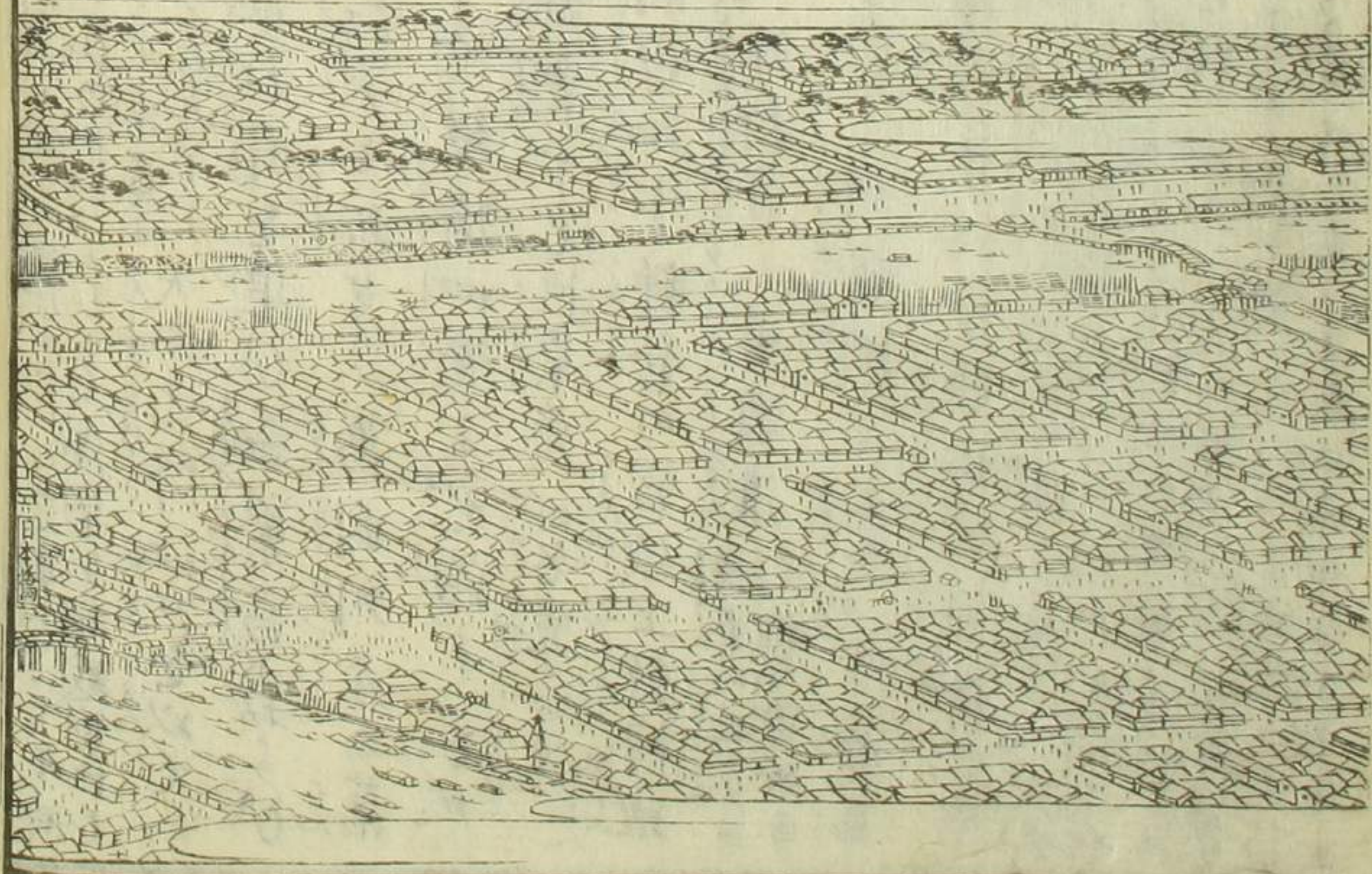
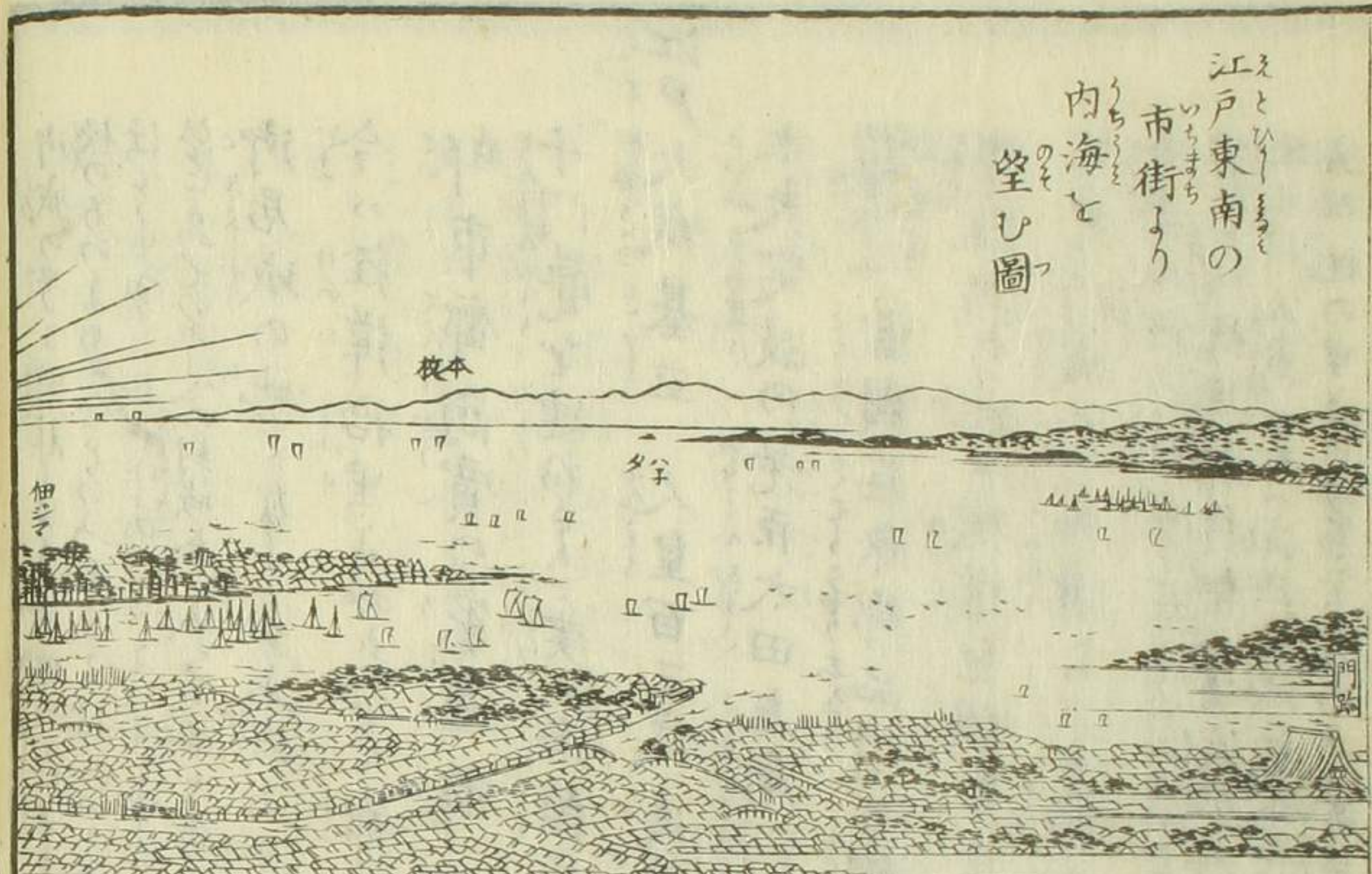
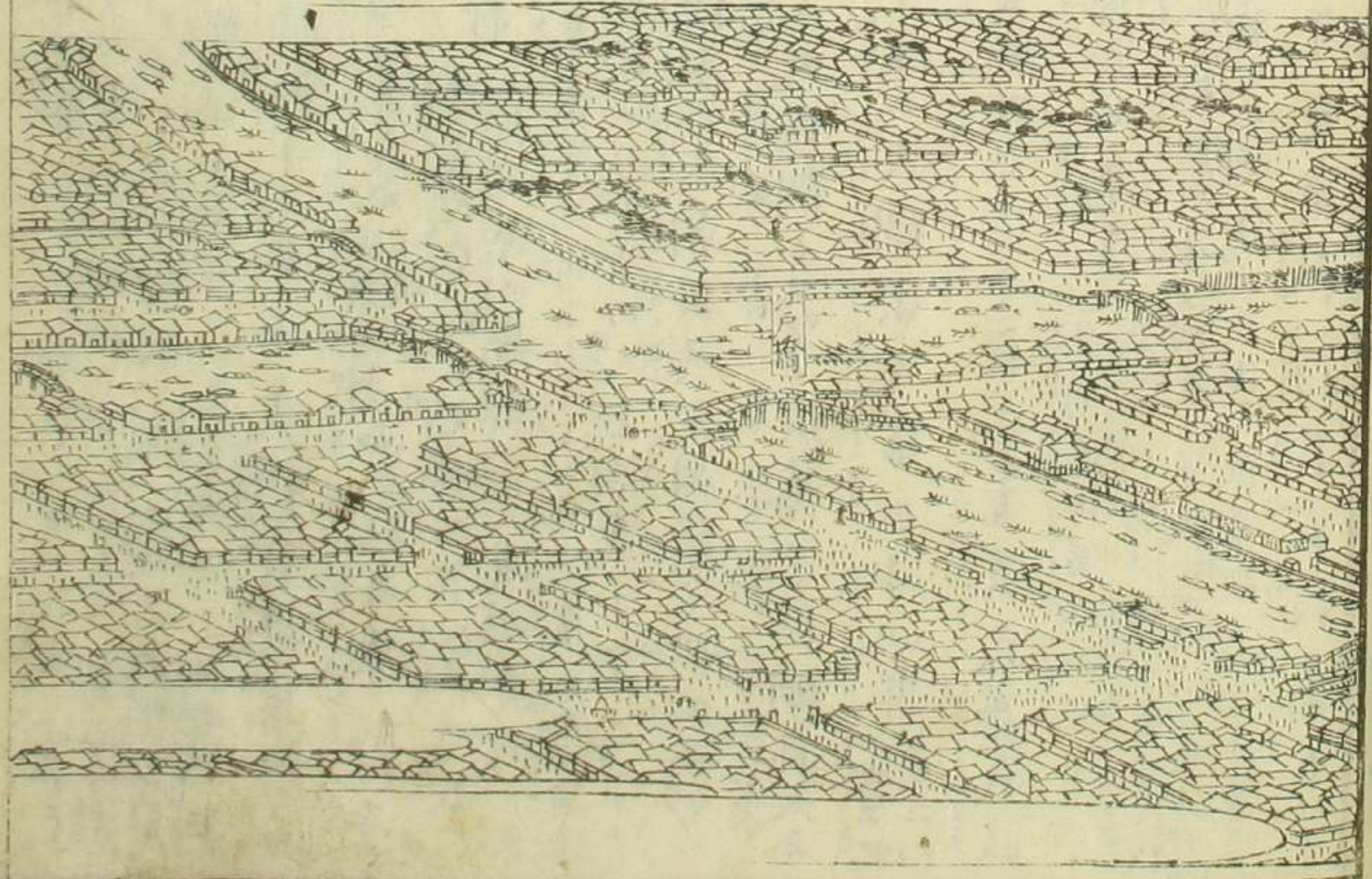
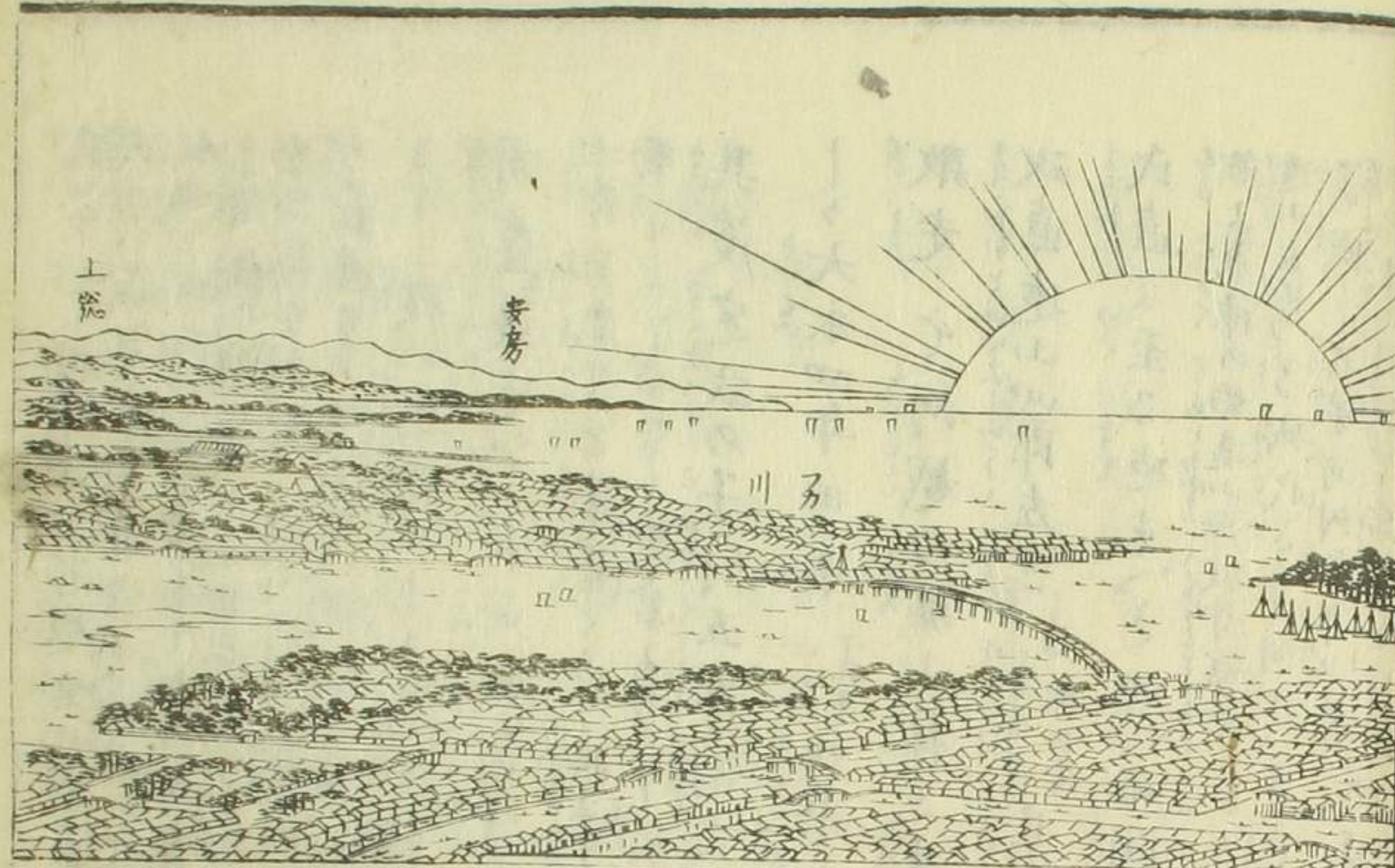
同國久良郡獲白雉獻焉即下郡鄉議之奏云雉者斯良臣一心忠貞之應
白色乃聖朝重光臨之符國号武藏既呈武崇文祥とあるハ云々
牟邪志の三字を好字に改め二字に定め武藏と書て志の文字を畧せ
一より此白雉の瑞ふつと武藏の二字を祀して奏する詞より今の名あることあり
東照宮様當國は大成を志す鴻業の基を闢るさるひより
四海竟に干戈の勞を忘れ万民長に太平の化を浴するを乃是
天意のあつてむす所中々國の躰も自ら昇平の御代に應じたるあり
家集 物名むさし

抄りせむさしと云々わりの遠くわるとあり 材本丸

江戸 豊嶋郡峽田領とに其封境往古ハ廣くわたりるに似たり

白石先生の説は江戸ハ庄の名あり云云按中古庄と唱へハ郷のよをいふ
郷里共は佐登と訓を令義解云九五十戸為里と云々然る時ハ佐ハ狹登ハ処の畧ハ
して廣大なるの意ナ 武藏國風土記に在土小作傳云此地ハ大江に臨
故ハ江戸と稱せりとの事 甲陽軍鑑に江戸の辺を中武藏と唱ふことあり義
ある時ハ江戸の地ハ重長領せしなり 南向亭ハ平川ハ水と
隔て今の三の丸の地ハ江戸の郷日輪寺の方ハ神田郷なりと云々平川ハ水と
飯田町の下よりつゞく入堀の水脈是なり又同記に今の神田の
邊よりハ江戸と云々地あり 撰州大坂御城内の雁木坂旧名を大坂と号く後世

御城の号ハ呼れり彼地の惣名とある江戸の名ハ此類なり云云寛永二十年冊
校のあつたまゆりとの冊子に依りて白雲の葉末にむす浅草と打越のけと
ほしとあり抄りて江戸はつとありとあり上の意ハ江戸を以て
ひとありての封域今ハ廣大なりとあり上の意ハ江戸を以て
清居城の地と名し故小日を重ね月を追ひ益繁昌ハ
今ハ徑緯拾里ハ地ありて都々江戸と稱せり萬國列侯の藩
邸市鄣商賈の家屋鱗差して縦横四衢ハ充滿ハ万戸
千門甍を連ねり実ハ海陸の都會也扶桑第一の名境といひ
江戸大城基立 人皇百三代後花園帝御宇鎌倉の官領上杉修理
太夫定政の老臣太田左衛門太夫源持資入道道准 持資の傳弟五
の條下ハ 當國荏原郡品川の館あり一時勝地と云々を以て豊島
郡江戸の地ハ城營を闢むと一康正二年丙子經始一長祿元年
丁丑巧成と道准と云々移り住む 江戸名所記等の説ハ父資清入道
持資相継ぐ居城とすとの事ハ四月上杉修理太夫持朝入道武州河越の城を取立らる太田備中入道ハ岩付の城を
取立同左太夫ハ江戸の城を取立るとあり是を證とす又城書云千代田
宝田祝の里といふ所をとりて城地とす又一説ハ千代田春田宝田等の三

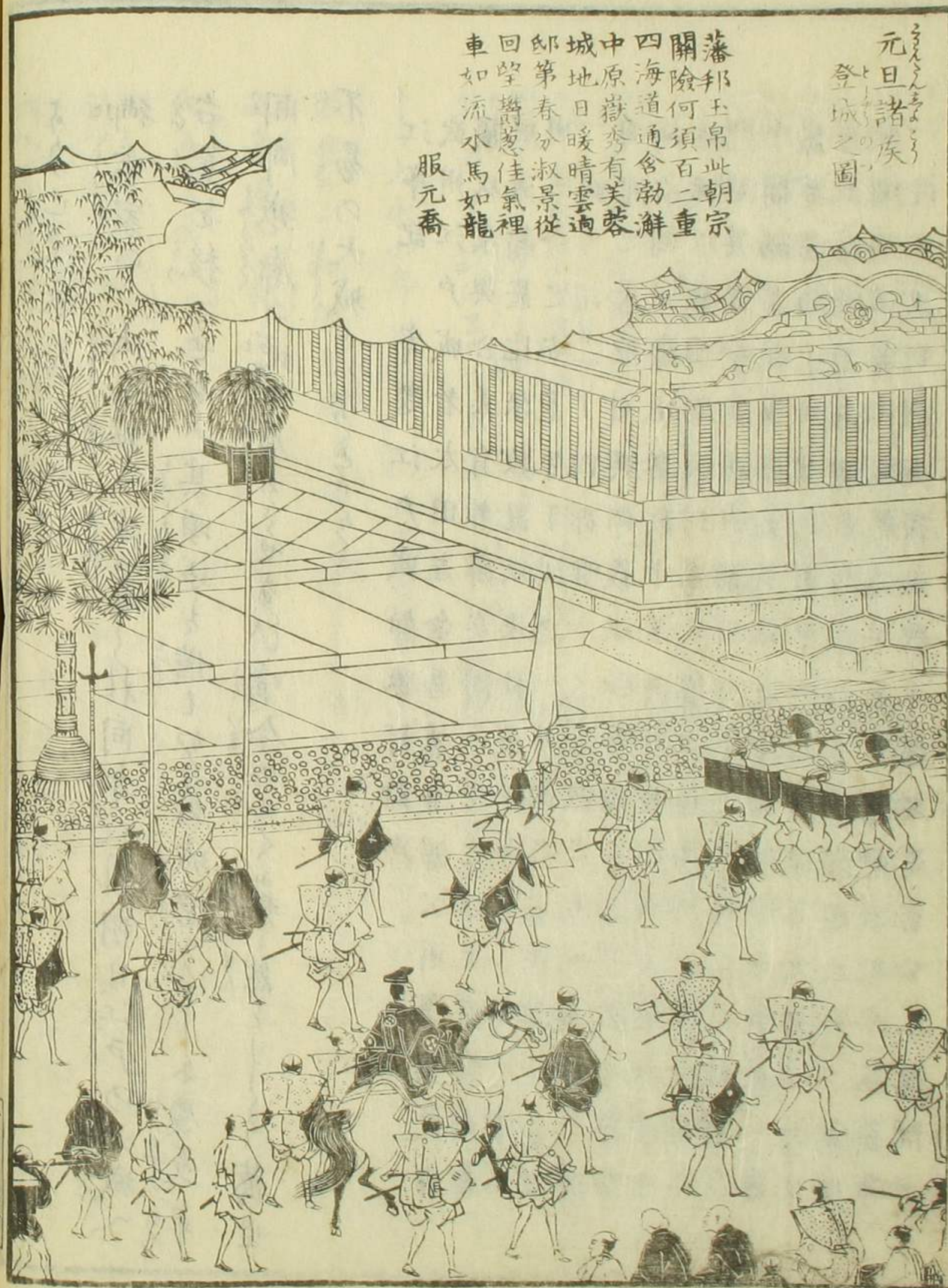
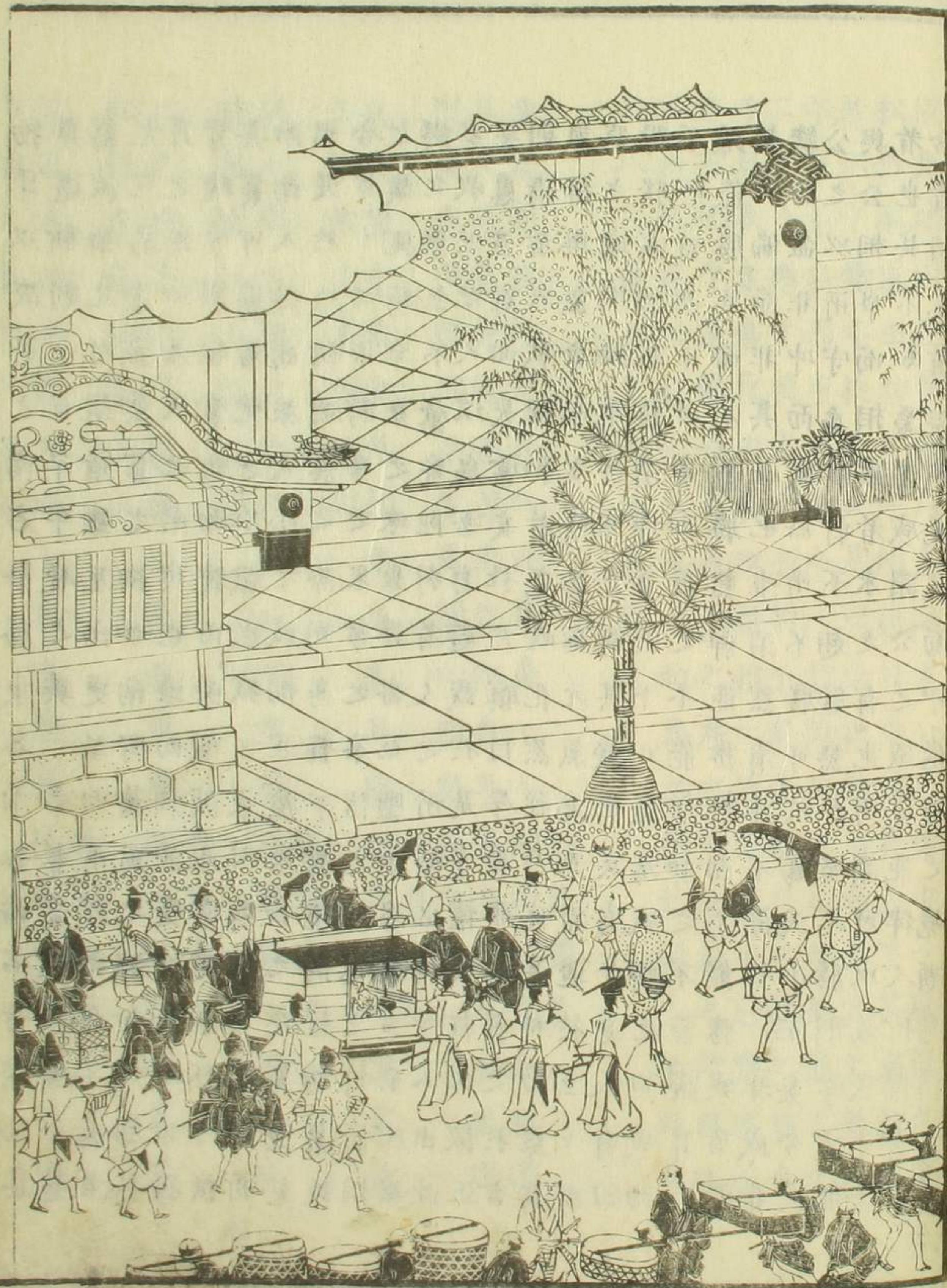


江戸東南の
市街より
内海と
望む圖

江亭記 寄題 江戸城 静勝軒 詩序 公所 肇築也 自
 武州 東戸 城者 太田 左金 吾道 源公 所肇 築也 兼
 關以 東與 公比 來者 亂以 欽一 命者 八州 內公 才三
 風流 藉甚 比來 係于 武一 之安 危係 于公 之
 州三 州之 謂二 危係 于武 一之 安危 係于 公之
 舟車 之會 他州 異郡 唯武 一人 夫城 之為 地險 于公 之
 峭立 固以 繚垣 者數 十茂 以加 焉壘 之高 十餘 丈懸 崖
 脉石 以鄰 碧架 巨材 爲之 紆纒 以爲 出入 之備 而軒 鐵其
 門閤 其礎 磴徑 左盤 右紆 聿升 其壘 庫庑 之軒 殿時 屬
 中閣 若于 西直 舍翼 其側 戊樓 保障 庫庑 之軒 殿時 屬
 爲屋 若于 西直 舍翼 其側 戊樓 保障 庫庑 之軒 殿時 屬
 白瑠 若于 西直 舍翼 其側 戊樓 保障 庫庑 之軒 殿時 屬
 碧瑠 若于 西直 舍翼 其側 戊樓 保障 庫庑 之軒 殿時 屬
 一目 瑠瑠 若于 西直 舍翼 其側 戊樓 保障 庫庑 之軒 殿時 屬
 一碧 瑠瑠 若于 西直 舍翼 其側 戊樓 保障 庫庑 之軒 殿時 屬

御當家の 御居城と定させしれ同年八月朔日江戸の大城へ
 台駕を移させし其頃迄は僅七かりの城営をせし慶長五年
 間御城廓の地を廣めさせし唯今のゆく巍々然と々々萬世
 不易の大城とハなせりしなり

武州江戸河越若付者不城墨を築りしむとありて一か所或ハ地名
 或ハ人名とす大田道寺支山翁云天正より以來ハ千代田城と云々其昔持資
 城中ハ燕所の室と云々軒の南を静勝と号す東を沼柳と呼び西を雪門
 野原の指は應々万里居士江戸城ハ山水の美を眺望し窓含西嶺十秋雪門
 東吳萬里船と云々古人の詩を引く然る文明十八年丙午持資諱害せり
 大田稱揚せり此地之美景ハ江亭記
 同豊後守をしく此城を守らしむ 鎌倉大草紙ハ文明九年江戸の城に
 次郎自胤等を置置とあり按之項長尾景春武州にあり兵を催せ不道灌
 戦ひしありて一鎌倉あり江戸の城ハ是等の人と居置しありしなり
 其後定政の子同五郎朝良同修理大夫朝興共相續て此城より
 一々大永四年甲申 二月 北条左京大夫氏綱より改落され朝興大
 敗走して河越の城に移る是より後ハ氏綱家人富永神四郎 小田原記
 政直遠山四郎左衛門 小田原記 某等を城代とすこころふ置置氏康氏政
 氏直に至る迄は四代の間北条家より属す 是間遠山富永兩家あり代
 然る永祿の始遠山丹波守富永三郎左衛門兩人北條國府墨江戦死す天正の頃ハ北条治朝
 遠山左衛門守城代たり同十八年北条家滅亡の頃遠山左衛門佐景政を小田原に
 籠城し其弟河村兵部守備を浦 天正十八年庚寅秋七月 其家没落せし
 同遠山丹波守富永三郎を以て守る



元日諸侯
登城之圖

藩邦玉帛此朝宗
關險何須百二重
四海道通含渤澥
中原嶽秀有芙蓉
城地日暖晴雲過
邸第春分淑景從
回望鬱蔥佳氣裡
車如流水馬如龍
服元喬

舍者與公缺於躁不躁窮氣則矣室餌之合出而其背月凡萬斯物
雪也公之非一能缺勝之神清慮其天衆旄於入可兮皎焉拍斯以
泊其相以盈偏勝盈寒而靜則氣成躁而人卒市樹商旅地紫天晨翫日南
船不爭而守冲非而冲熱鬼而詞和常為聚之房雲之小之巖也
者知而相扁而後無所唯泊然清熱而靜灣矣馬道其神發之而於散出此藥相
浣焉戰者軒不所勝然清熱而靜灣矣馬道其神發之而於散出此藥相
花威者未之翅也熱所為不天正機也為乃養弗已其搖而寧其言正
老謂公之有勝也無所為不天正機也為乃養弗已其搖而寧其言正
蜀中之能謂所為不天正機也為乃養弗已其搖而寧其言正
倦愛所謂所為不天正機也為乃養弗已其搖而寧其言正
遊境人以為則正矣非成皆帶夫而曰無其言正
題人以為則正矣非成皆帶夫而曰無其言正
所懼天字今也非帶夫而曰無其言正
及矣下宙也非帶夫而曰無其言正
而如正間也非帶夫而曰無其言正

以松此地同此景搗以為藻片在公乃吟中一風流爾聽
者六十年矣餘年於幼至老鴻以藻片在公乃吟中一風流爾聽
亦有三子題于丙申夏適介人請及政且要屬能言者蓋
予曰我未嘗東遊于適介人請及政且要屬能言者蓋
序可也予未嘗東遊于適介人請及政且要屬能言者蓋
吳昇也遂以讓弗允蓋予之序乘幸于所目擊與政以
秋八月羣玉峯叟蕭菴龍統而為之序文也明八年丙申

傳聞靜勝軒中景四面窻扉一々村巷靈彥
芥天晴碧海無期泊舩處關心西嶺成堆塊火如徒遠
樹來我老無期泊舩處關心西嶺成堆塊火如徒遠
兵鼓聲中築受墮江君延客日臨應風帆多少載詩
去吹雪士峯晴墮江君延客日臨應風帆多少載詩
籍々威名關入鼓中又知天下有英雄鼓聲不起邊城
靜驅使江山入鼓中又知天下有英雄鼓聲不起邊城
江戶城高不可攀我公豪氣甲東關三州富士天邊
雪收作青油幕下山我公豪氣甲東關三州富士天邊
雲連雪嶺水連吳城上軒窻閑畫圖最愛似留行地
日碧天低野入平蕪

寄題左金吾源大夫江亭

以	山	也	佳	勅	為	而	關	左	光	庶	士	中	地	華	客	華	鶻	士
翼	以	水	攀	木	而	兼	左	金	晴	經	嶺	仙	西	館	萬	載	嶺	寄
然	涿	歷	以	蔚	不	燕	要	形	吾	丹	籍	憑	嶺	相	頃	泊	衝	題
乎	碧	々	躋	然	覺	白	嶽	勝	源	青	滿	誰	當	仗	玻	前	天	左
其	人	以	爲	而	日	沙	者	之	大	難	床	說	窻	主	黎	天	東	金
中	家	在	俯	中	之	並	江	雄	夫	畫	羅	與	雪	亦	可	宇	海	吾
東	鱗	杖	以	秀	將	海	戶	以	江	戰	俊	蕪	界	賢	鈞	低	瀾	源
武	差	展	臨	迺	晚	以	其	武	亭	圖	英	夫	天	江	齋	北	靜	大
之	乎	之	烏	左	也	北	武	爲	記	外	鷗	子	珠	亭	帆	南	中	夫
一	北	下	四	金	翠	玉	之	冠	惟	渚	新	赤	履	茲	南	楫	勝	江
都	南	南	面	吾	壁	簪	冠	武	帷	鷺	架	壁	三	試	日	斜	景	亭
會	而	顧	斗	公	丹	之	乎	者	運	汀	有	休	十	武	武	畫	中	看
有	白	則	絕	源	崖	山	距	大	籌	春	高	誇	門	城	西	武	看	湘
揚	搶	品	直	大	屹	羅	相	國	張	畫	城	河	前	下	武	看	一	山
一	紅	川	下	夫	然	帶	府	也	氏	靜	閭	陽	後	容	武	一	由	暮
益	樓	之	百	之	以	之	連	其	情	竹	闌	東	篇	玉	武	端	旬	推
二	鶴	流	文	所	高	水	慎	山	籬	撲	勸	樓	十	戶	端	雪	白	得
之	立	溶	東	築	峙	政	可	木	籬	茅	地	舍	育	奇	白	漁	梅	么
亞	輩	々	南	新	珍	涉	百	奇	籬	茅	地	舍	育	奇	白	漁	梅	么
稱	飛	漾	佳	城	卉	忘	里	傑	籬	茅	地	舍	育	奇	白	漁	梅	么

蒼在末求屬之軒託一在筑四曰此景險之為武是年渡之古
 希焉且后正中捐其登此波面泊有寔萬城名州為之隅地今
 世文後題宗東間客此一山則舩臺天虜於甲江恨時田為壯
 靈明傳不具遊之之城軒此西齋樹下不是兵戶頃跋河先遊
 彥八語肯陳躬詩西到也乃北曰特之進乎四城間而登焉之
 年金拒于歷板此絲四有合置所亦在十而太望筑凡士
 龍吾辭前其也者軒是方富雪一稀乃雄萬有田之波遠有
 集公輒告地得求者京亦方觀山其扁睥州其卒於金今則左於
 丙雖用不者命師其有在武庸靜之名而響矣蓋公遂初方見
 申予所知惟統題諸理志之一蒞也勝隙也備山武之關志觀富
 八蒼聞者如正往宗一予題然不也東其軒是形夫壘之為左者遊
 月矣於之正往宗一予題然不也東其軒是形夫壘之為左者遊
 初之正往宗一予題然不也東其軒是形夫壘之為左者遊
 吉後宗觀一予題然不也東其軒是形夫壘之為左者遊
 書而之烏人五詠也欲而南懸是形夫壘之為左者遊
 子跋說於是已然將今遠城隅燕其彼城以邦也一也英獲也武
 岩望而附就故此藻金遠之田座甲有最一也英獲也武
 柵之志予以五飾吾俱勝河回也樓鍾人江用也一予歲山
 村尚篇以序人其公願又有瞻亭館勝當戶武守以壯野東

也東望則平川縹緲長堤迴水石瑰偉兮佳氣
 鬱芬映乎數十里瀛海補楚東神人乾坤之
 則滄洲其前則百谷萬所不與二以近野南天
 一此夫當關最而方無國安也周室中微地勢
 恂方金甫城于敵東喉內行武府之置間肯大
 公斯功勝謂與仲山甫襟行者城上西簷而燕
 日靜勝天積雲水芙蓉以玉立萬餘丈朝以憲
 羣山則雲鬢梳洗天沙翠而隱見於朝以憲
 人之畫也岸則雲鬢梳洗天沙翠而隱見於朝
 桂棹荆扉經滌滌如織而泊也乃龍赤艸無
 寔樂矣哉締舳舻如織而泊也乃龍赤艸無
 襟宇瀟灑即措以詩鳴道者或慕嚮公之逸
 是湘水情美以詩鳴道者或慕嚮公之逸
 羨其亦寓之於寄詩志金燕石盤珠非野志
 成公之求之也然督責以餘言目入珠命余
 也何之邪景督責以餘言目入珠命余
 聊且記其然景督責以餘言目入珠命余
 秘也山暮樵得么曼乙而云爾丙申秋之

文呼六年六月十七日江戸城... 道准奇合を與...

心敬 資雄 平盛 音譽 道准 珠阿
 資俊 好継 快兼 ト巖 資常 宗信
 惠仲 資忠 長治 講師ハ平盛ナリ

孝範家集 二月十三日... 聖朝法樂... 静勝軒太田道准

宗長東土産... 松林... 朝戸... 孝範

霜とひさ松林く田... 朝戸... 道准

此和歌ハ太田道准静勝軒の合雪亭... 道准

宗牧東國紀行

に日天氣よく江戸の城は遠山甲斐守千人を
つゝあれは種なき先旅宿の事云々
宗三とて和泉塚あり時宜ふや
上徳國へ出陣の時侍もむり
故障ぬいさくの由再往なむ
昼川くさう始られよう
五

此城の遠望下ハ運籌帷幄中決勝千里外
中本よりこゑハ小田原あての急約と
明日息弥を齎し出陣ありハ板
絆の同心ありき執心ありハ
花小ぬ

入江かけしる
あひあひ心ら
おのけさ
帰帆むさ
夕月夜盃
困もあひ

鳴ら出陣又を守へ録進一かゆゆつと一各異見の事、小
てさかかきと忌まじり七日あをささりき此軍勢、あや
しうふとけし云く 始、四日とあり、天文
十四年三月なり

吹上御庭 旧名を局澤と云 按、吹上とは江河に臨み、高き地とあり、
駿州富士川の辺、武蔵荒川の辺、吹上とあり、
あり又江戸小石川、氷川、明神の南の地、旧名を吹上とあり、小石川の水流の低き處、
あり、又江戸小石川、氷川、明神の南の地、旧名を吹上とあり、小石川の水流の低き處、
あり、又江戸小石川、氷川、明神の南の地、旧名を吹上とあり、小石川の水流の低き處、

松原小路 田安御門の内なり 昔此地松原ありありとを結城黄門公
御館を建られたり木立の御館と呼々云々云々
往古太田道灌我庵を
松原と云々云々

梅林坂 平川口御門の内あり 文明十年の夏太田持資或日一室小
あり、午睡の中靈夢を感じ、翌日菅公親筆の画像を得て云々
宮、菅公親筆の
梅林坂の号ありと云

勸請一梅樹數百株を栽依、梅林坂の号ありと云 宮、菅公親筆の
平河ハ往古上下と云々云々
梅林坂の号ありと云

八代曾河岸 和田倉御門の外に御堀端を以て天正以前ハ此地
波打際ゆく漁者の住家のみなりと云 其後日比谷町と云々
其後日比谷町と云々

看店多き町屋と云々 慶長の頃ヤサスハチクワンと云々
異國人ハ此地を以て云々
名所、此ハ重教ハ作と云々、又江戸、菅公親筆の
或ハ云々、又江戸、菅公親筆の
或ハ云々、又江戸、菅公親筆の

龍の口 和田倉御門の東御溝の餘水を落す此所迄潮さ入ありと
昔此辺を平田村と云々 又同所南の角松平右京兆弟宅
の内ハ平田明神の社あり 祭神、菅公親筆の
又此地其昔を蒲生
飛騨守氏郷の宅地なりと云々 菅公親筆の
又此地其昔を蒲生
飛騨守氏郷の宅地なりと云々

飛騨守氏郷の宅地なりと云々 菅公親筆の
又此地其昔を蒲生
飛騨守氏郷の宅地なりと云々

又此地其昔を蒲生
飛騨守氏郷の宅地なりと云々

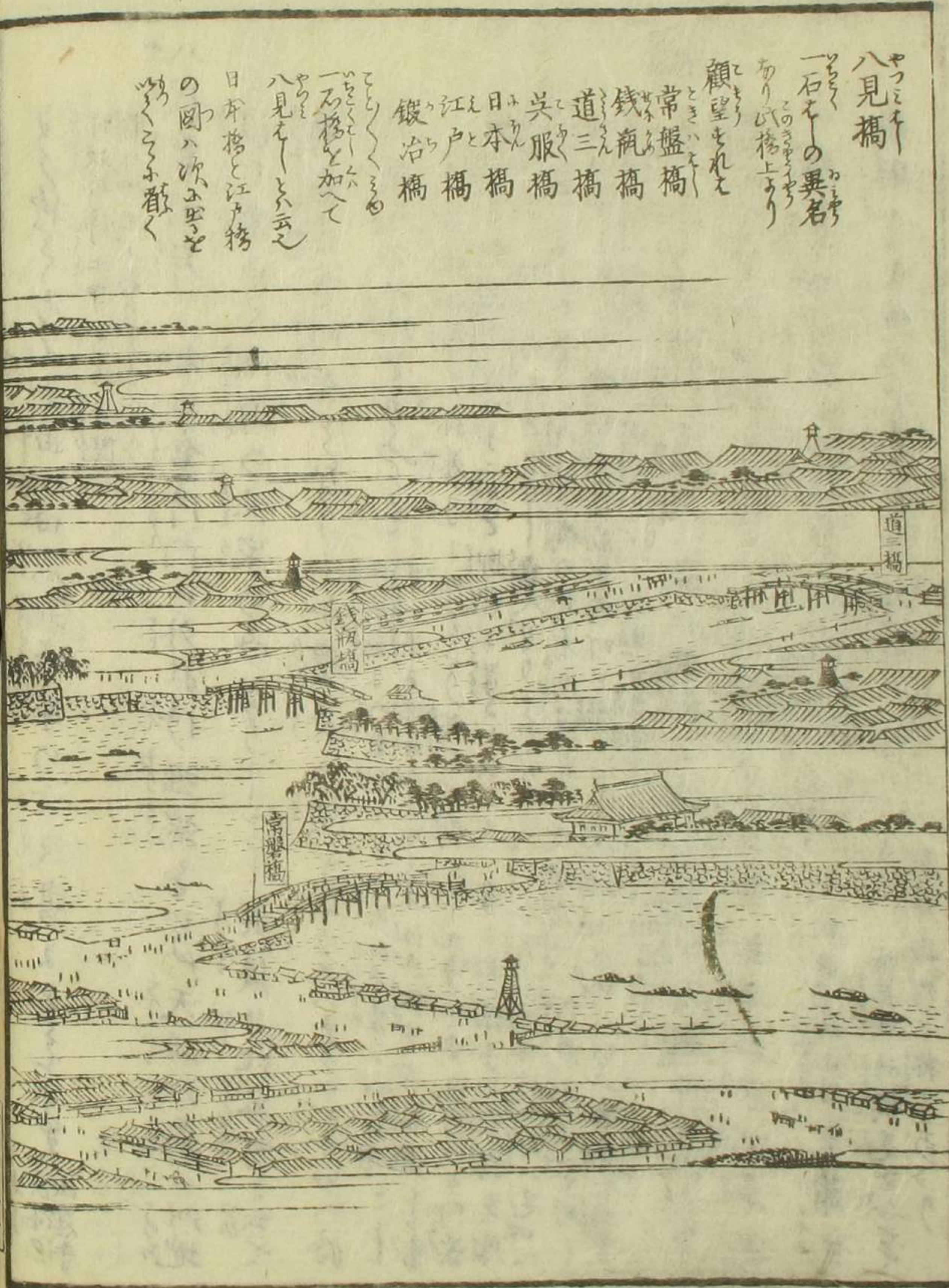
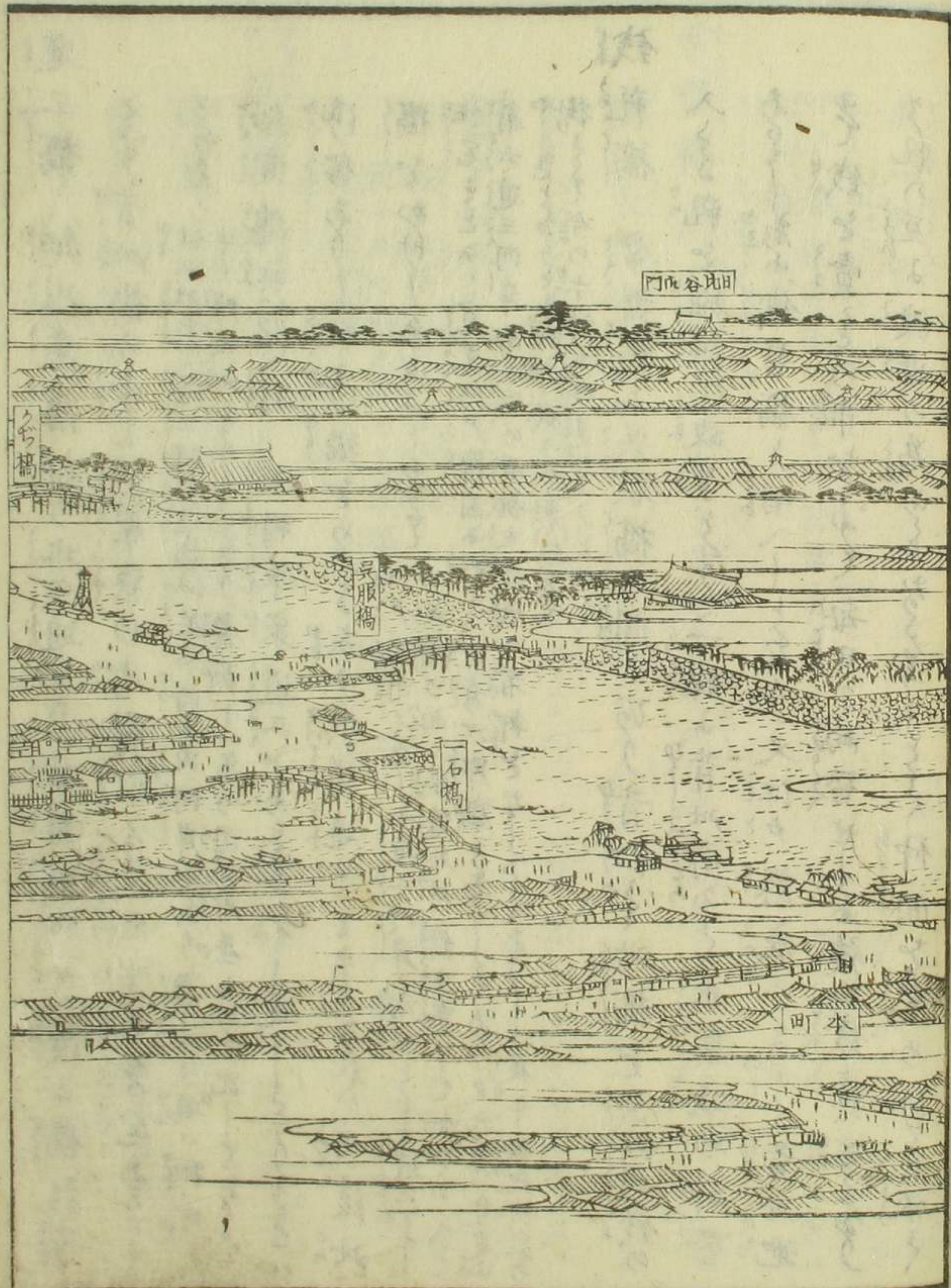
飛騨守氏郷の宅地なりと云々

飛騨守氏郷の宅地なりと云々

飛騨守氏郷の宅地なりと云々

飛騨守氏郷の宅地なりと云々

飛騨守氏郷の宅地なりと云々



ヤフミヤ
 八見橋
 一石の異名
 あり武橋上あり
 顧望せられ
 常盤橋
 銭瓶橋
 道三橋
 呉服橋
 日本橋
 江戸橋
 鍛冶橋
 一石橋を加へて
 八見を云ふ云
 日本橋と江戸橋
 の間ハ次々
 ありとぞ散く

道三橋

細川侯藩邸の北の通り常盤橋の方へ渡る橋は号

とす昔此橋の南は典藥寮の所醫官今大路家の茅宅あり

とあり故に此を道三河岸といふ慶長十二年の圖は町屋との記しあり

俗間傳云は時大將軍家道三をめぐりて以て建くは

所咎あり一昨序堀をめぐりて其道遠くして中上るれは

橋をわけしめありてなり江戶名所は道三河岸南北と

住宅と云く寛文江戸繪圖は此を参次郎橋とあり又大尊寺支

翁云道三河岸は入國の頃木渡世の都軒をたてありは後年彼地武家の

後と云く今の本林木町是なりと云く

錢瓶橋

常盤橋と呉服橋の間は昔初く此橋を架け時錢の

入る瓶を堀得し故号とすと一説は昔此所あり永樂錢の引替

ありは瓶を錢替橋と唱へたり又江戸總鹿子云く昔此地

にて錢を賣るの市をめぐりて毎日二両替せし後ハ錢賣多かり

これハ互は渡世の爲めなりと云く仲間を定めける依る

其項錢買と云くと云く江戶鹿子江戸雀等の冊子は錢瓶

と云く寛永十八年印本に語とつる冊子は天正十九年の夏伊勢与市と

似たり者錢瓶橋の辺は洗湯風呂を一つ立る風呂錢ハ永樂一錢なりとありハ

錢瓶橋は作らるる也

常盤橋

御本丸の大手より東の方本町への出口中々御門あり

橋の東詰北の方小御高札を建らる金葉集小名かへぬ抄

よきとありあつちの路の茅盤の橋よかき藤波といふ古奇乃

意を松平の御称号よりあり御代を賀しなりての号ありといふ

按は此橋の旧名を大橋といひはるハ誤なり慶長十二年の江戸繪

圖小今の御本丸の下衆橋を大橋とあり同圖ハ常盤橋をハ

浅草口橋とありせり依る常盤橋の大橋はありとありとあり

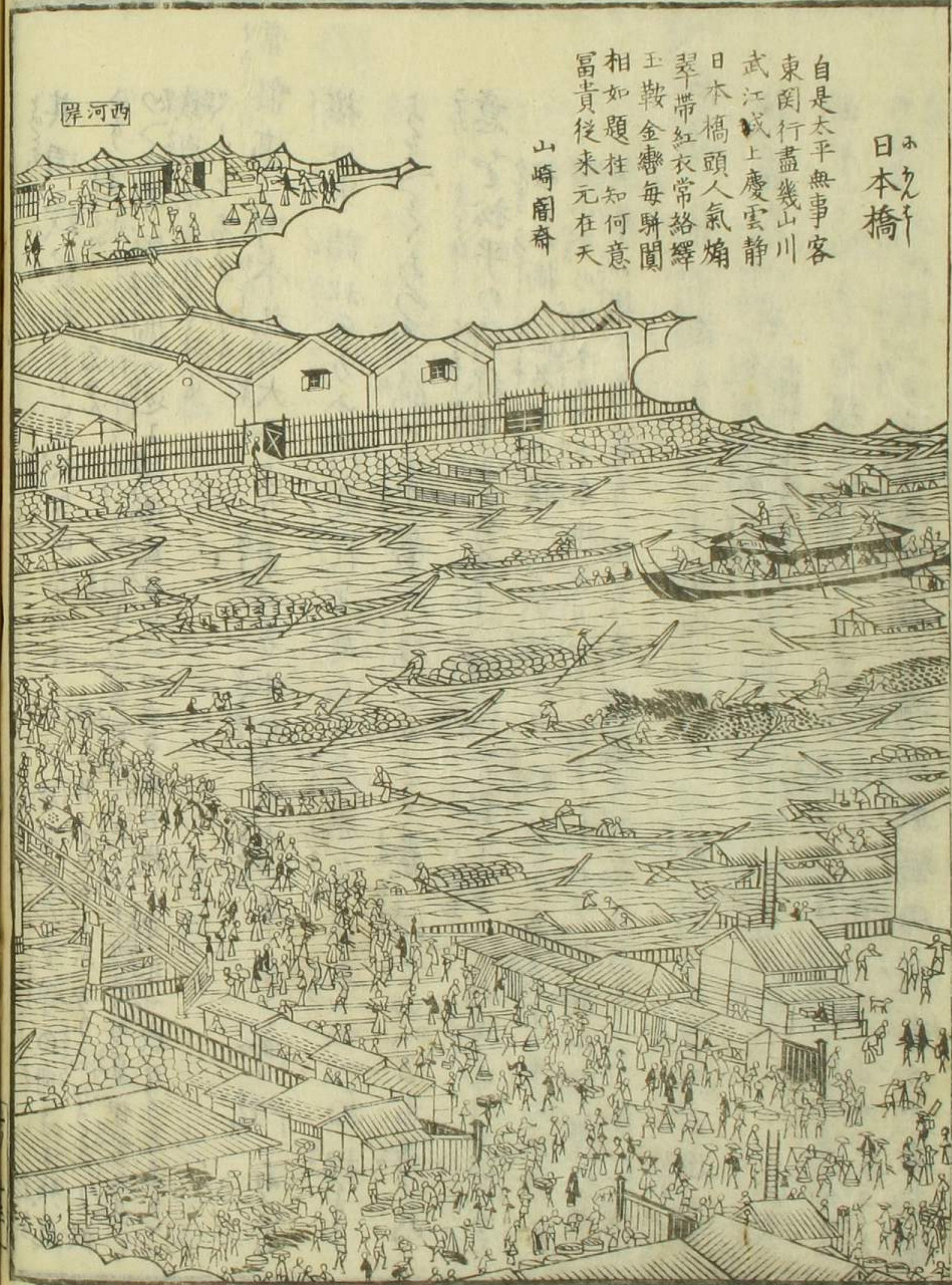
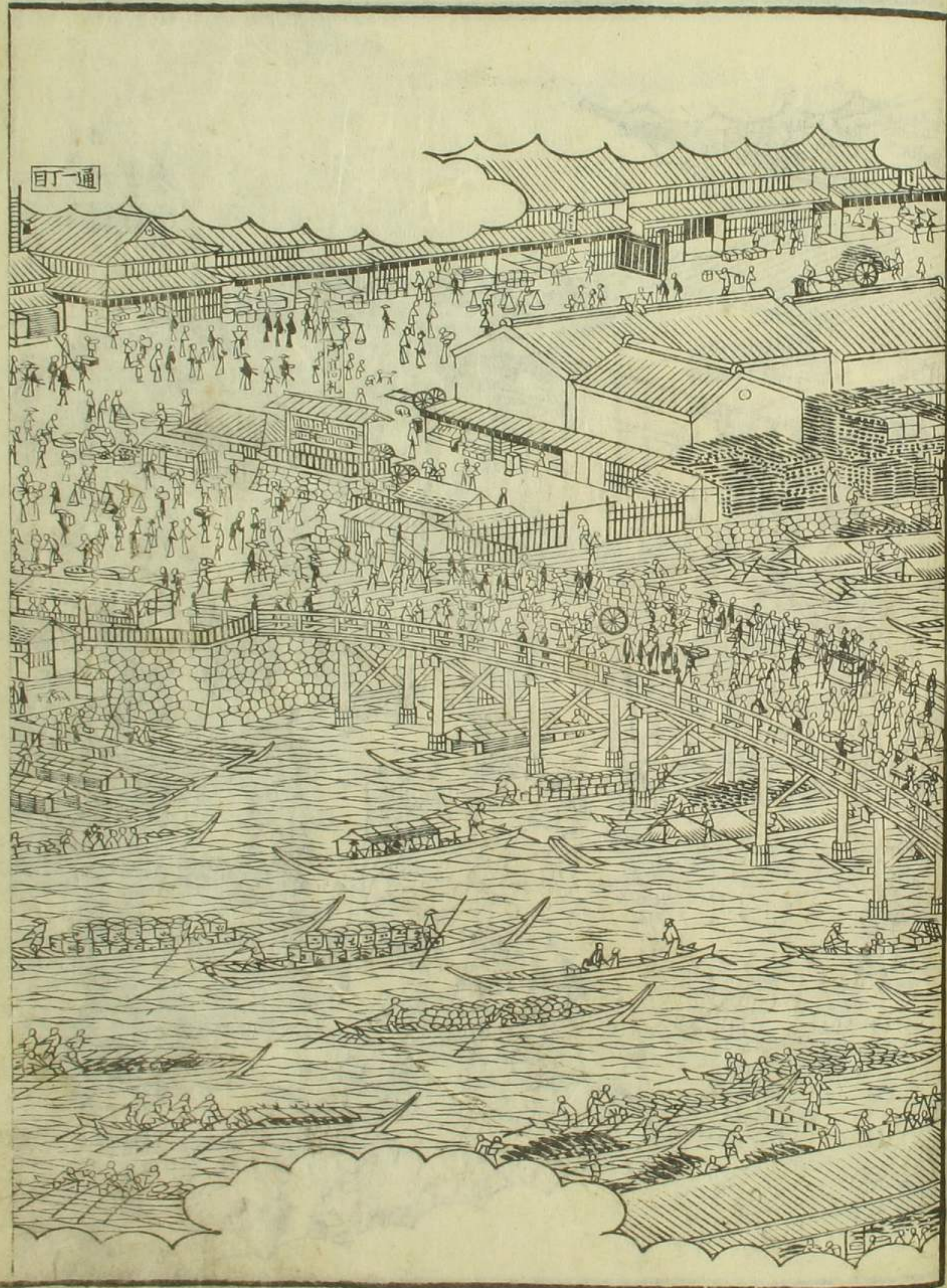
一石橋

日本橋より二丁半西の方同一川筋よかき此橋の南北は

後藤氏両家金座後藤庄三郎の宅あり其昔五斗くといふ秀

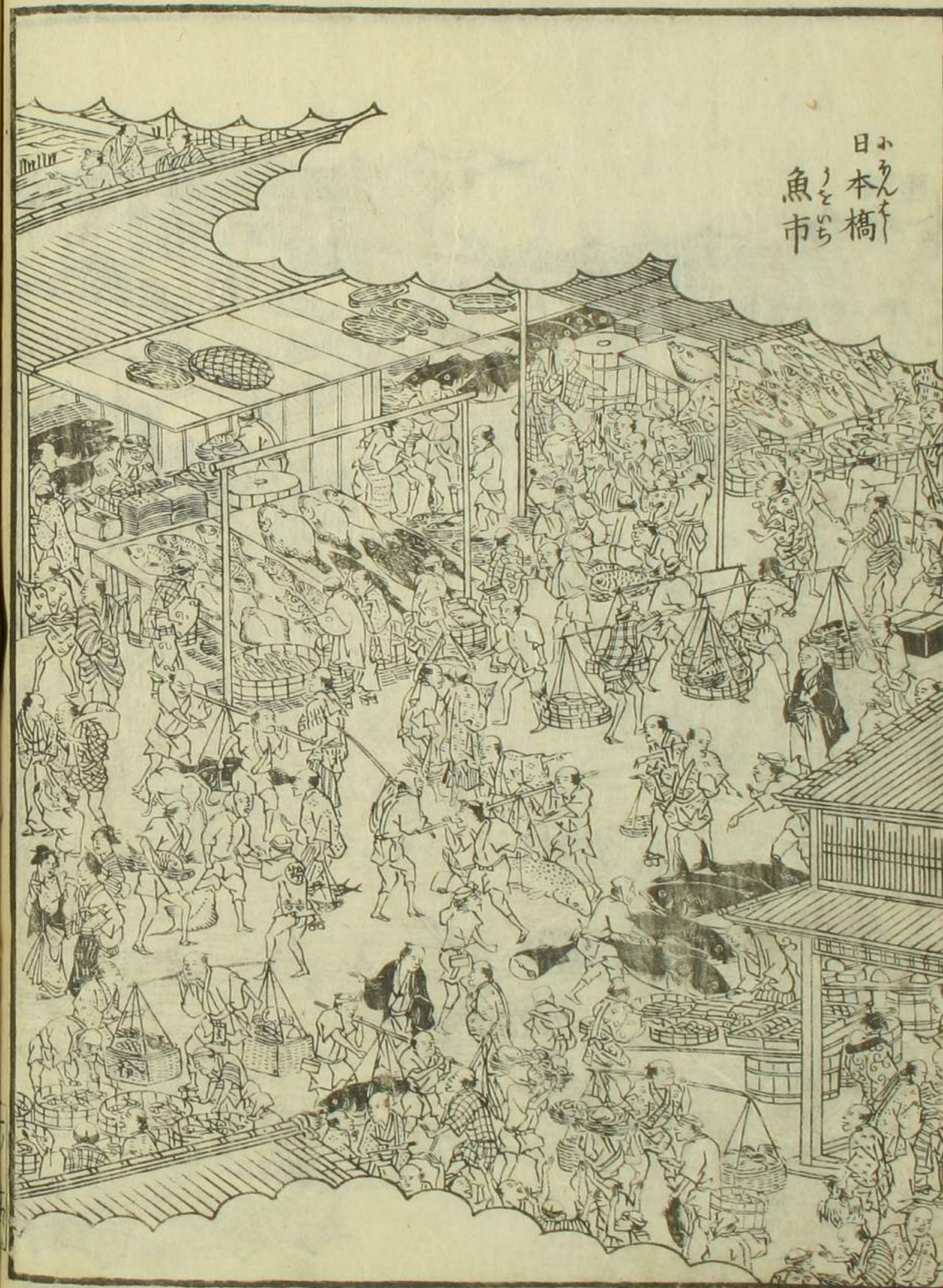
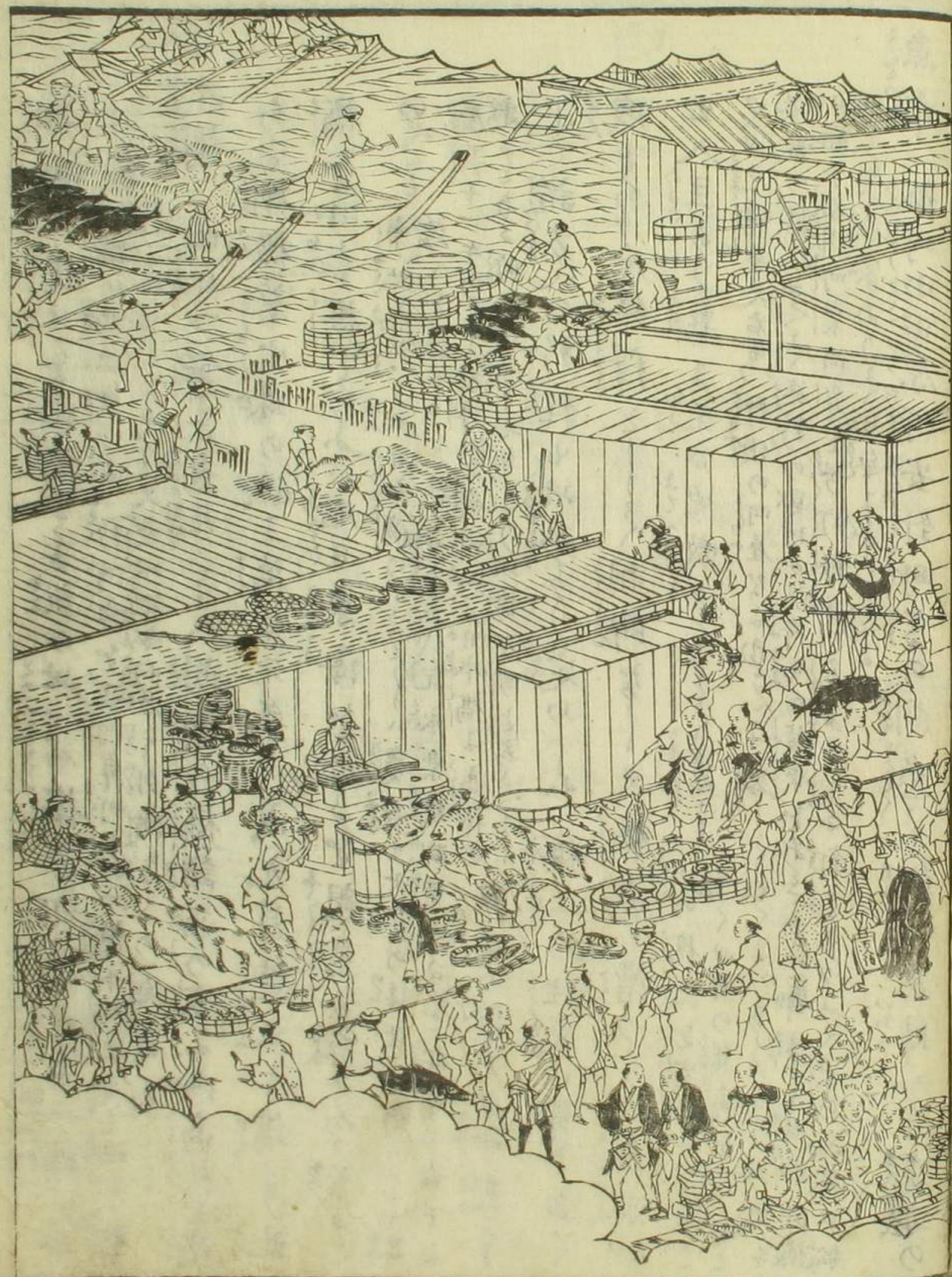
句あり俗は一石橋と号けしあり寛永の江戸繪圖ハ後藤橋ハ

云く又此橋上より日本橋江戸橋呉服橋錢瓶橋道三橋常盤



日本橋

自是太平無事客
 東関行盡幾山川
 武江城上慶雲靜
 日本橋頭人氣煥
 翠帶紅衣常絡繹
 玉鞍金轡每駢闐
 相如題柱知何意
 富貴從來元在天
 山崎闇齋



日本橋
魚市

橋 鍛冶橋を顧望する。故此一石橋を加へ共八橋と云

日本橋 橋の南詰東の方へ行河岸を西河岸町の櫓本河屋多し住居あり

日本橋 南北へ架す長凡二十八間南の橋詰西の方より高札を建

らる。欄檻葱宝珠の銘。萬治元年戊戌九月造立と鐫す。此

橋を日本橋といふ。旭日東海を仰ぎ親見する。故一石橋と

事跡合考云日本橋のつくりは慶長十七年の後欽とあり。其

のつくりを記せり。これと北条五代記永樂銭制禁のつくりを記せり。各下

慶長十一年のつくり極月八日武州江戸日本橋は高札を此地江戸の中央

一と諸方への行程も此あり。定めむ橋上の往来ハ貴とかく

賤とわく。絡澤とく。間断なり。又橋下を漕つて魚船の

出入且より暮に至る迄激々として。北の橋詰を室町一丁目と

出入且より暮に至る迄激々として。北の橋詰を室町一丁目と

出入且より暮に至る迄激々として。北の橋詰を室町一丁目と

出入且より暮に至る迄激々として。北の橋詰を室町一丁目と

出入且より暮に至る迄激々として。北の橋詰を室町一丁目と

出入且より暮に至る迄激々として。北の橋詰を室町一丁目と

出入且より暮に至る迄激々として。北の橋詰を室町一丁目と

出入且より暮に至る迄激々として。北の橋詰を室町一丁目と

出入且より暮に至る迄激々として。北の橋詰を室町一丁目と

出入且より暮に至る迄激々として。北の橋詰を室町一丁目と

出入且より暮に至る迄激々として。北の橋詰を室町一丁目と

出入且より暮に至る迄激々として。北の橋詰を室町一丁目と

出入且より暮に至る迄激々として。北の橋詰を室町一丁目と

出入且より暮に至る迄激々として。北の橋詰を室町一丁目と

出入且より暮に至る迄激々として。北の橋詰を室町一丁目と

出入且より暮に至る迄激々として。北の橋詰を室町一丁目と

出入且より暮に至る迄激々として。北の橋詰を室町一丁目と

出入且より暮に至る迄激々として。北の橋詰を室町一丁目と

魚市

浦より海陸のけりあり。鱗魚をこよよ運送して日夜小

市を立く甚賑へり。魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。

魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。

魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。

魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。

魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。

魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。

魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。

魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。

魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。

魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。

魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。

魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。

魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。

魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。

魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。魚市を立く。

祇園會所

大傳馬町二丁目の乾の角よりあり。此所ハ昔々、兩

側共ハ異服物の。同屋の住す。此街ハ年々正月十九日の夜ハ

其宮所ハ神田明神の。地より祭神ハ五男三女なり

是を八王子。毎歲六月五日本社。よりこよよ神幸ありて

同八日帰輿を又小船町を旅所とす。この同十日小神幸ありて

同十三日歸社あり。是も宮居を神田。明神の社地より祭る神ハ

奇稲田姫中。是を本所前と。稱せり。何れも旅所ハ

遷幸の間ハ日夜参詣群集して一時の。賑ひあり

賑ひあり。賑ひあり。賑ひあり。賑ひあり。

賑ひあり。賑ひあり。賑ひあり。賑ひあり。

賑ひあり。賑ひあり。賑ひあり。賑ひあり。

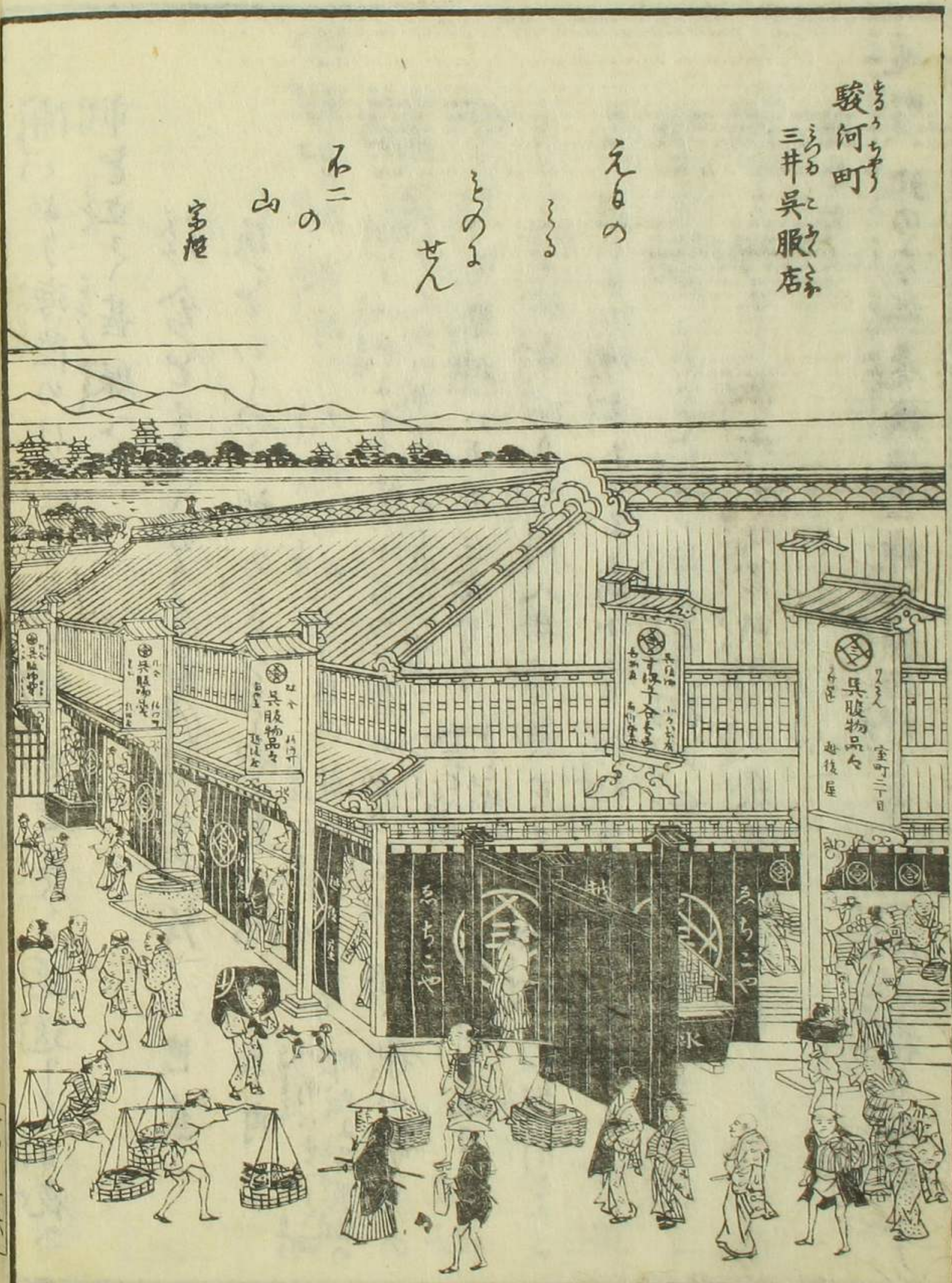
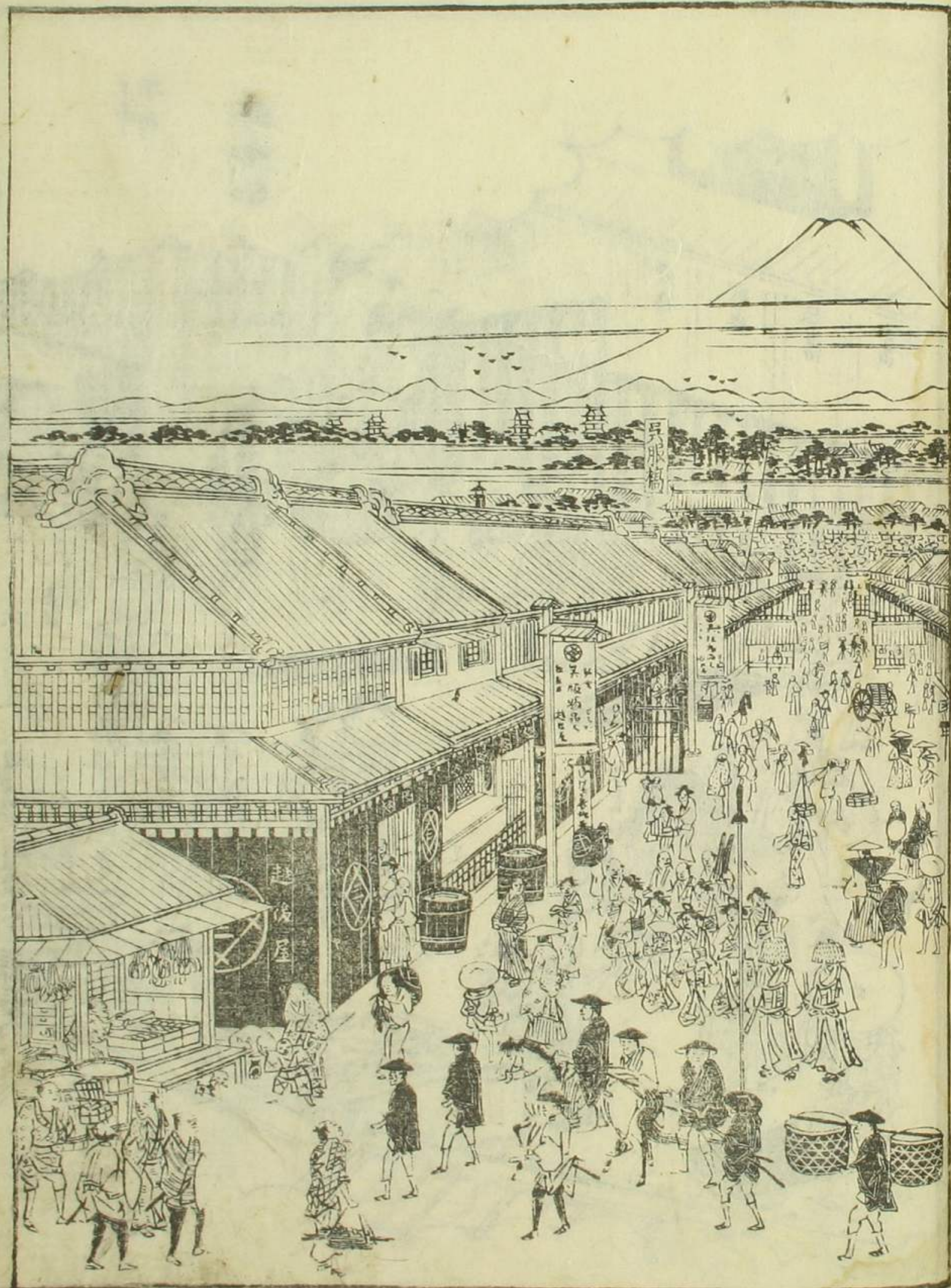
通町

北の方筋違橋の内神田須田町より南へ今川橋日本橋中

北の方筋違橋の内神田須田町より南へ今川橋日本橋中

北の方筋違橋の内神田須田町より南へ今川橋日本橋中

北の方筋違橋の内神田須田町より南へ今川橋日本橋中



駿河町
三井呉服店

えびの

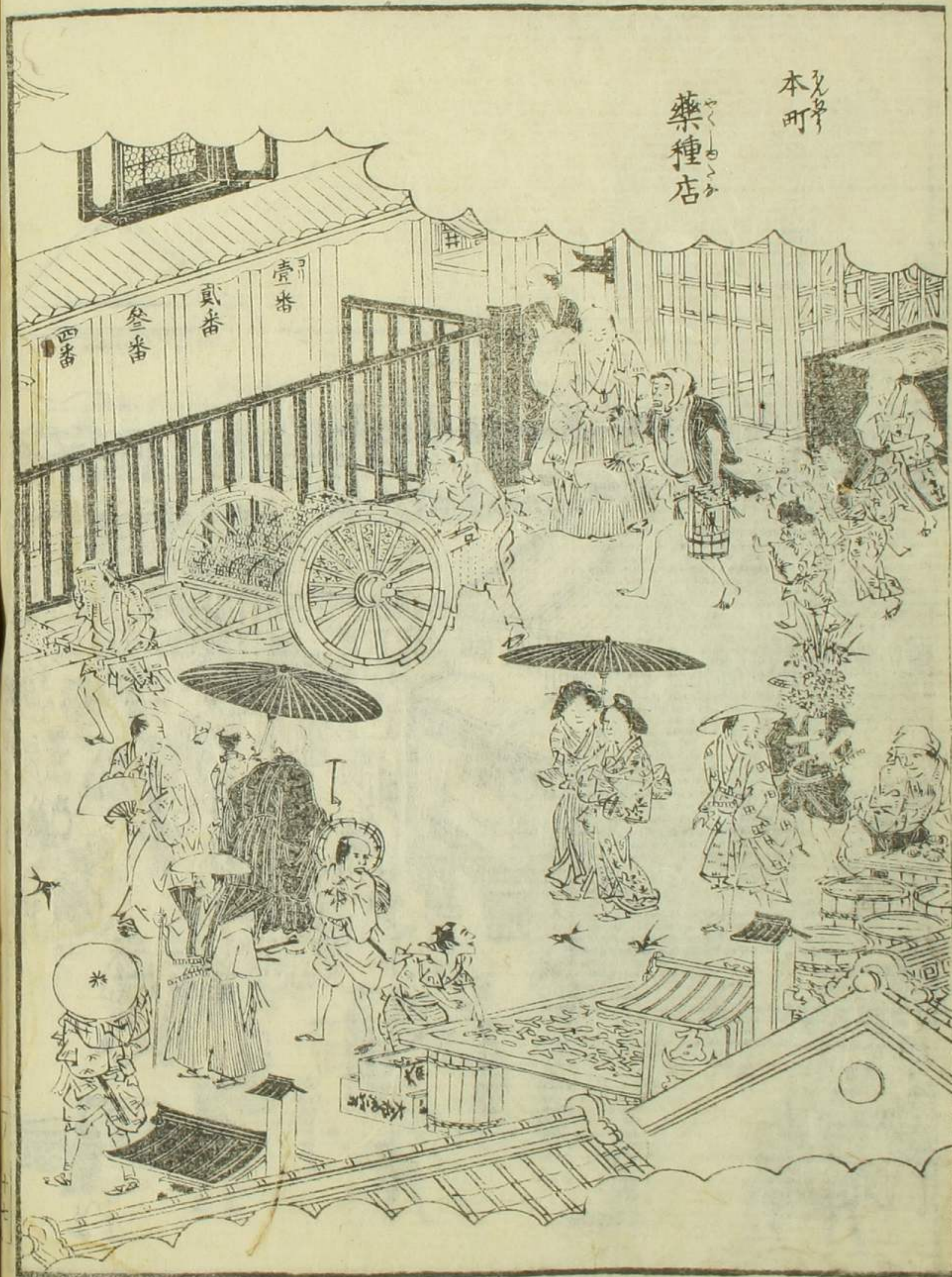
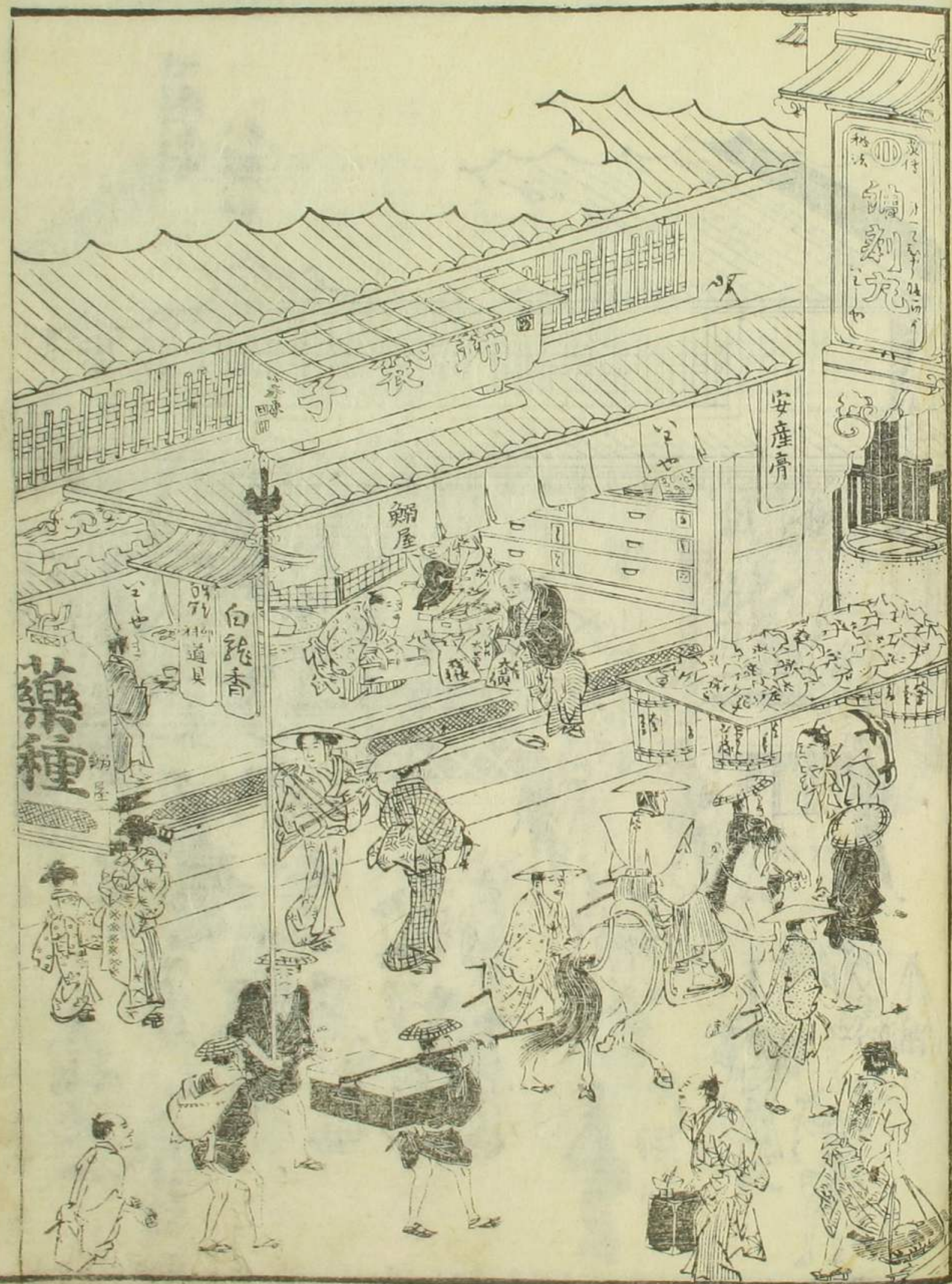
〜

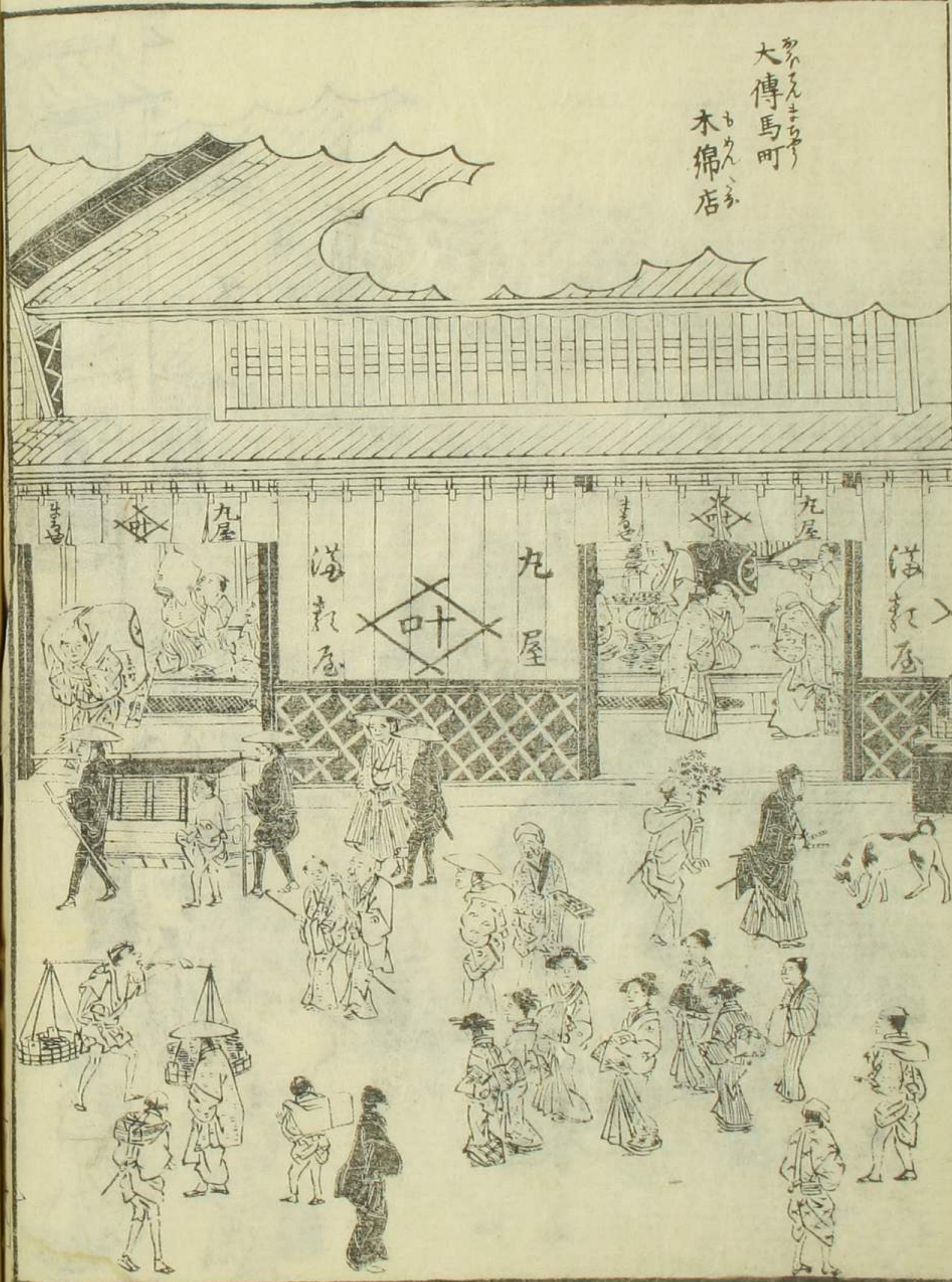
そのよ
せん

石二

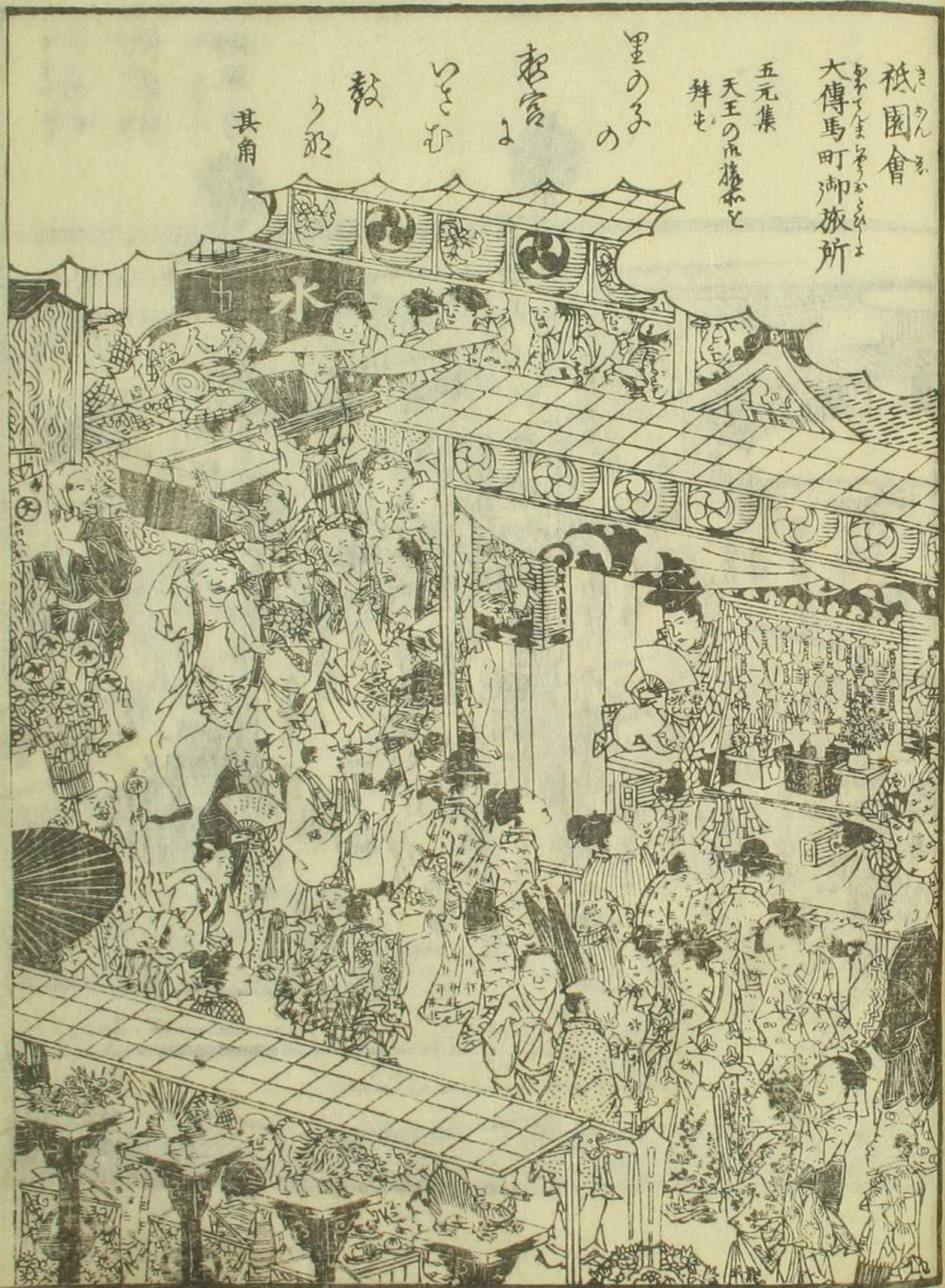
山の

宝屋





大傳馬町
木綿店



祇園會
大傳馬町御旅所

五元集
天王の御旅所と
拜せ

里のま

教

其角

水

其角

橋京橋新橋を徑る金杉橋の辺迄の惣名中と所幅十間餘あり

浮世小路 室町三丁目の間の東の横小路を云ふれと其故を考ふる

或人云置表浮世町座商入るをせり又ハ風呂屋遊女の居り

十軒店 本町と石町の間の大通を以て挑の佳節を待得て大

裡雜裸人形と道具を並べ軒端を並へり端午の宵人

形菖蒲刀を市を立く其賑ひを以て弥生の雜市を云と

らす又年の暮に至れば春を迎ゆる破魔弓手毬破胡枝を南

共其市の繁昌言語を述尽すへり實ハ大平の美とも云ん

か 駒込杯の雜市あれとも此の市のハあるを

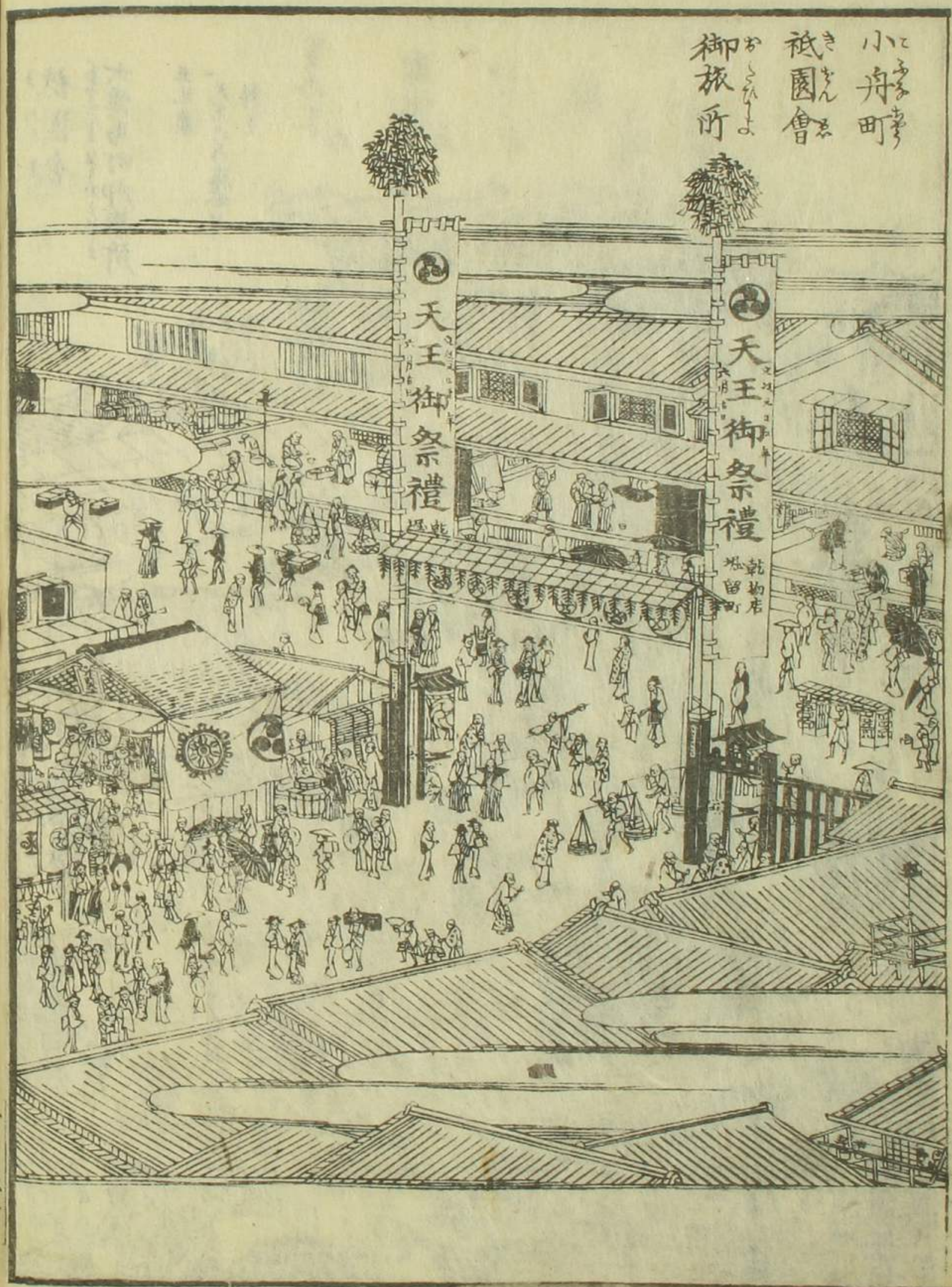
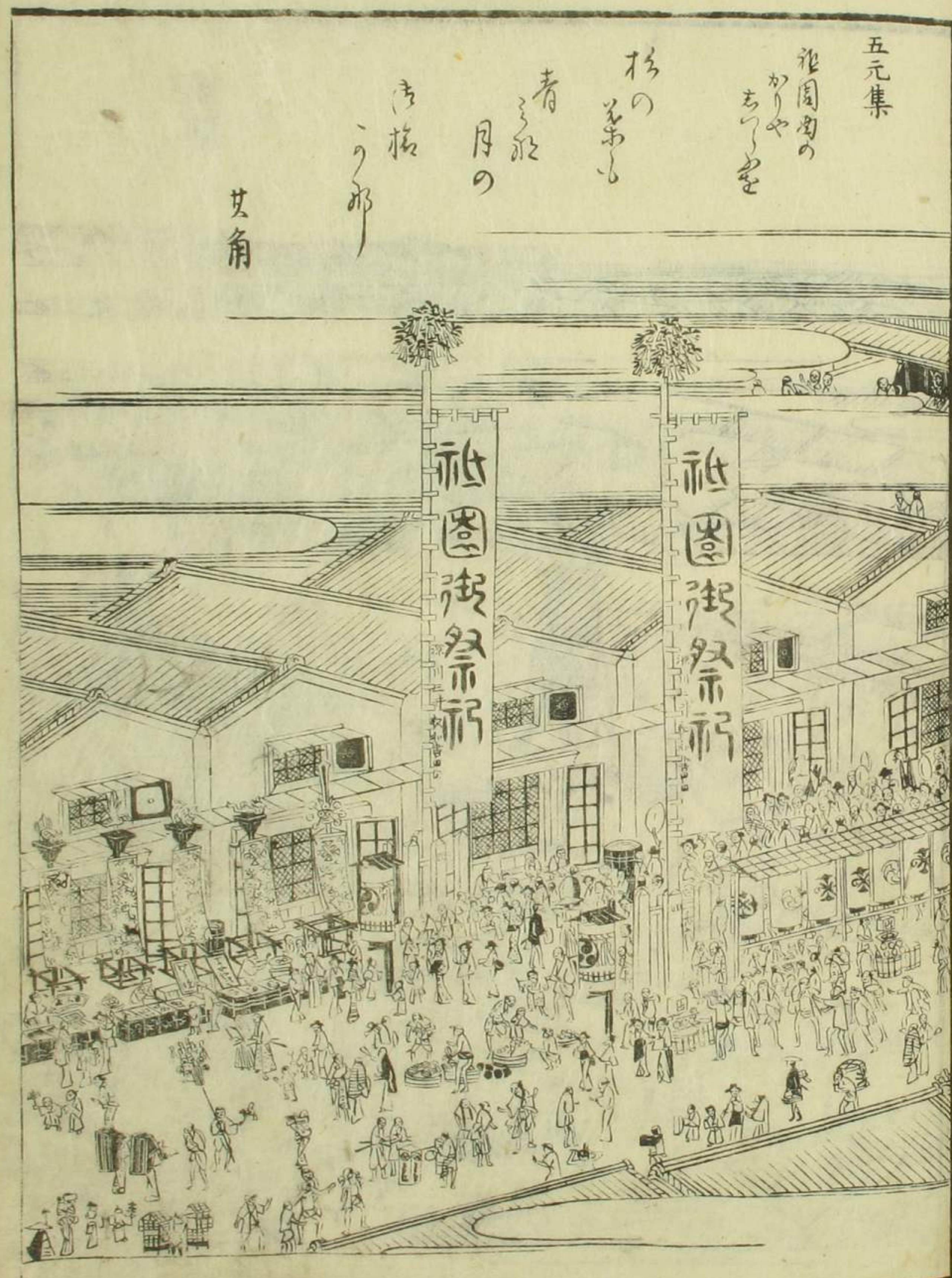
時鐘 石町三丁目の小路は源七といふ者是を役す此鐘

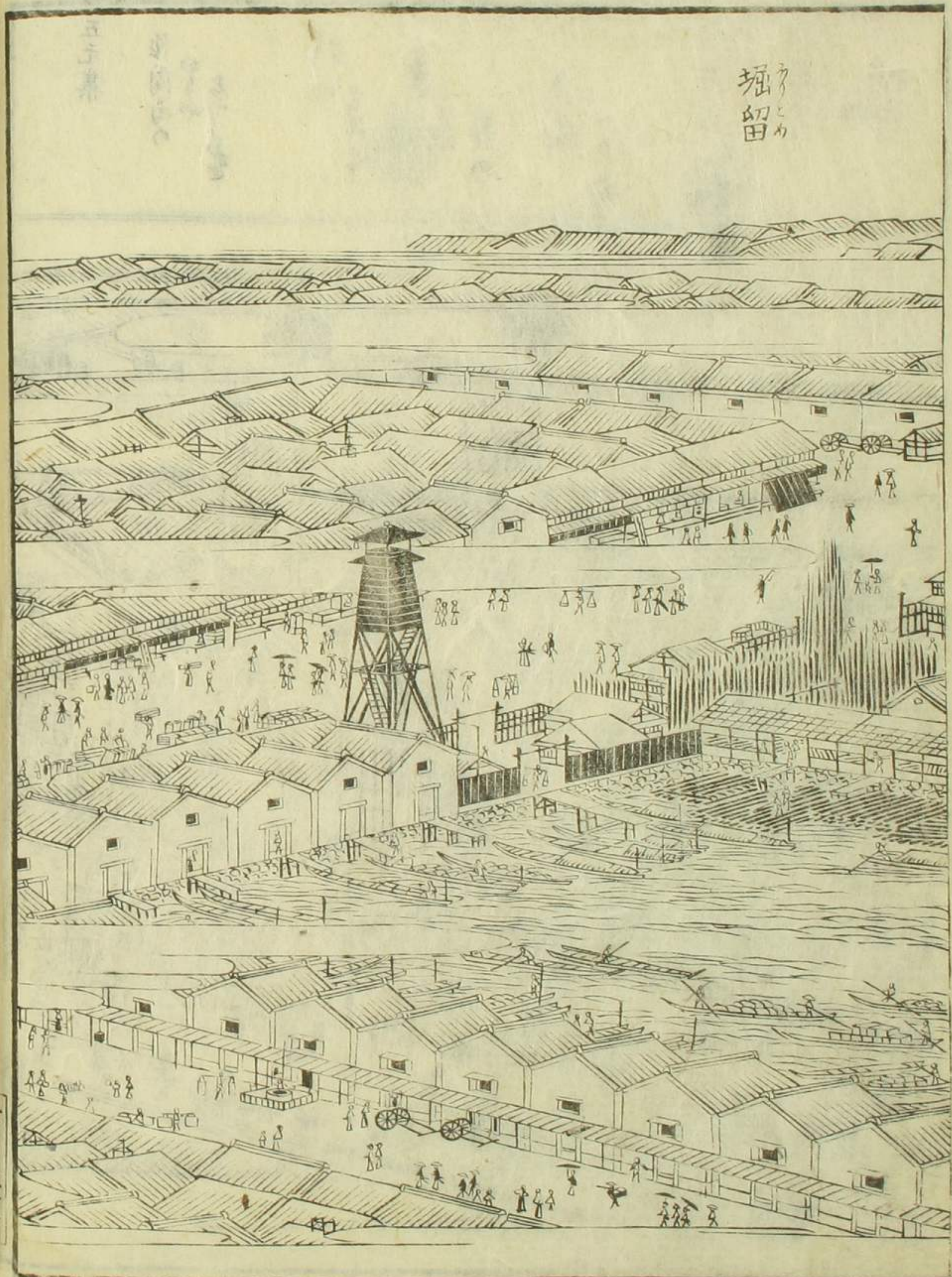
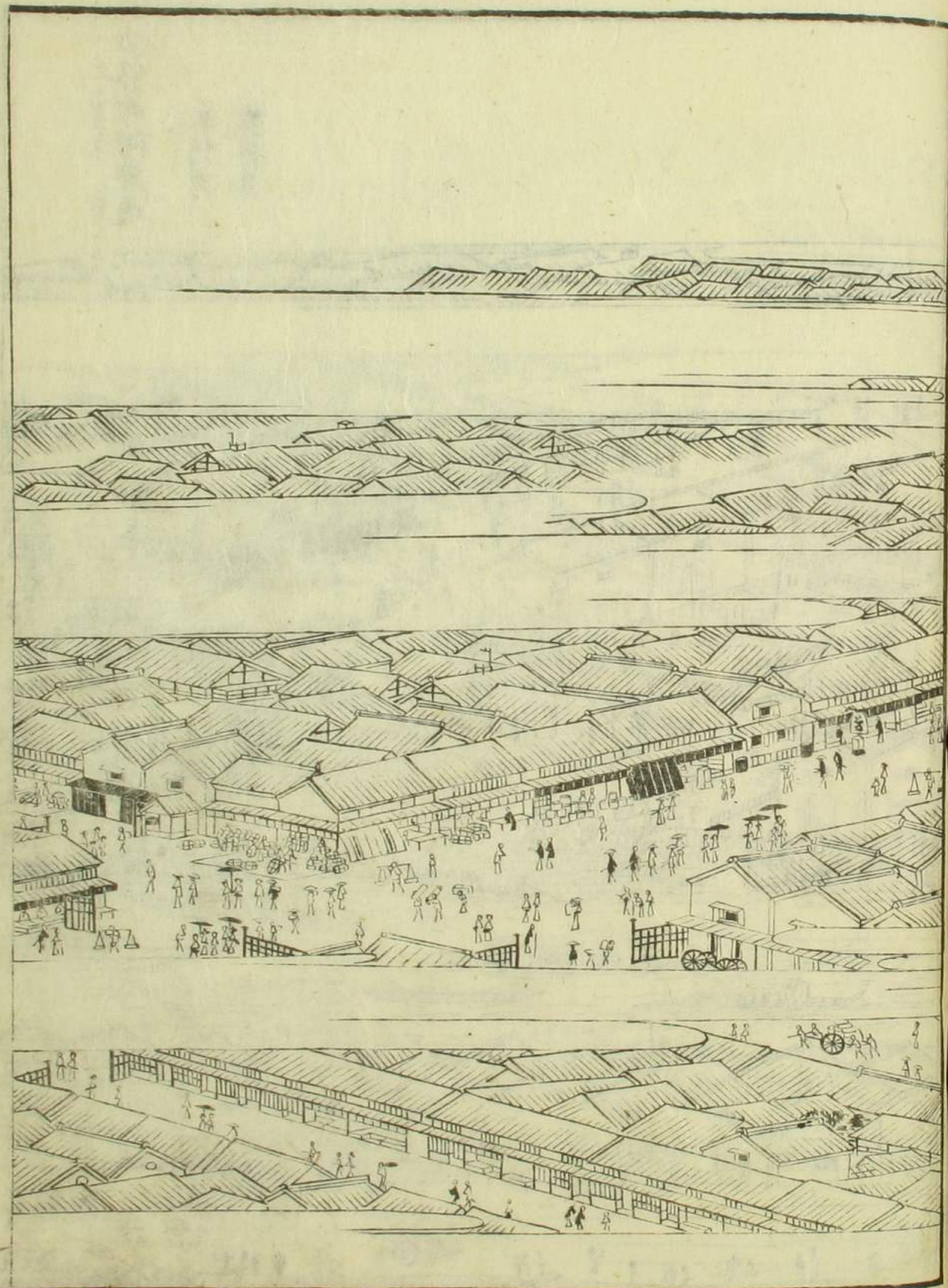
初ハ御城内にあり候時を報する

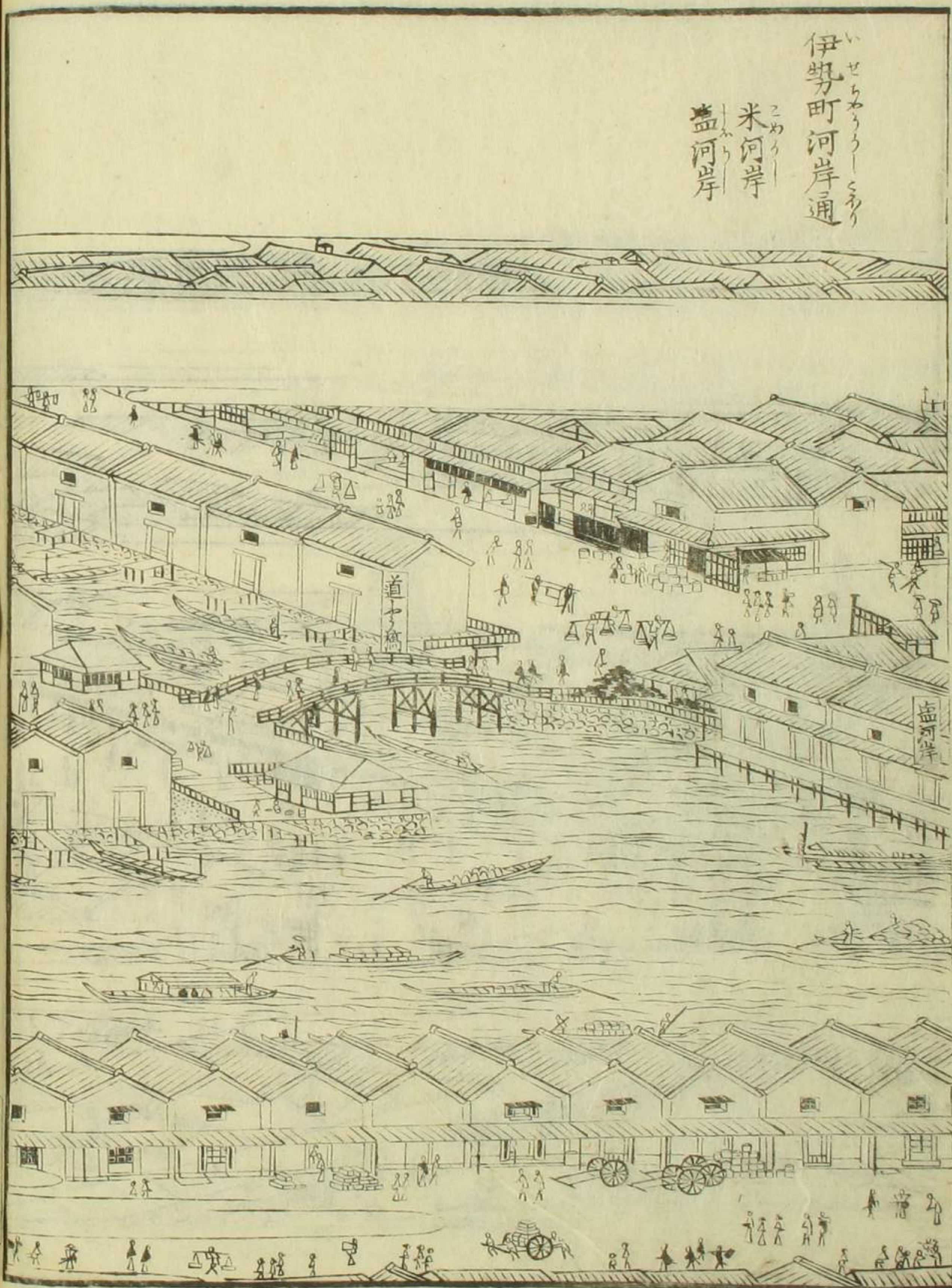
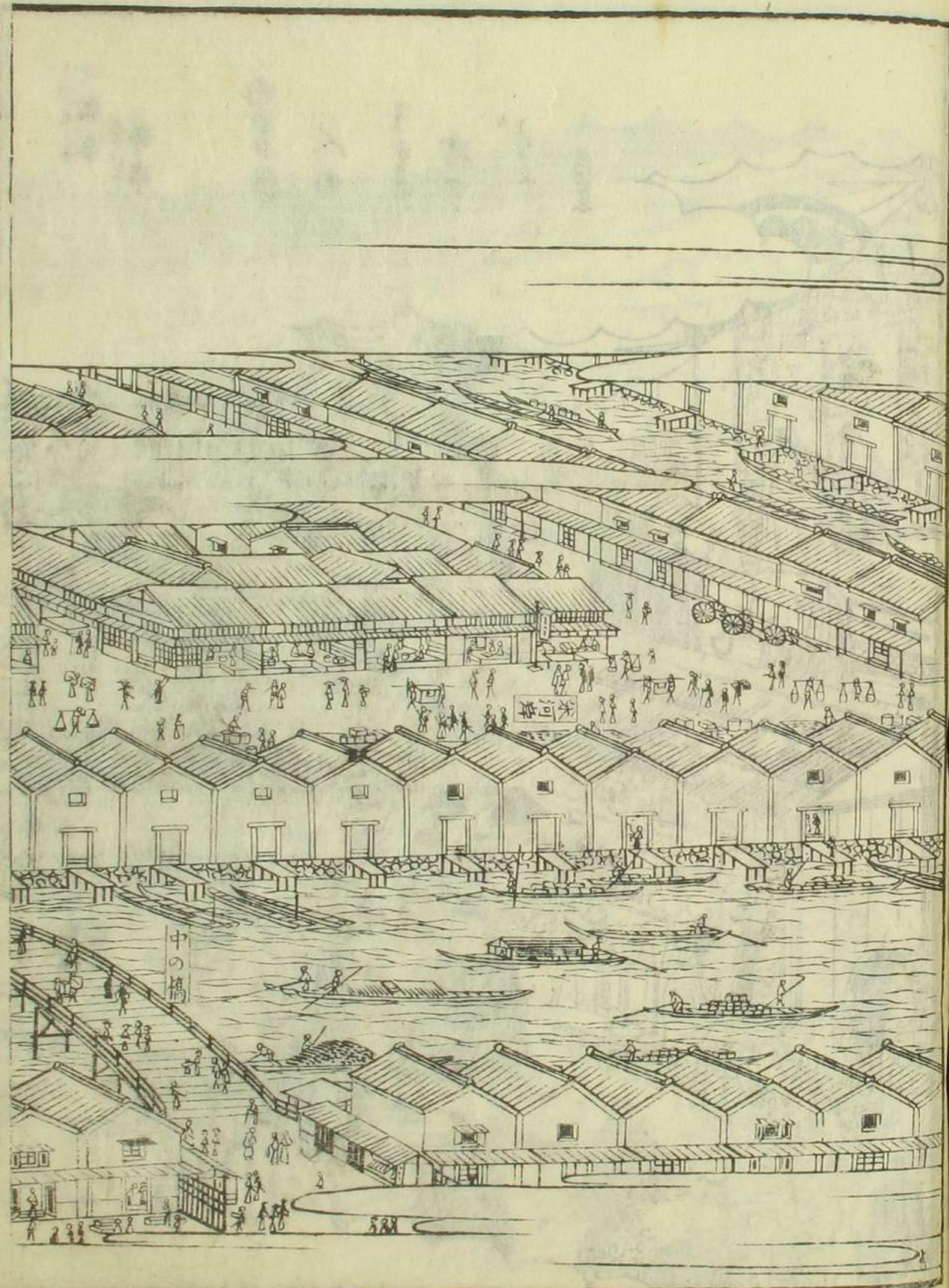
川町上野芝切通市谷八幡目白不動赤坂田町成満寺四谷天竜寺等あり

銘曰 宝永辛卯四月中院鑄物御大工推名伊豫

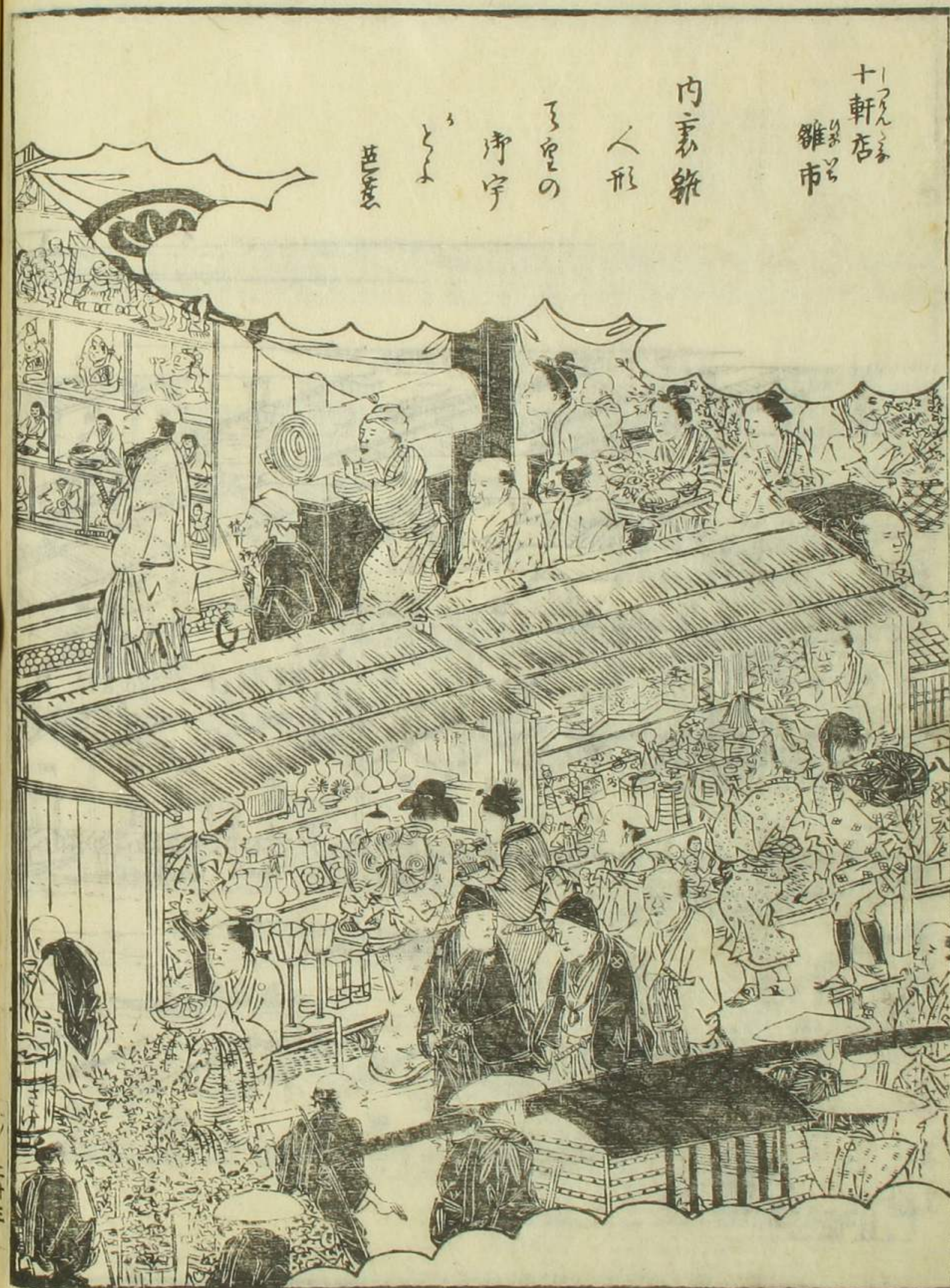
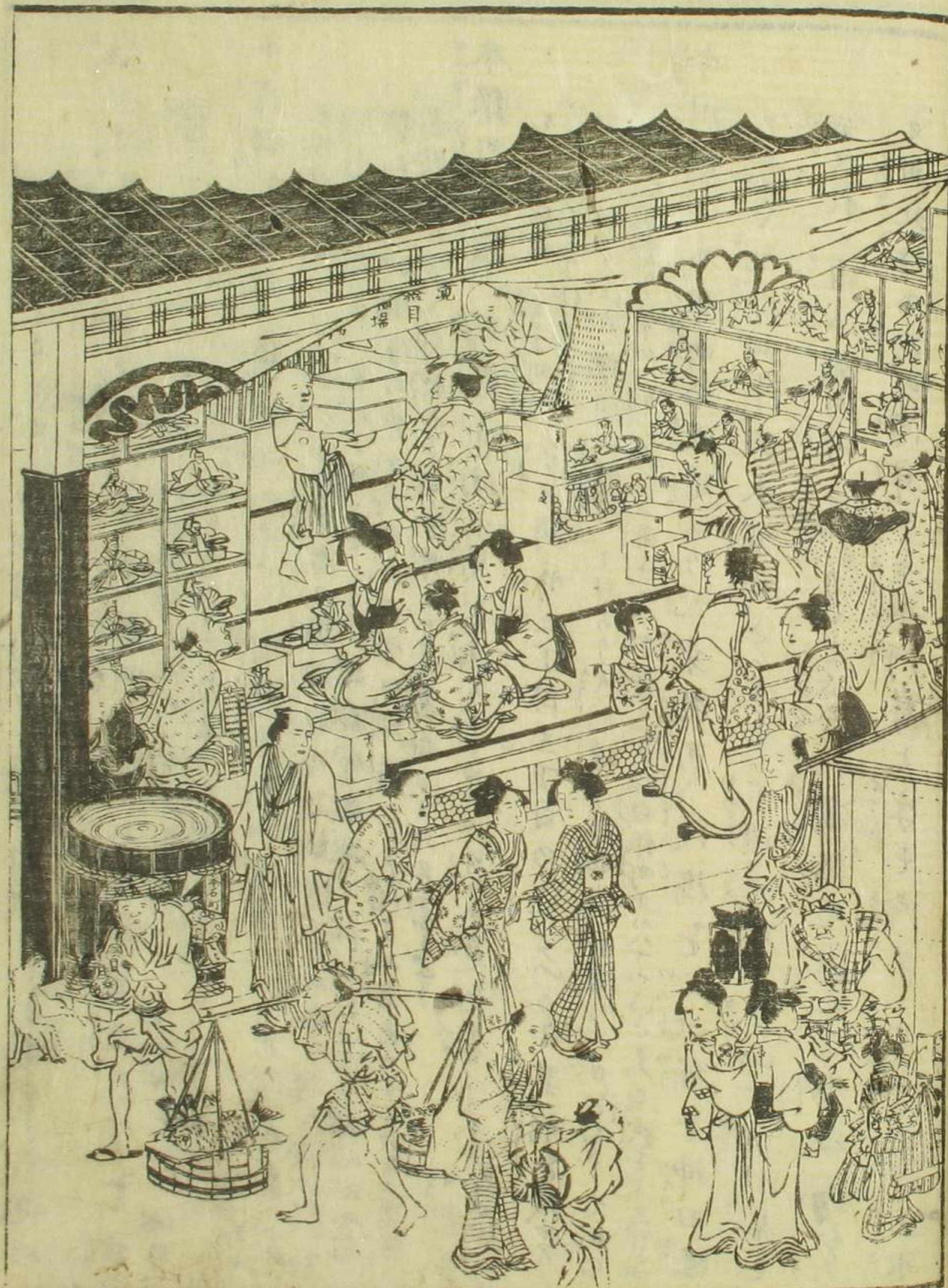
藤原重休







伊勢町河岸通
米河岸
蓋河岸



概宝永七年十二月十九日誓願寺前より出火石町のあり焼七す頃此

福田村舊跡 本石町一二町本銀町一二町の辺其舊跡なり云

千代田村舊跡 錢炮町のあり昔の千代田村ありとのり

千代田村 相殿に諏訪明神を勧請す此地の里正宮也其昔

寛正中太田道灌の弟千代田若狭守の勸請なり此名ありとされ

本銀町封疆 明暦年間火災を除くしめんく是を築く

今川橋 本銀町の大通あり元乗物町へ渡橋を云此堀を神田堀

と号く元禄四年辛未堀割らんとす頃此地の里正を今川某と

云これ直に橋の号と呼らると云今此橋詰の左右は陶器野あり

又此北詰の西の河岸を主水河岸と字を御菓子司大久保主水

の宅ある故ある云り宅前より井あり主水井と云昔は湯茶の

水ありとせられしと云り 再按江府名跡志一石橋の北の橋詰小

大久保主水ウ亭あり寛永の頃 大樹河船

但その家の傳はる處にやちなり 又半井ト養一首仕る

神田明神舊地 神田橋の内一橋伊館の中より流し洗わと

今移存せしなり 隔年九月十五日祭礼の神輿を此辺旧名を芝崎

村と云 小田原北条家の古文書小太田大膳亮 其昔は浅草の日輪寺を

芝崎道場とのひし此地よりあり又神田と号するの傍へ云

往古諸國伊勢大神宮へ新稻をきく故小國中を稻を植る

の地あり是を神田或は神田河田と唱へしなり此地は當國の

神田なり故大己貴命ハ五穀の神なれはとくく小斎

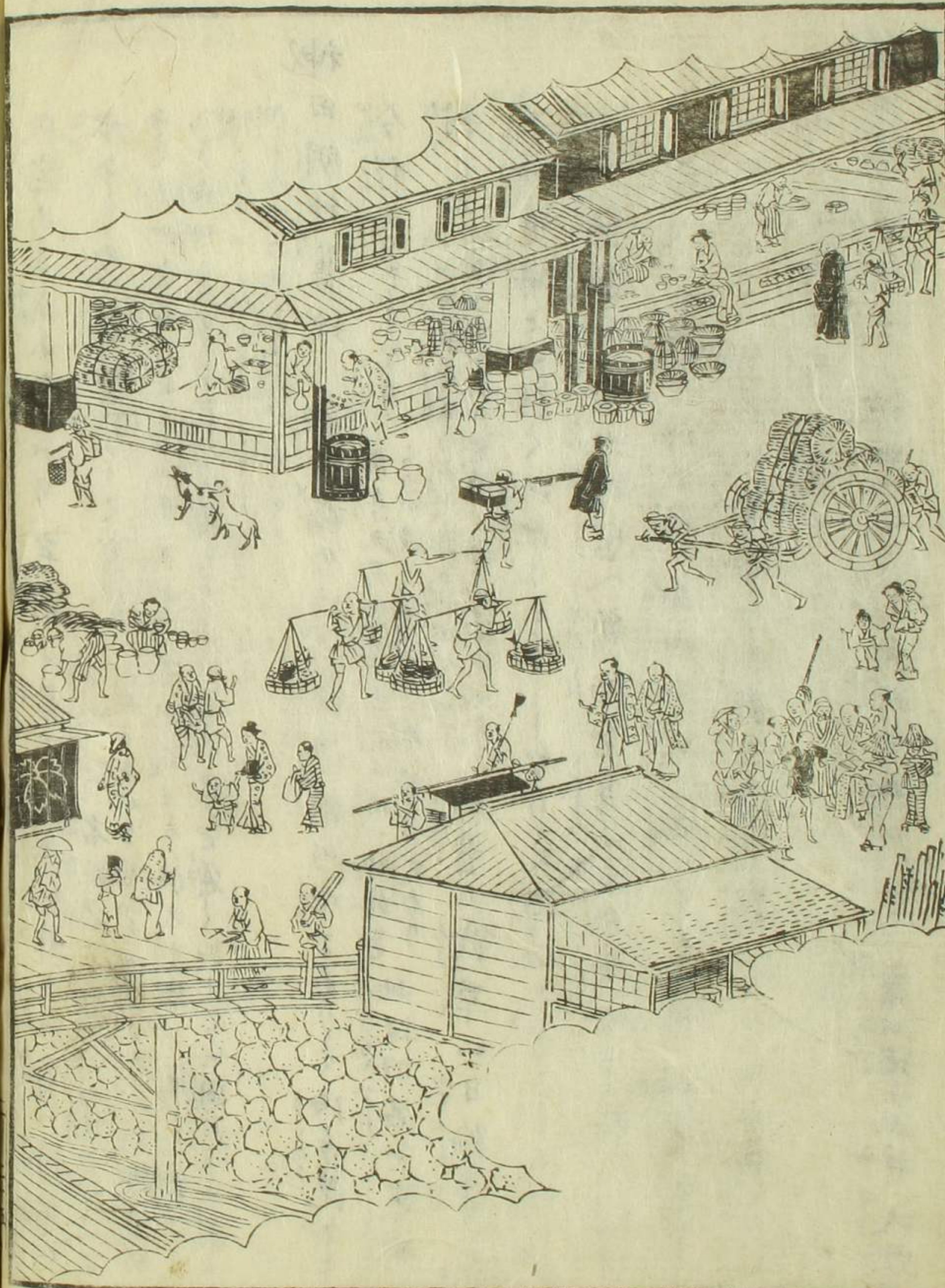
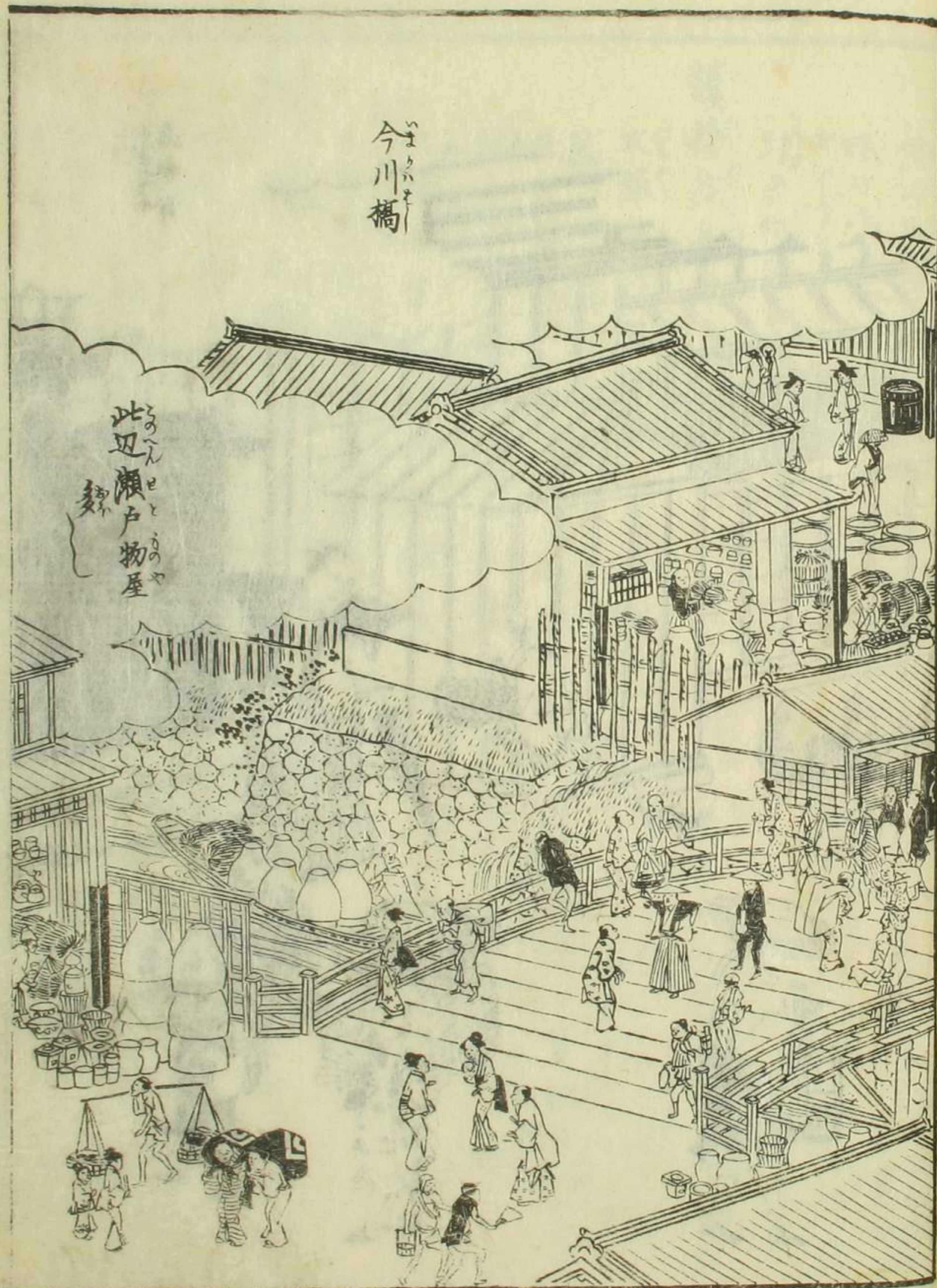
神田明神と号けなまこしと

神田橋 大手あり神田への出口小架を御門あり昔此地小土井大炊

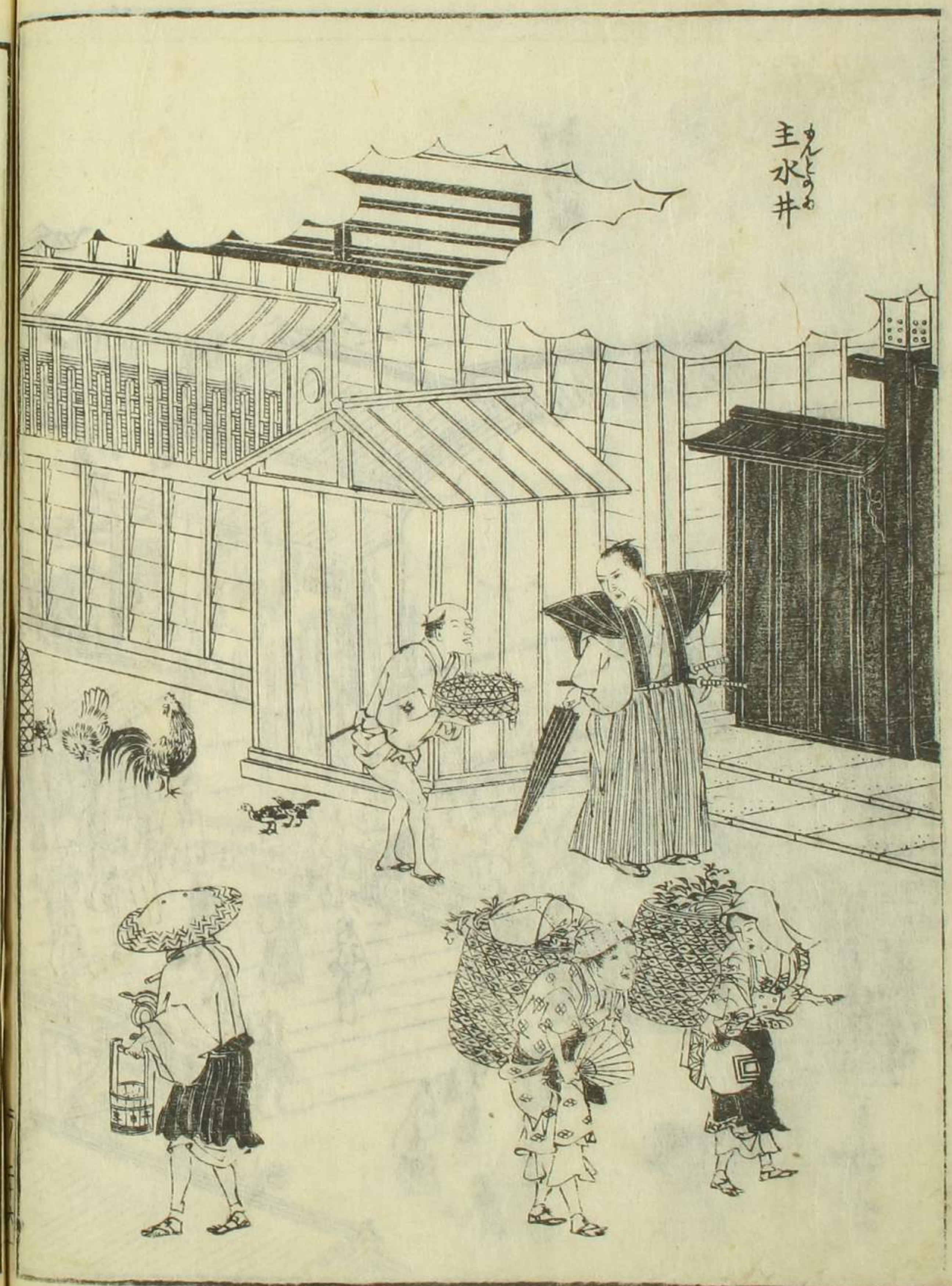
の地あり是を神田或は神田河田と唱へしなり此地は當國の

今川橋

此辺瀬戸物屋



主水井



侯の第宅あり一故小又大炊殿橋とも号するなり
橋の外小茅商人あり住す今の八丁堀の茅場町是なり又平後
中河と辻今中河の茅場町と云ふこのなりと云ふ
外の町をまゝと号く神田と号く

護持院舊地

神田橋と一橋との間沙溝の外の芝生を云此所を

大塚護持院の舊址なり
元禄年間柳原の南あり知足院を引
護持院と号られ殿堂建立あり事保

田録の後大塚の地へ
移され後明地あり
林泉の形残るる頗る佳景なり
夏秋の間八是を

閑うせしと都下の人ら遊ふをゆるさる冬春の間八時とて

大將軍家ら小沙遊獵あり故に此所を新駒原とも唱ふ

となり世俗ハ護持院の名と呼へし

菰

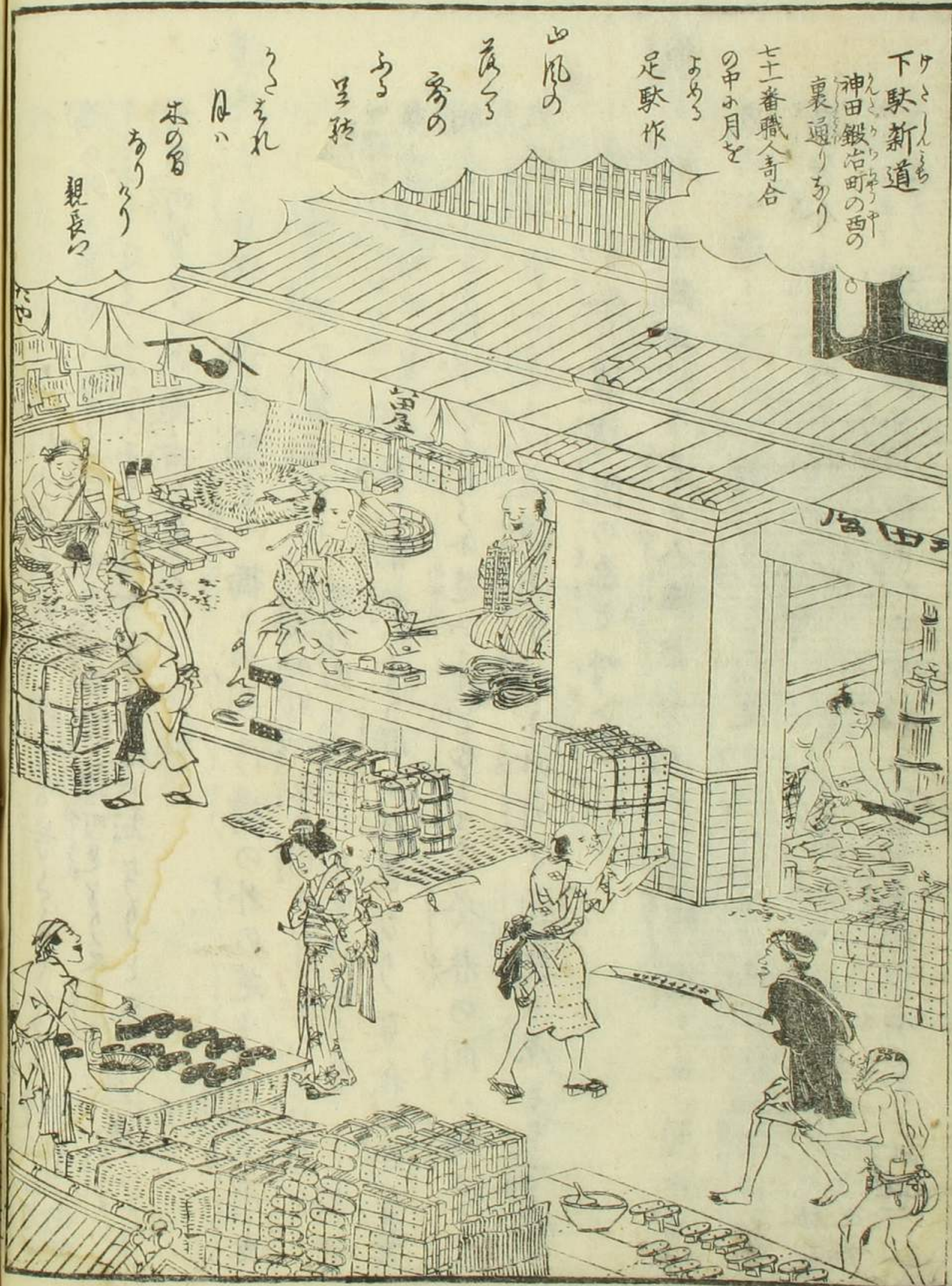
う淵 元飯田町の東の入堀を号く蟋蟀橋と云ハ同所北の

方の小溝架を石橋の号なり又小川町より九段坂へ向ふ所の

橋を今魚板橋と唱ふ又組橋と云ふ所を号く此所を

田川と云ふ世継稻荷ハ飯田町の中坂ハ阿豆文安の頃より此地に

あり



下駄新道

神田鍛冶町の西の裏通りあり

七土番職人奇合の中月を

足駄作

山凡の

秀の

三張

それ

本の名

親長の

鎮座ありと云傳ふ

其頃ハ市谷長圓寺谷ノ大沼あり今ノ揚場町昔ハ船河原と云其船河原の辺を川の沿水流と云此入堀の所へ續き又小石川根本侯橋の下の水流も三崎指荷の辺より川町と経一橋より小石川東南へありて流ると云

按此詠風調ののそくを考ふるに堪ふ所のありしを考ふるに其の神田の淵と云内藤大和守の神田の淵と云

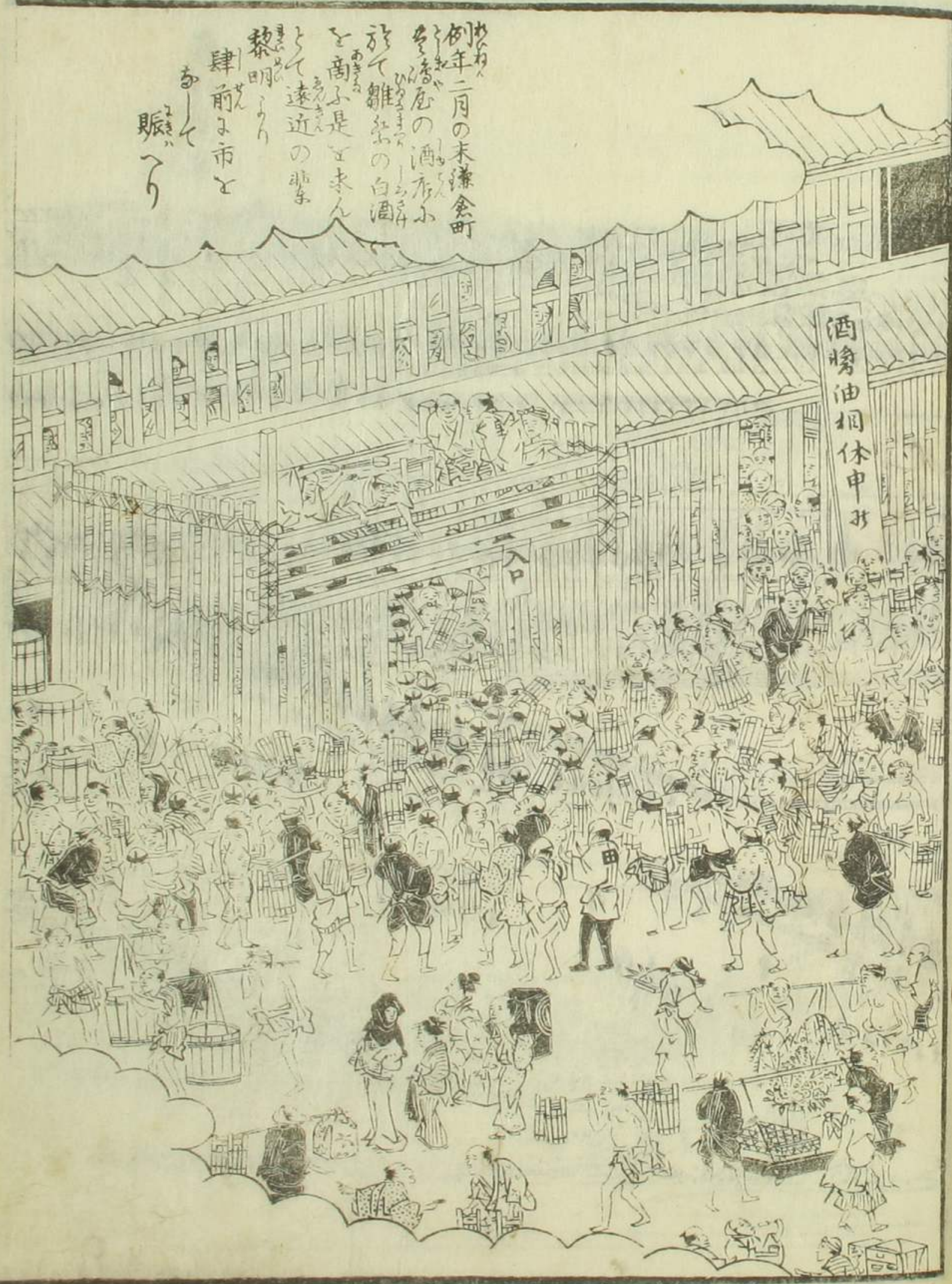
関東古戦録 太田道灌は地球あり一頃眺望の和歌と云むと云く小川のほとり終すて者の根ををありひと云

按此詠風調ののそくを考ふるに堪ふ所のありしを考ふるに其の神田の淵と云内藤大和守の神田の淵と云

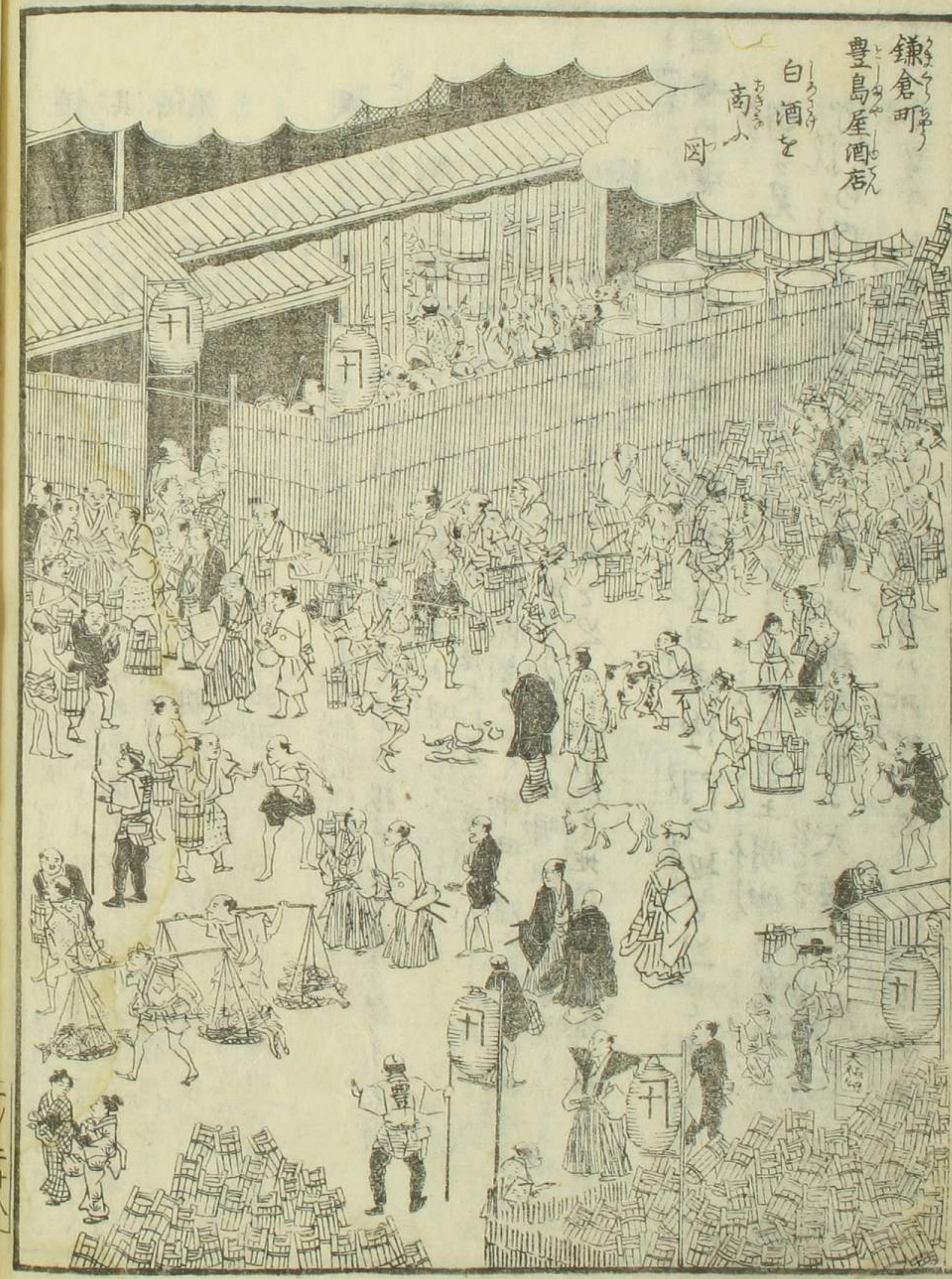
田安の臺 元飯田町九段坂の上田安浄門の辺と云と東南の方を

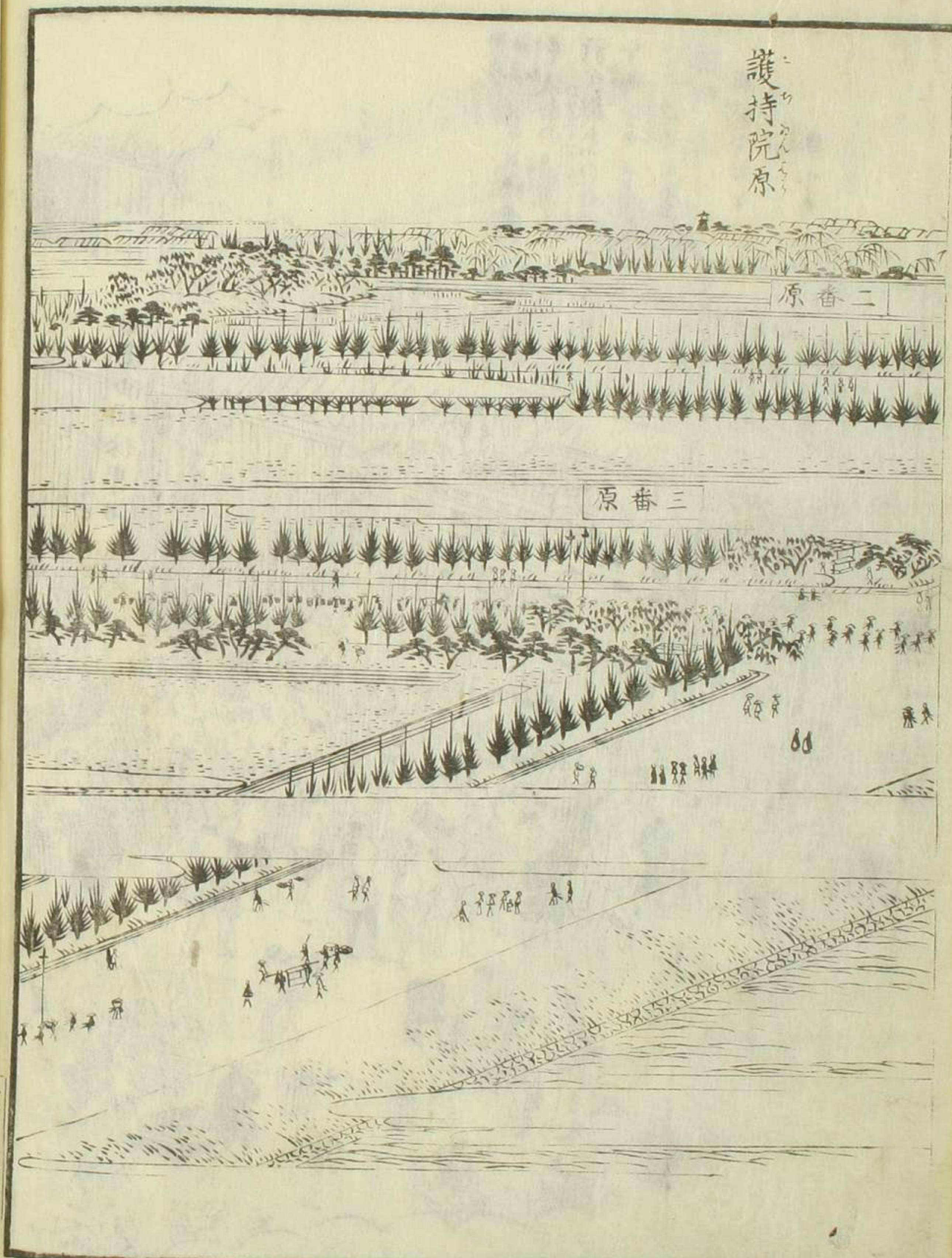
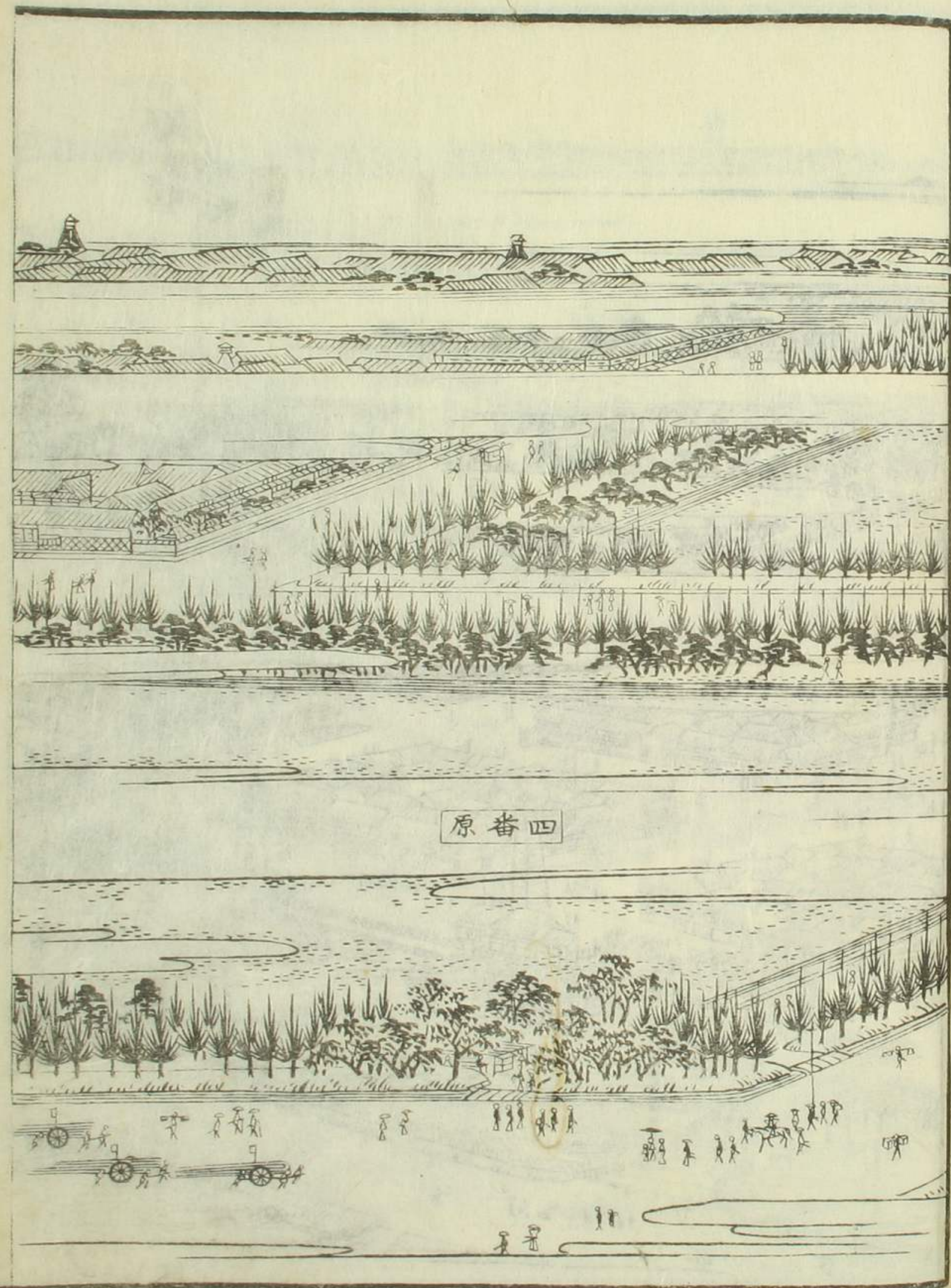
斜に見下し佳景の地なり此所ハ築土明神の舊地あり牛込浄門の内米倉家の所なり此構の前ハ大榎一株あり昔の神木なりと云傳ふ築土明神昔ハ此地ハありと云田安明神と称す

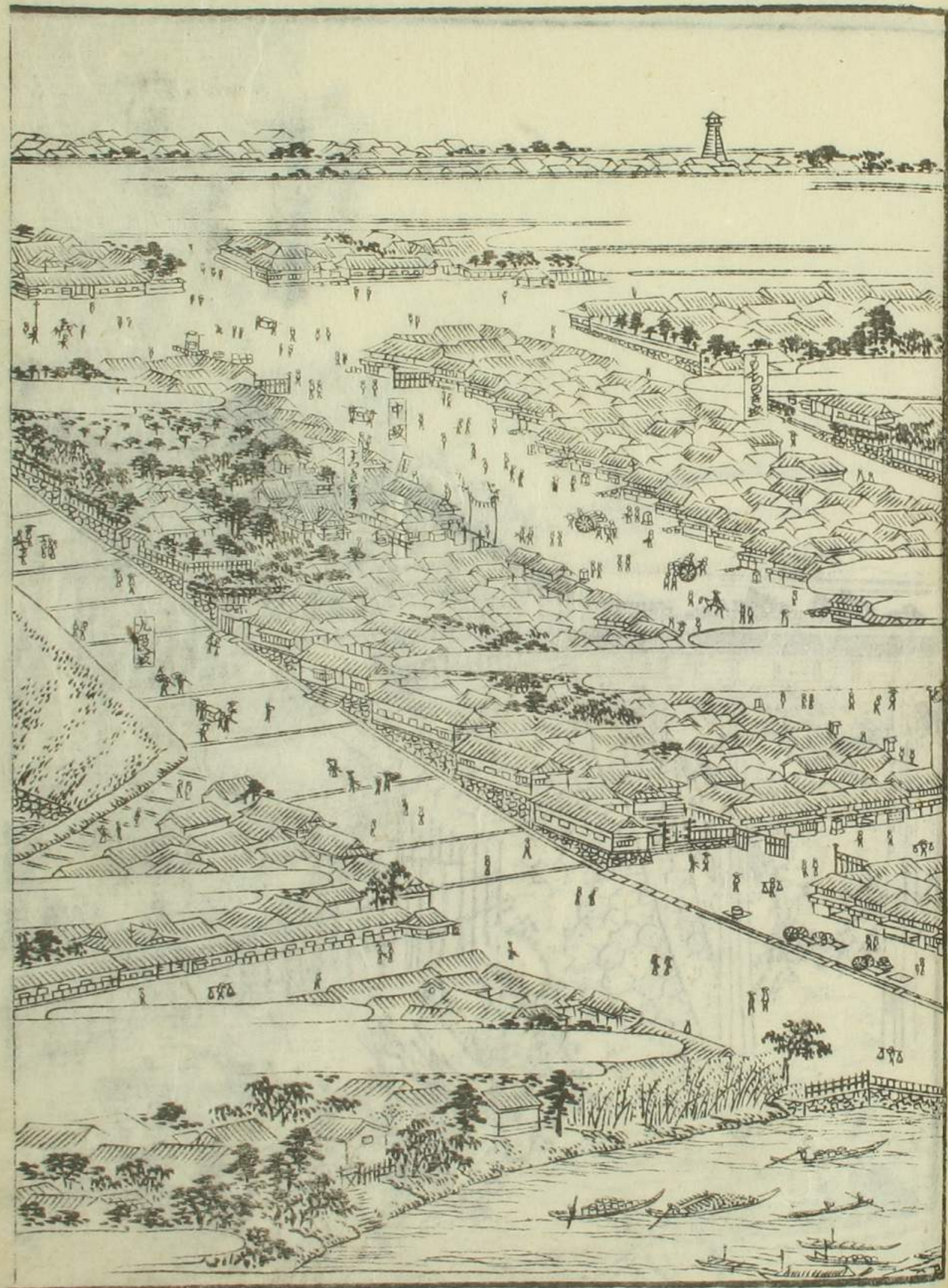
例年二月の末鎌倉町
 の酒市
 於て維新の白酒
 を商ふ是と未ん
 遠近の非
 黎明
 肆前より
 賑ひ



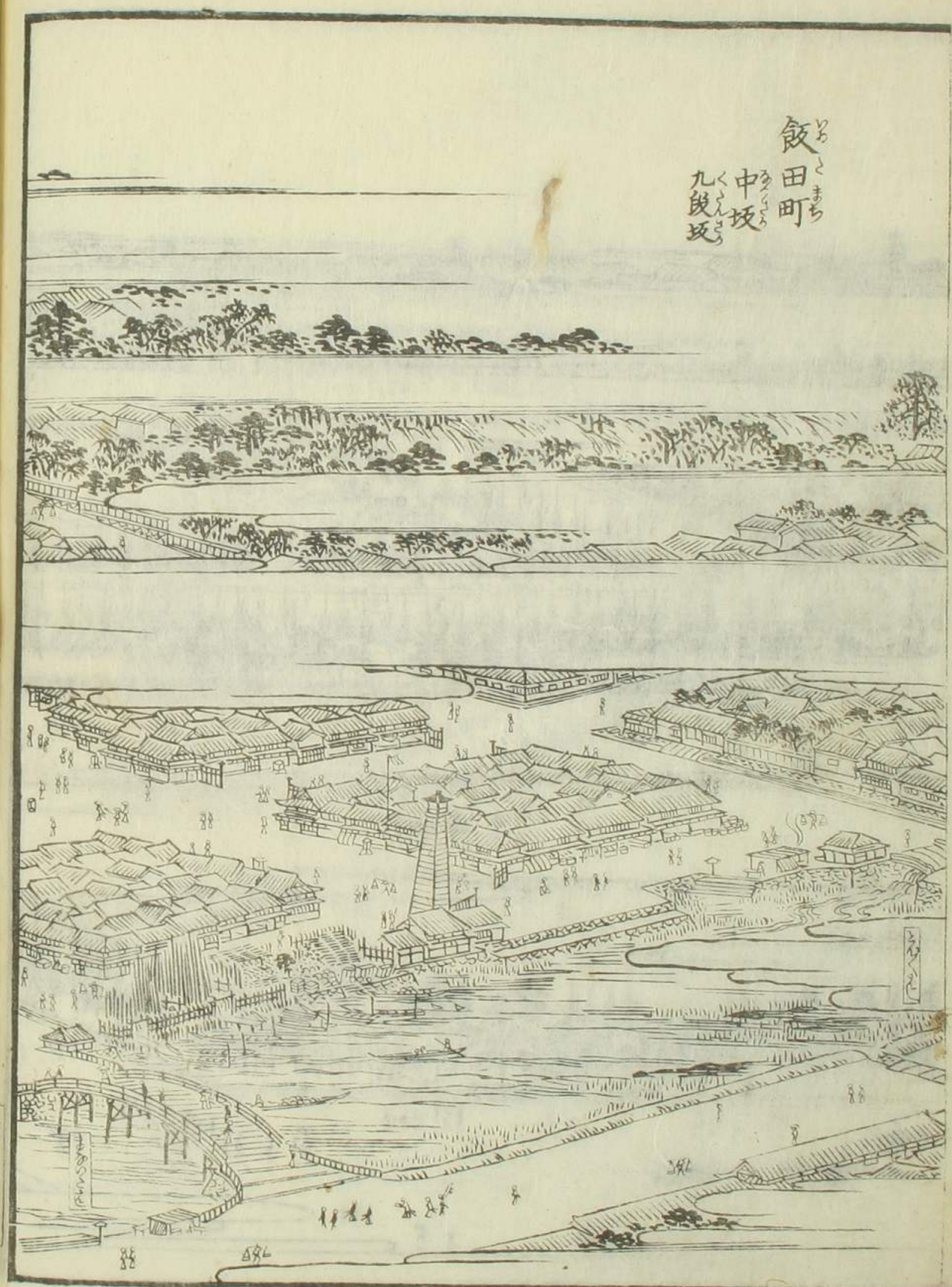
鎌倉町
 豊島屋酒蔵
 白酒を
 商ふ
 因

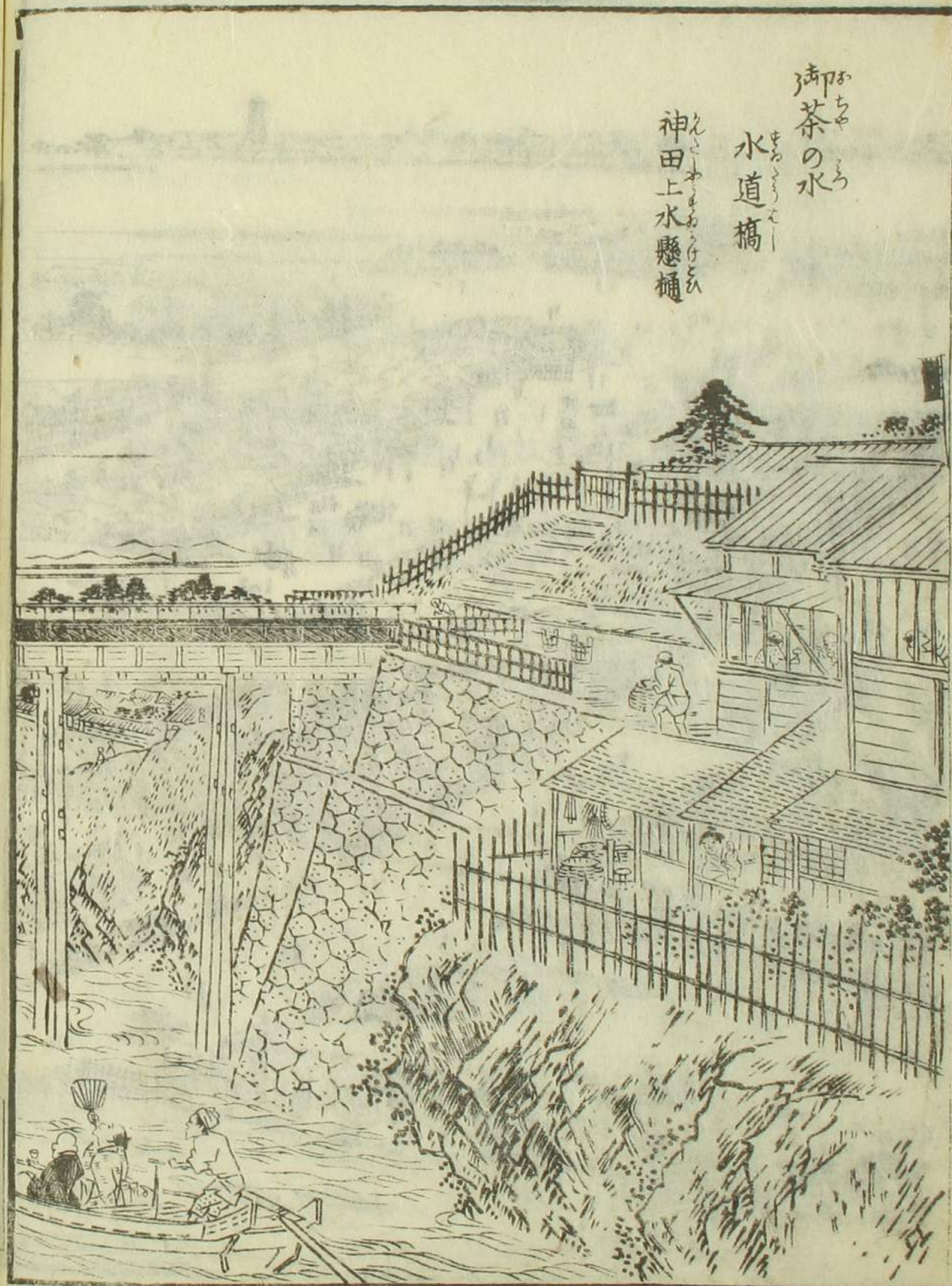
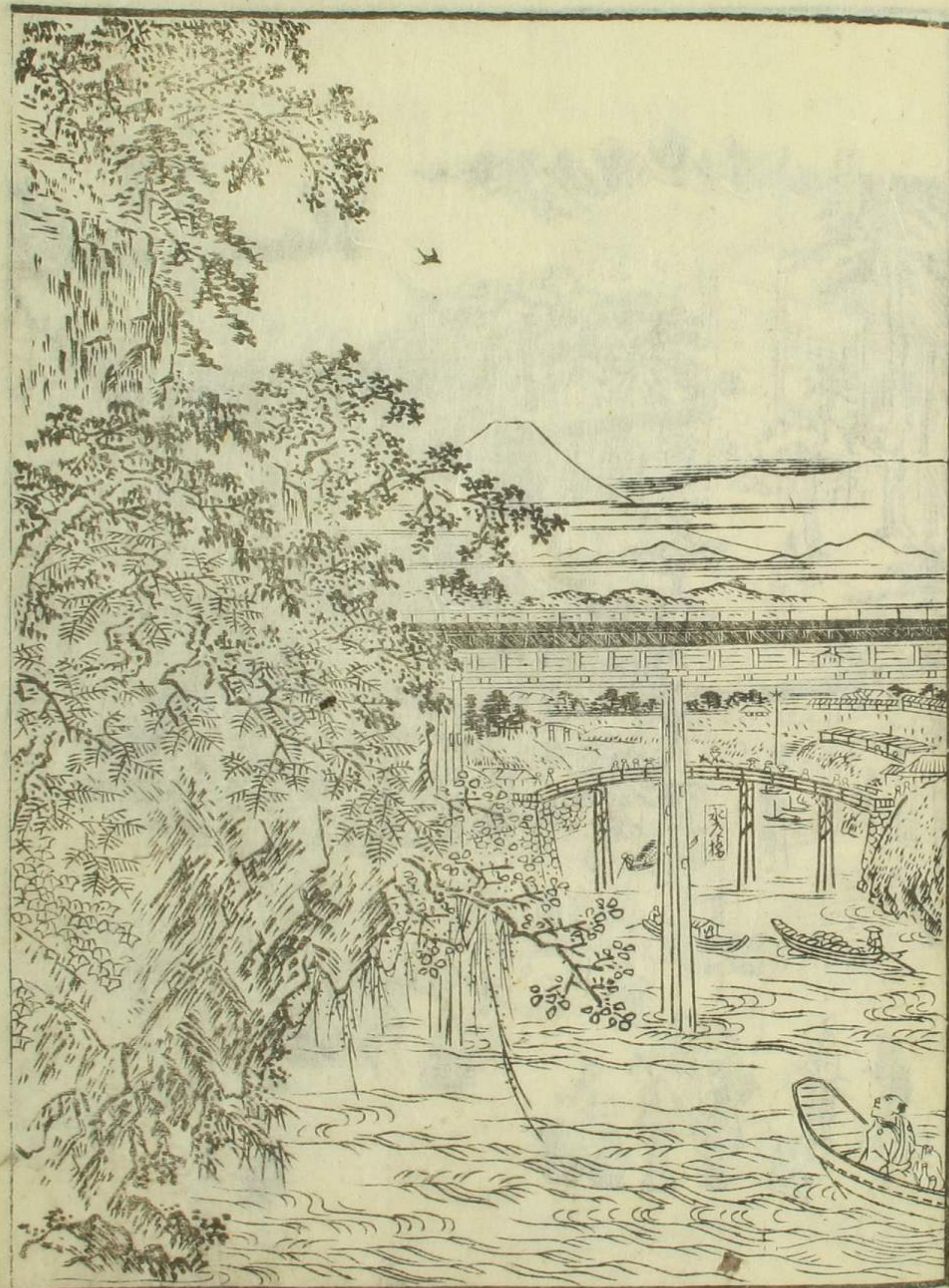






飯田町
中坂
九段坂



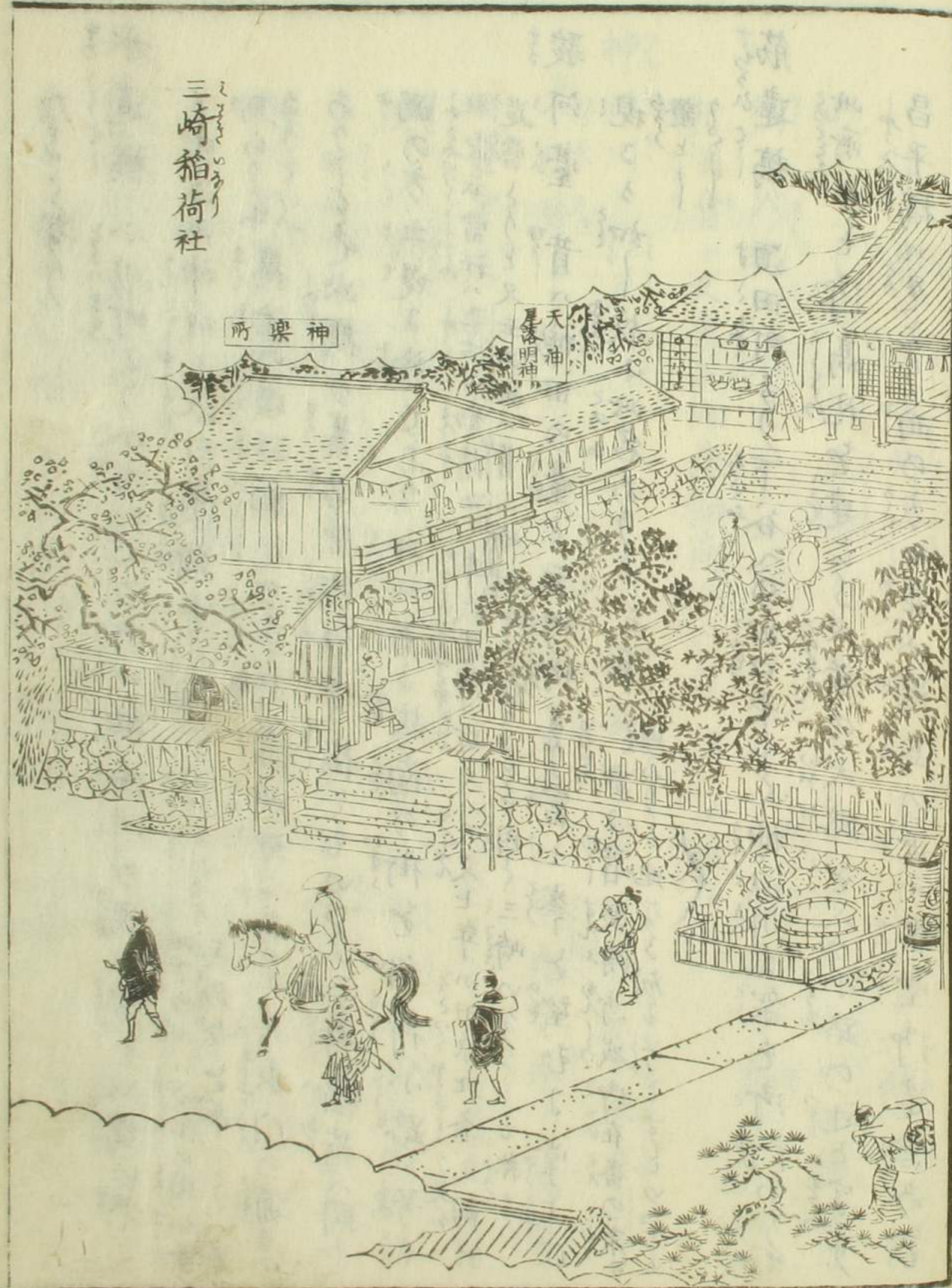


御茶の水

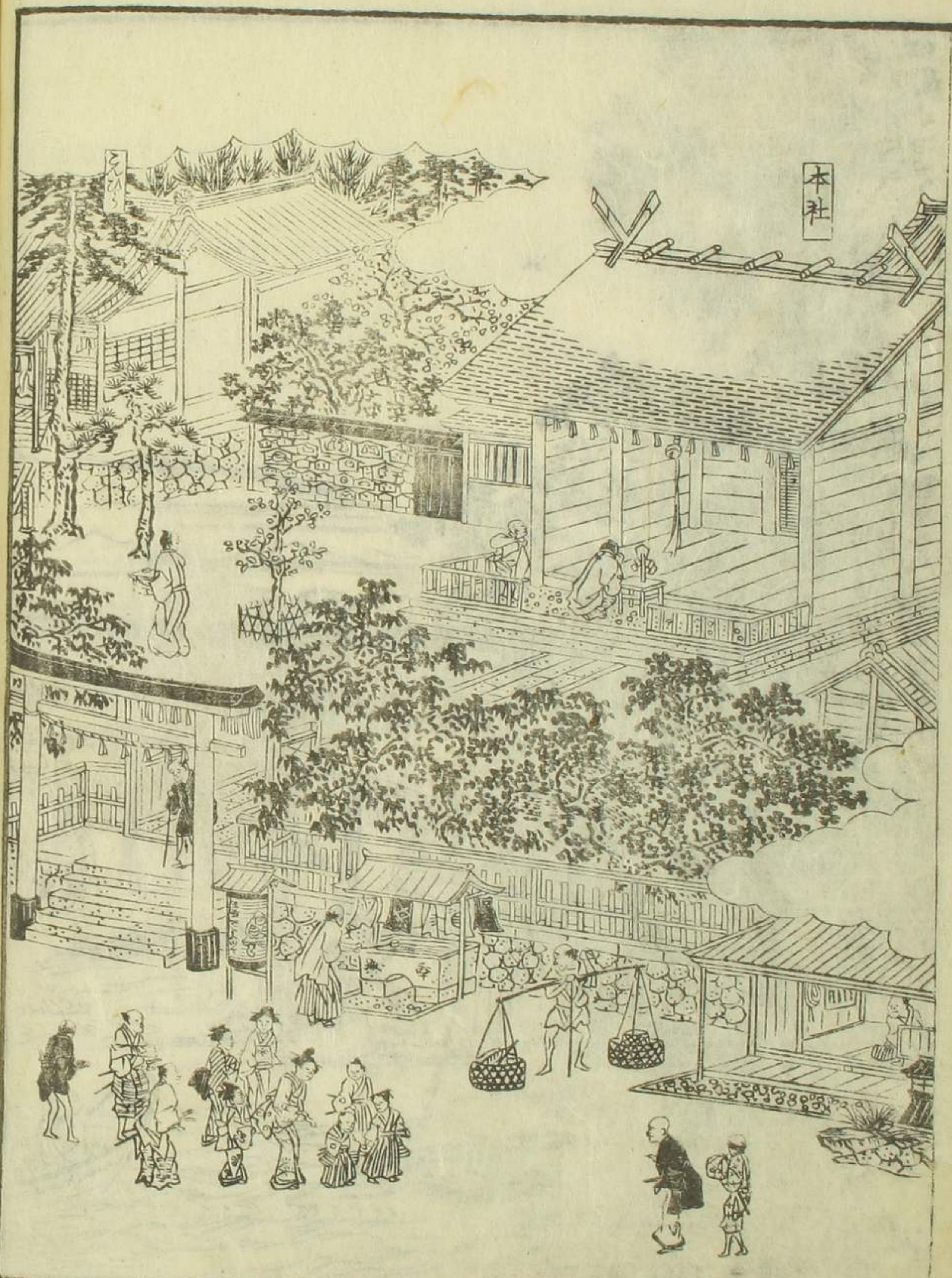
水道橋

神田上水懸樋

三崎稻荷社



本社



たるとなり

水道橋

小川町より小石川への出口神田川の流は架を此橋の火す

下の方小神田上水の懸樋あり故は号とす

割らうふ 萬治の頃迄駒込の吉祥寺此地あり其表門の通のふ

ありしとて此橋の舊名を吉祥寺橋といひつり三崎稻荷八同し

西の方土壇は傍てあり此社ある故南の街を稻荷小路と号く

社記云當社ハ古の勸請ゆき神代不詳近く天文七年小田原北条氏綱は

造營しりと又云此地ハ昔三崎村といひしを因り三崎のありしと稱す

駿河臺

昔ハ神田の臺と云此所より富士峯を望むは掌上に

視る如し故ハ此名ありといふ

賜りし地なるが号とすとすといふ

筋違橋

須田町より下谷への出口中々神田川は架を河原ありて

此所ゆへ河高札を建らる此前の大路をハッ小路の辻と字す

昌平橋ハ是より西の方小並入湯島の地ハ聖堂河造營ありと

神田川

江戸川の下流中々湯島聖堂の下を東へ流大川は

入明曆より万治の頃小至り仙臺彦 台命を奉り湯島

の臺を堀割小石川の水を初てこみ落さると云傳つるを

必しく誤るふ似たり古老の説ハ慶長年間駿河臺の地開け

一取小至り水府公の藩邸の前の堀を浅草川へ堀つけし

其土を以り土壇を築き内外の隔となりしと云此説あり

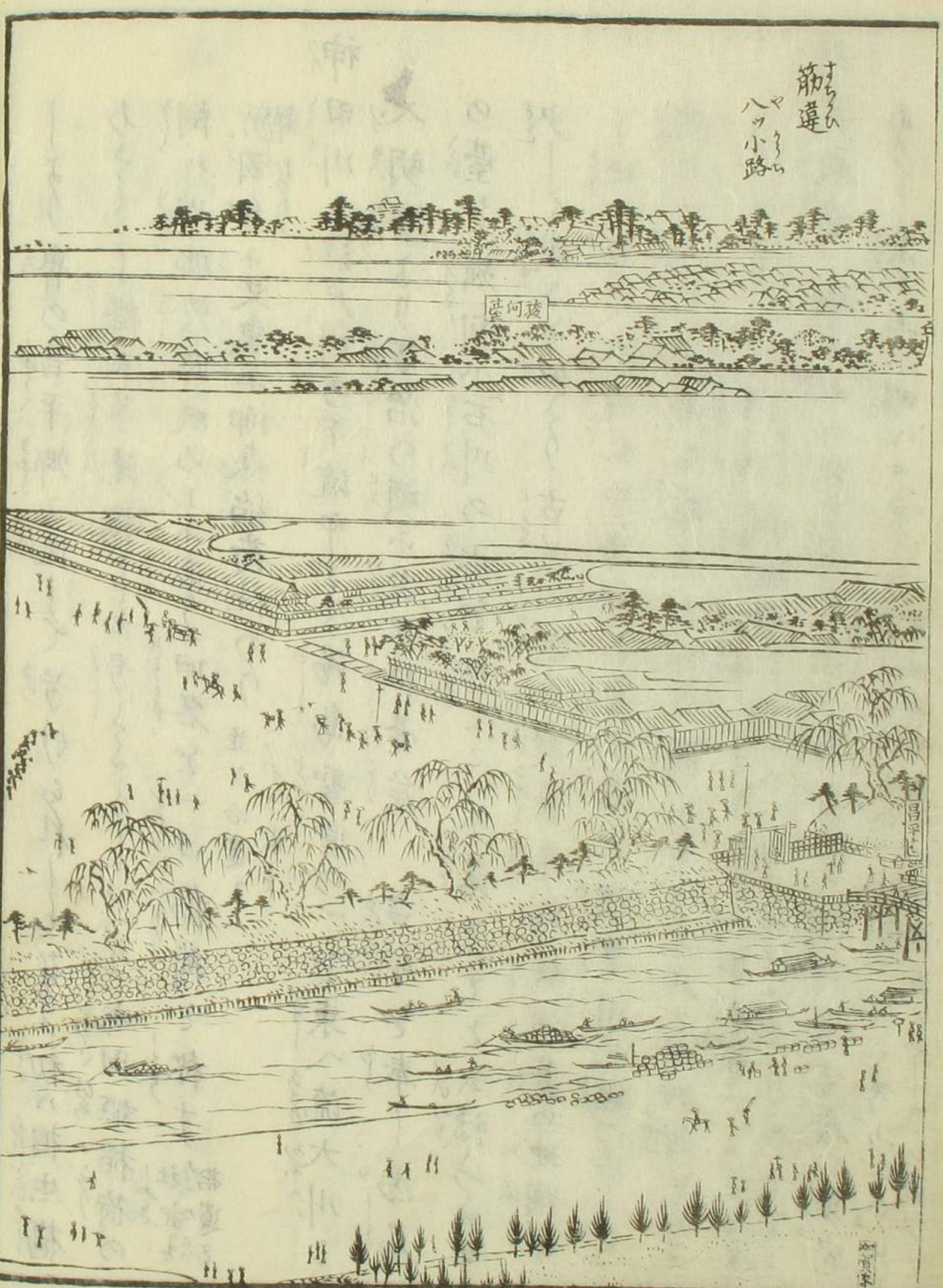
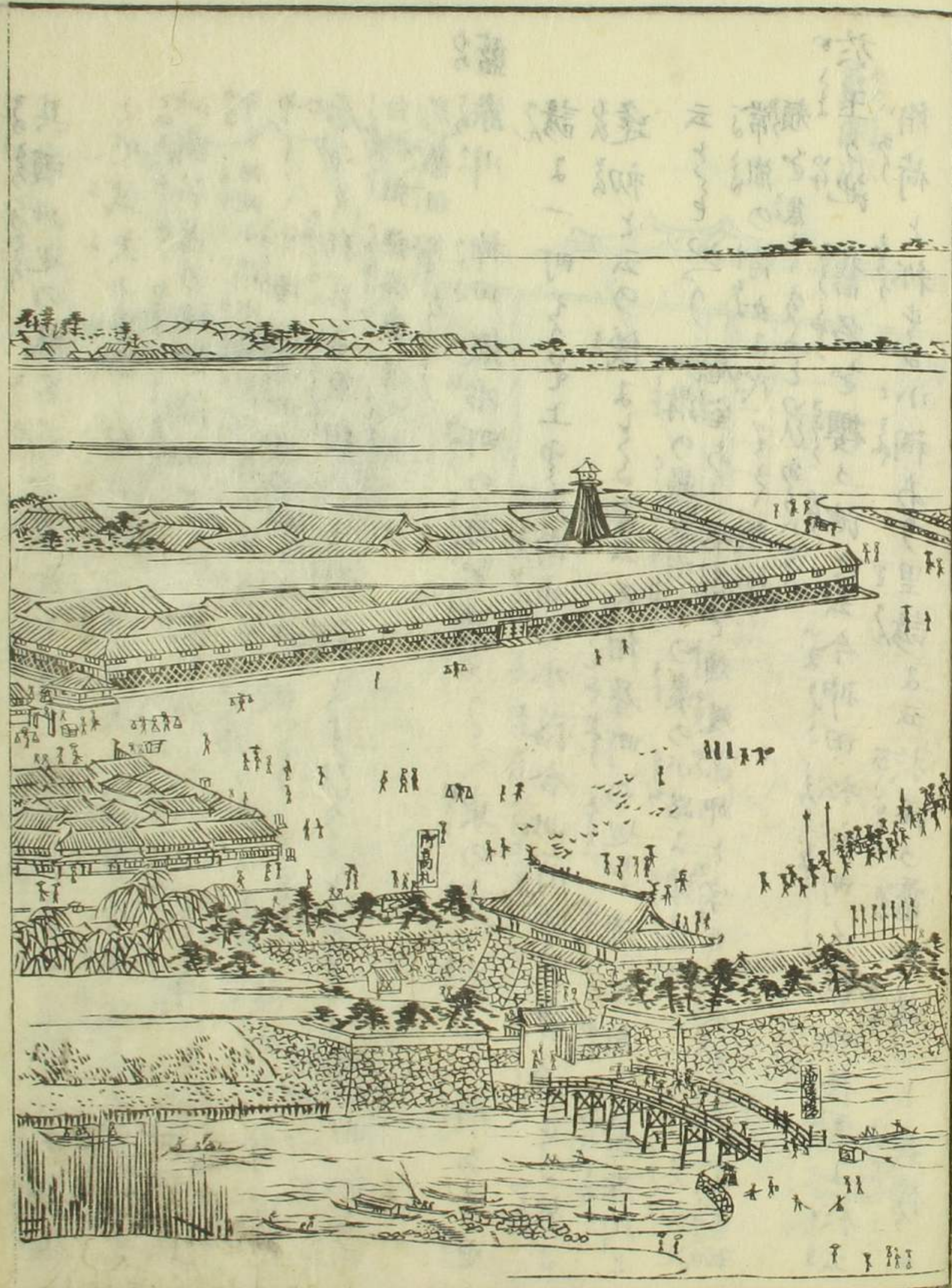
へきこ似たり 按小昔ハ舟の通路を仙臺彦命とてけたま

丹後殿前

雉子町の北の通りをの昔此地ハ堀丹後守殿の第宅

ありしとて 寛永九年の江戸繪圖に因り考ふは今此

津田山州彦の地則堀家のやききの跡あり



藍染川



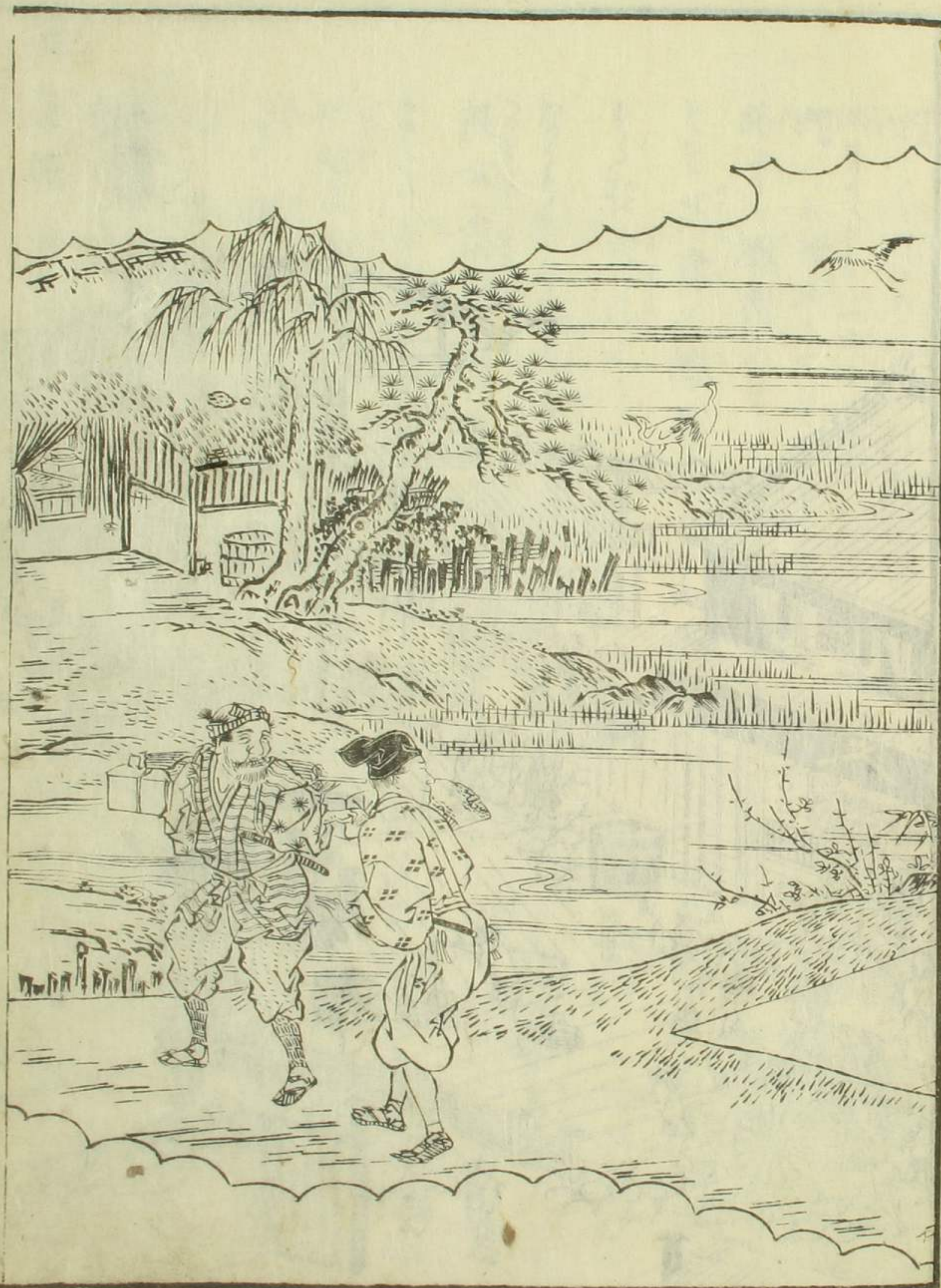
其頃此辺の風呂屋小湯女を置いて客を招きよより又六法組
 とて武夫やあゝ壯年の狭夫大小立髪たてかみの異風わかふうある出立いしでり
 此風呂屋の辺を徘徊せしは是を丹前六法風と呼ぶ
 今も此地の清水屋堀川杯云湯屋あり則昔の湯女風呂
 居あり狂言子取組名も丹前とよひるるとかり
 白柄組 鏡棒組 唐犬組
 荒籠組 等なりかり

藍染川 神田鍛冶町の通を横うり東の方へ流る溝あり里
 諺よ一町そと上りく南北の水落合此所ゆく會流あひまる故よ
 逢初と云の儀よと云又相屋町の辺を流る故よ藍染川と
 云ととと
 常胤とねの侍女さむらいめよ代しろり自ら
 頬ほを焦やしあめをひあつハセり
 於玉たま池 舊名を櫻さくら池と云今神田松枝町人家の後園ごゑんよ於玉
 稻荷いなぎと称なづる小祠こゐらあり里諺よ云於玉たまの靈たまを鎮まつると其傍そばよ

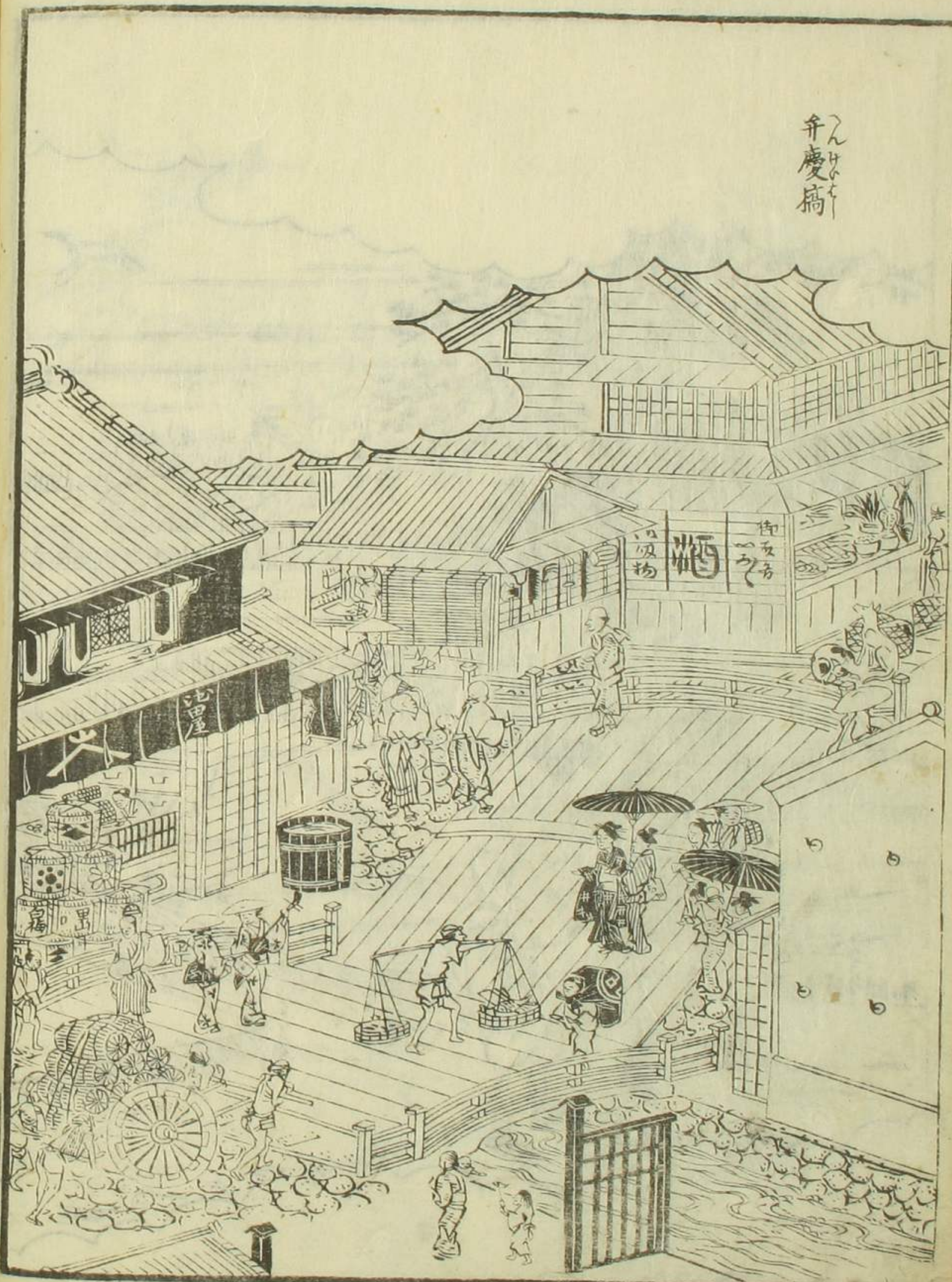
此溝の端鍛冶町の裏の小路こうぢよ兼善けんぜん院いんと此本このほんる昔むかし千葉ちば助すけ

丹前六法風
 丹前八丹後農
 前まへの囃はな語ごなり
 後のち小奇舞せうきぶ妓ぎ芝しば

所謂六法
 神流組 鶴鴉組



弁慶橋

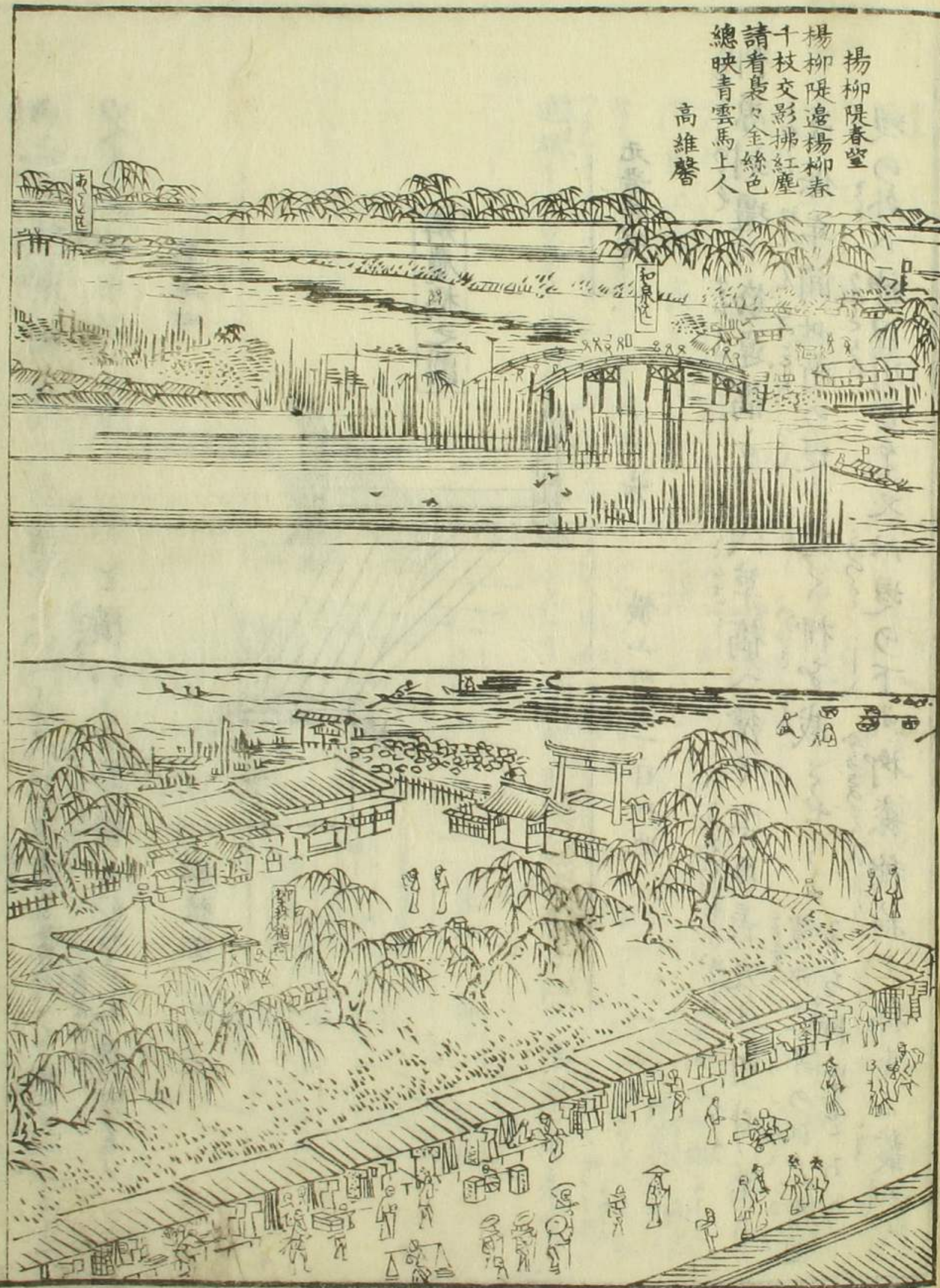


辨

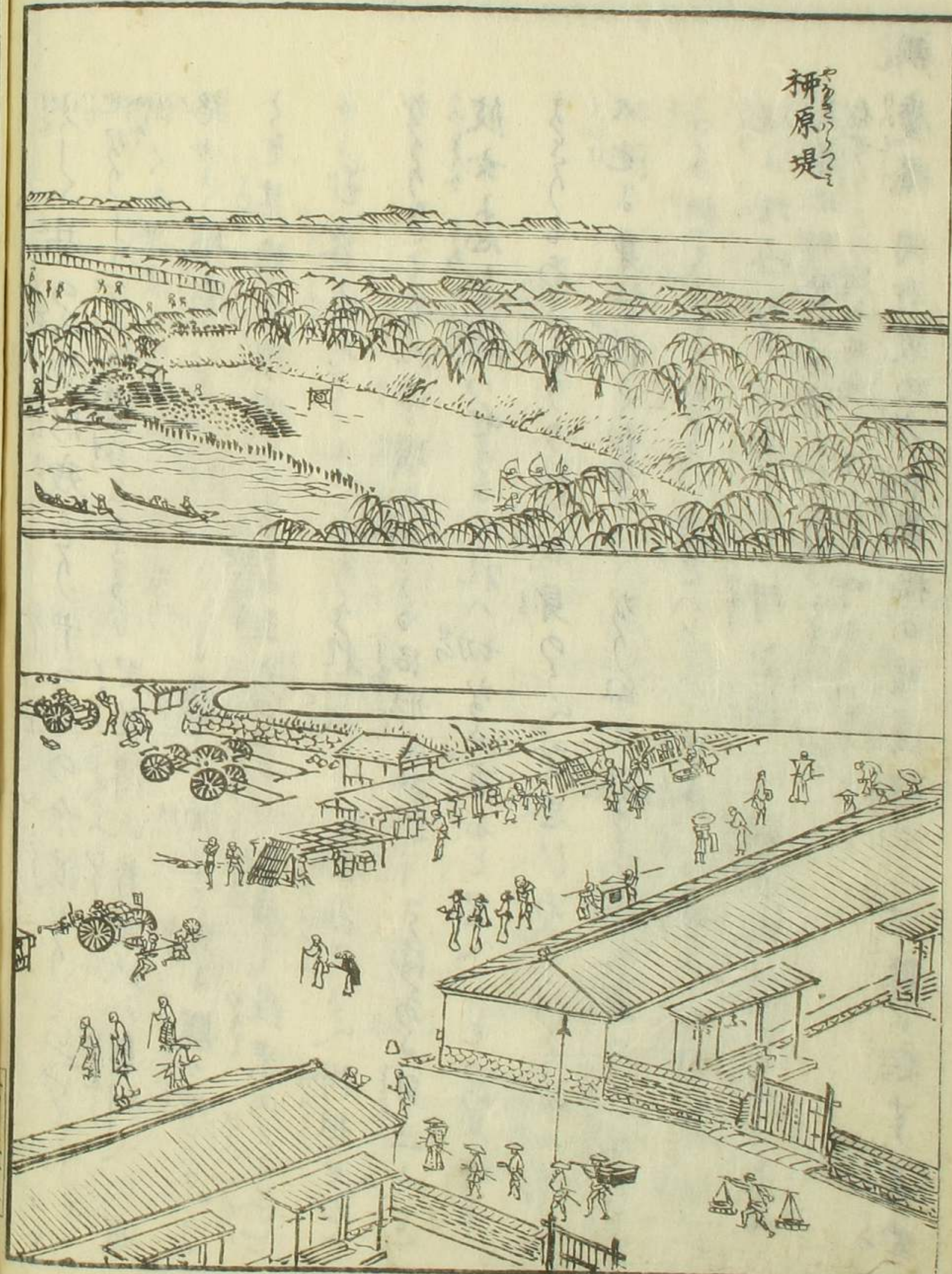
火く井のぬき形残り昔の池の余波なりとて
池のぬき 江戸の繁昌よきなり
湖のぬき 櫻樹あまのぼりあり池なる久小櫻り池とてり
 とそ其傍の櫻樹のともふ玉とてり女也居る往來の人茶を
 せむ容色たつとあつたり心とぬ旅人さへ掛想せぬハ
 なるりきとらん中頃人々も品形もあつたりある男二人と
 彼女よ心を通りせるとされハ切なる方と思へともいふ
 まつりもあつたりこれハ我身のうへを思ひあつたり女ハ終
 此池よ身を投ぐむなりぬと津の國の求塚の古
 りみ似つともあつたり色ハとて里民打寄く亡骸茂池此
 迎よ埋みある一木を植る記念の柳とハ号ると云
 其舊址明番の回録はとひあるとも今ハ石の
 存せりこの池とて呼あつたりとてり

慶橋 同所東の方和泉橋の通藍赤川の下流に架す其始

楊柳隈春堂
 楊柳隈邊楊柳春
 十枝交影拂紅塵
 請看長々全綠色
 總映青雲馬上人
 高維馨



柳原堤

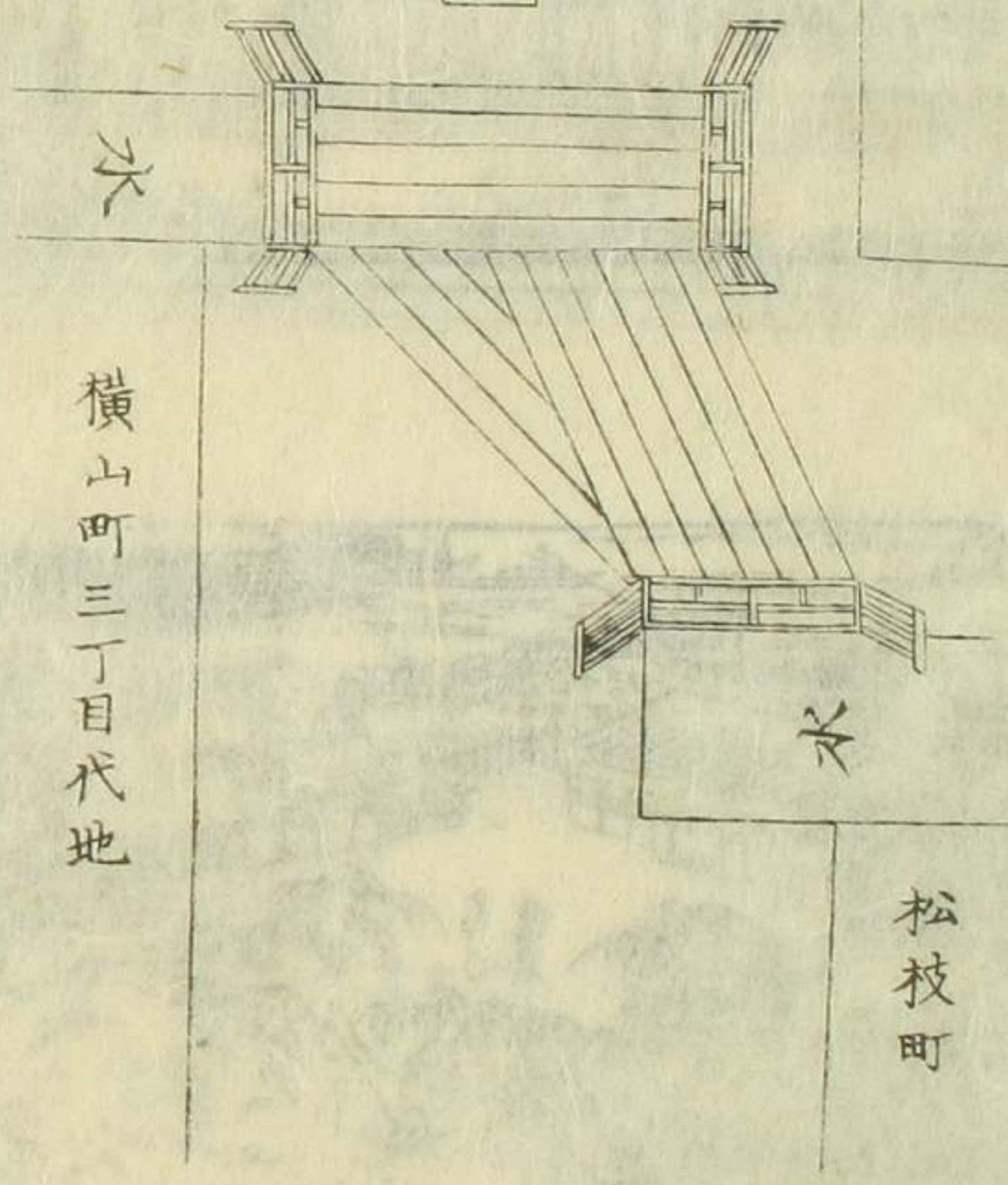


西大工棟梁辨慶小左衛門といつる人の工夫ありて懸初と
 して此地の形は應一衢を横切く筋替はわする尤奇なり

岩本町

松枝町

辨慶橋之圖



元岩井町

横山町三丁目代地

柳原封壇 筋違橋あり 浅草橋へ續く其間長凡十町あり
 享保年間此所の堤小悉く柳を栽させり 寛永廿一年の江戸繪圖
 堤の外ハ神田川なるを又此堤の下小柳森稻荷と称する叢祠あり

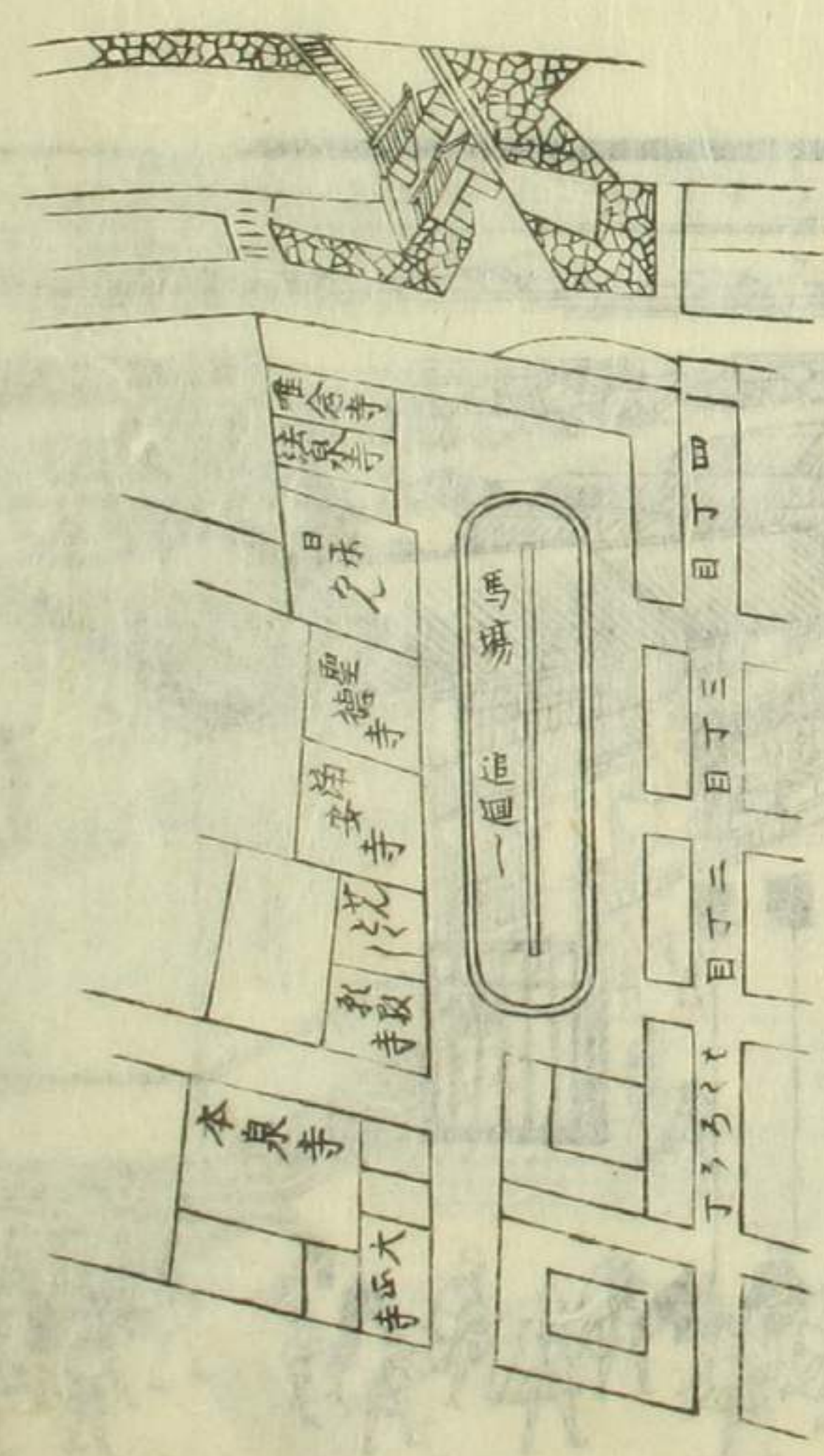
故に此地を稻荷河岸と呼へり

昔ハ神田川の隔ちて此川の南北より
 柳を栽し柳原といひ廣原ありしなり

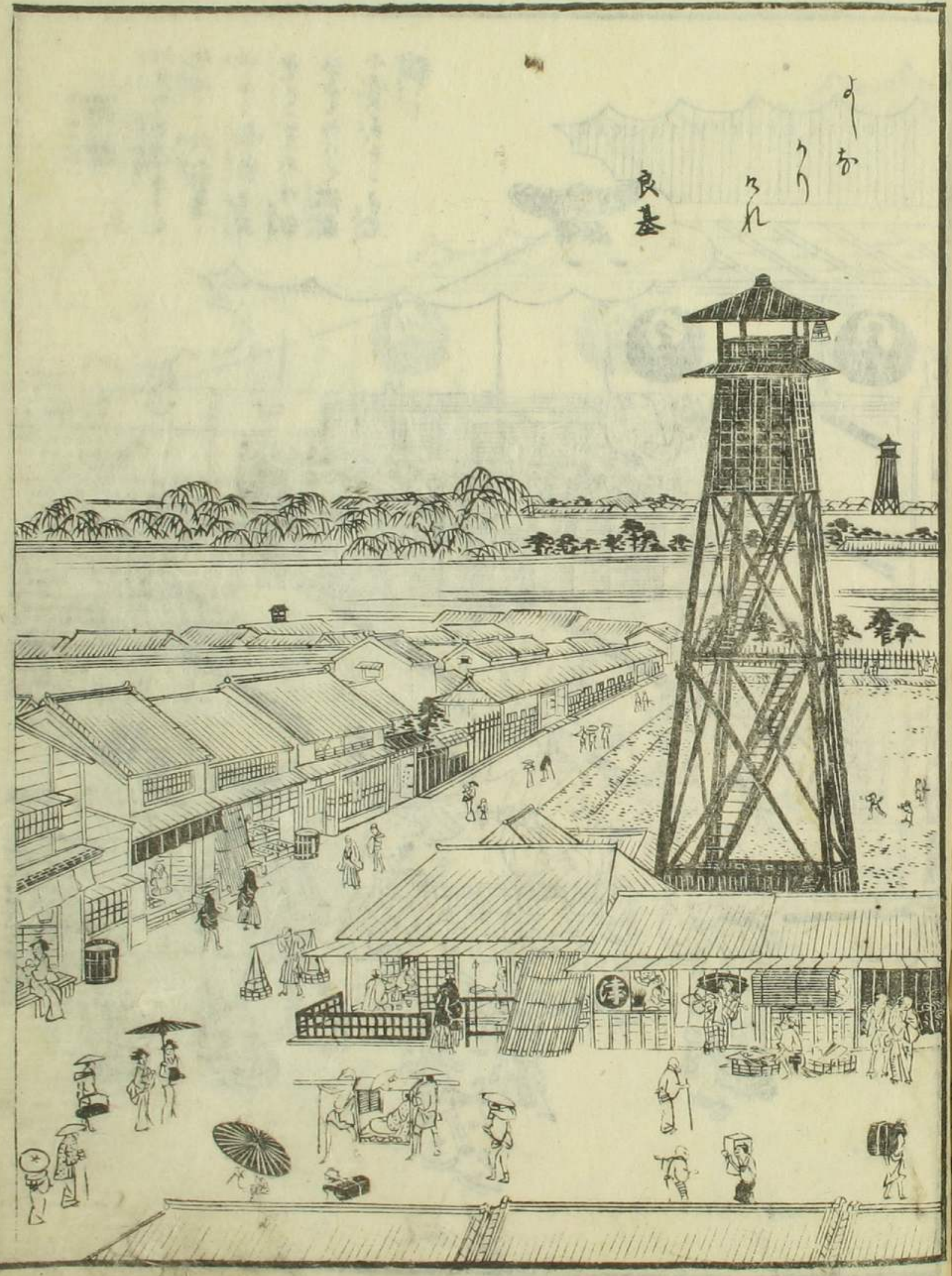
馬場 馬喰町三丁目の西北の裏通あり 江戸馬場の中最も古

慶長五年関原陣の時馬揃ありし所なりと云傳ふ
 此地を馬喰町といふ此地由緒ありて
 昔ハ富田半七と高木源兵衛と兩人

馬工郎高木源兵衛是を預りたり
 此地を寛永廿一年繪圖のありまめりといふ草紙に
 未ハ馬喰町といふや侍ありて云々頃ハ
 追廻といふのひく左のめり形ありしなり



浅草橋 神田川の下流浅草馬場の入口は架を此所より高札を建



良基

これ

うり

りか

馬喰町馬場

鶴岡放生會職人奇合
博勞意

あへん

世の

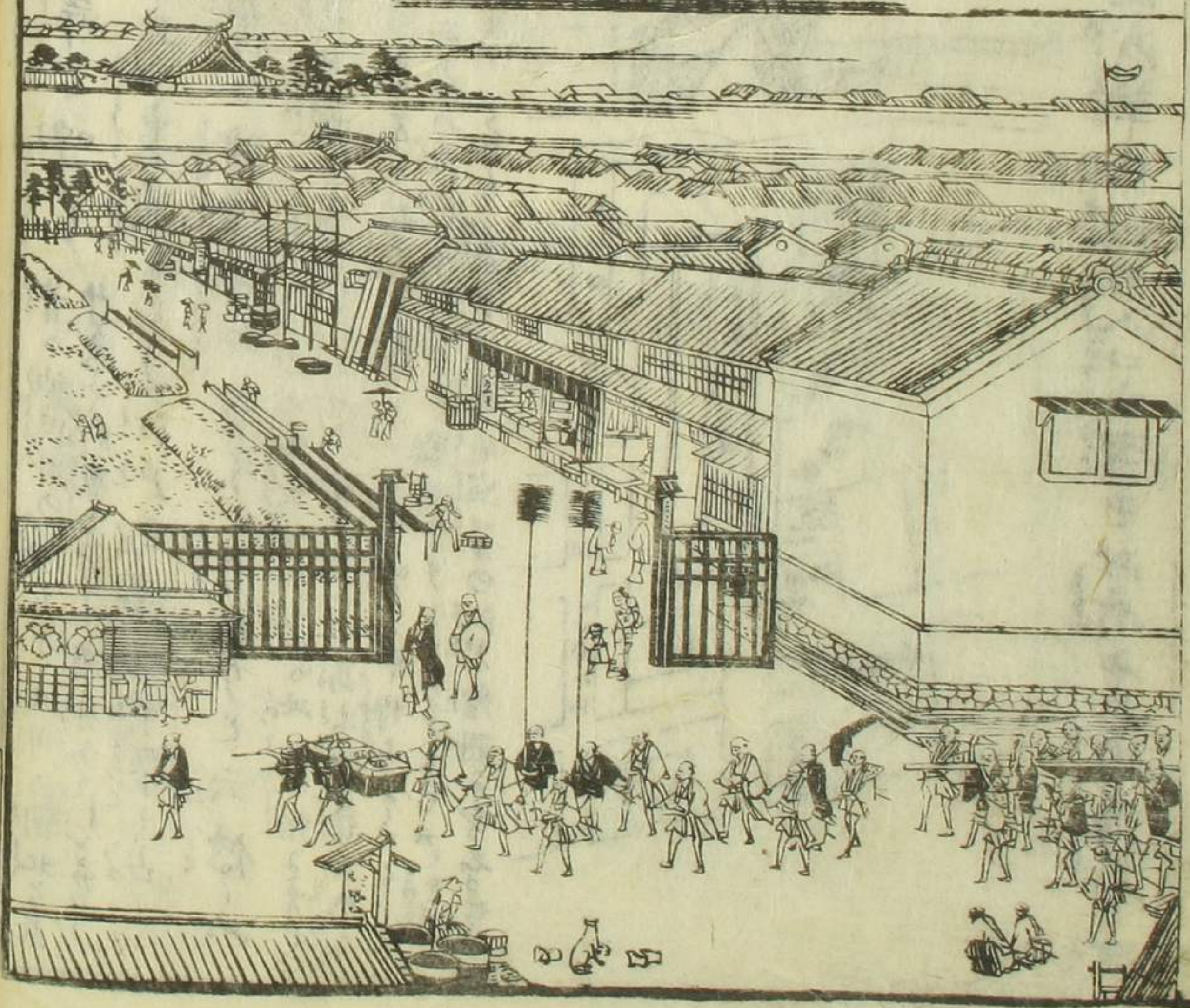
くふもわれの

あへん

つは

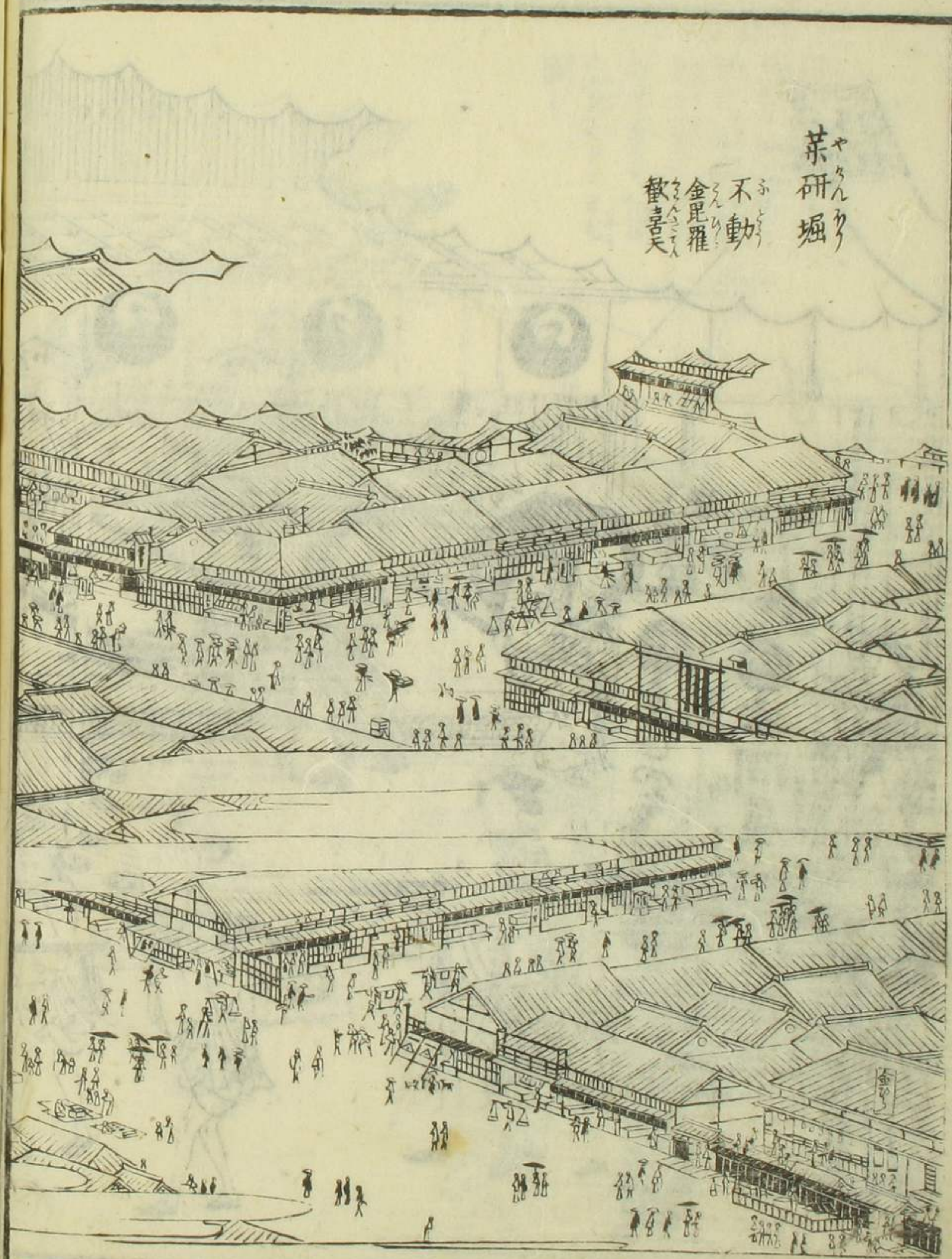
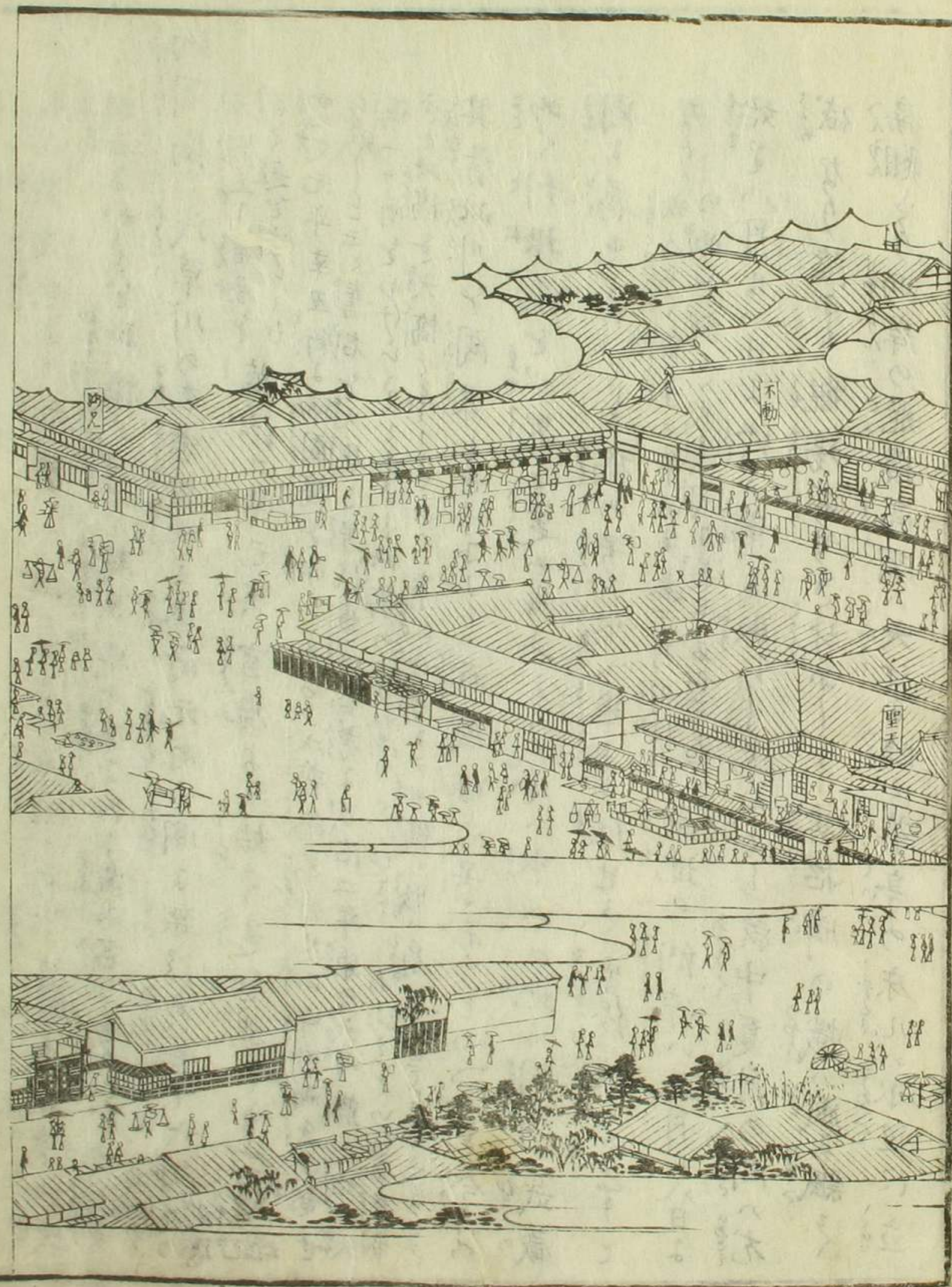
と

門内中茂





錦繪
 江戸の名産中て
 他邦に比類なき
 中々極彩色珠
 更なる笑の内解
 ひちありて諸國
 不賞美と云ふ
 駁一



メステ

らる馬喰町より浅草への出口や千住への官道なり此東の大川口よかると杵橋と号く杵原堤の末はあふ名とせるとそ

兩國橋

浅草川の末吉川町と本所元町の間は架長九十六間

寛文元年辛丑新に兩國橋を架し其の普請奉行芝山坪内西氏命せられしと云く舊名を大橋と号し事跡合考は治二年東の大川筋に始て大橋一ヶ所を架けしとあり此橋のふりかへり又此橋の形ハ扇を聞きしと云く

其昔此川を國界とせしふより兩國橋の号ありしと云く今も

めく利根川を以界と定めりし後ハ本所の地も同く武蔵

國ノ属中の一と云く橋の号ハ唱へ来るは任せく其終改らんとす

なり或人云く貞享三年丙寅春三月利根川此地の納涼ハ五月廿八日

始り八月廿八日は終る常は賑はしと云く就中夏月の間ハ尤

盛なり陸地も觀場兩せき汁あり其招牌の幟ハ風は飄く

扁翹より兩岸の飛樓高閣ハ大江に臨み茶亭の床ハ水辺に立

早稲田大学図書館

011688984833